

地名研究会報

第33号

平成3年12月1日

鹿児島地名研究会

西 さわ子 はるひあき良実やへと田 幸

アヤ原らめや西田幸子 田平

大田幸子 田平

I. 第33回例会 平成3年6月2日(日) 於教職員互助組合会館和室

(出席者) 青柳俊二・泉 嶽夫・植村悠太郎・大田照夫・小川亥三郎・小川秀直・納 栄蔵・
小野寺伸子・郡山政雄・花田 潔・肥後芳尚・平田信芳・松田 誠(計13名)

II. 優藩名勝考説会 P.112 ~ P.116

(問題となった地名および事項) 牡鹿野・止上・隼人塚

牡鹿野(おじかの)

平田 何か質問・問題はありませんか?いろいろな地名が出てきました。重久・止上・牡鹿野など。

納 112ページに、牡鹿野(オカノ)とありますね。これはどこになりますか。小鹿野(ヨカノ)というのはあるんですが。

平田 現在は小鹿野と読みます。

納 小鹿野とは違うのですか。
平田 同じです。

納 ああ、同じですか。

平田 現在はコシカノと云いますね。苗字はどちらかな、国分高校にはあの辺から来る生徒がいるのですが。牡鹿野(オカノ)というのが古く、小鹿野(ヨカノ)は新しいんじゃないですか。よび方としては。

納 私が勤務しどった会社にですね、小鹿野発電所というのがあるんですよ。

平田 そこでしょう。

納 そこですか。
平田 コシカノ、コシカノと生徒たちが云うもんですからね、小鹿野(ヨカノ)だと思っていたのです。

あそこは旧道ですからね。山を越えることから来た地名かなと思っていたら、江戸時代の門名に小鹿野(オカノ)門というのがあるらしい。だから、オジカノが古い。今日は『地名用語源辞典』というを持って来ましたが、東北地方に牡鹿半島と男鹿半島

というのがありますね。それで、この地名用語源辞典の「オジカ」の説明をちょっと読んでみます。

オシカ(牡鹿) : 接頭語オとシカか、男鹿(オカ)はオジカの転か。何を云ってのか判らないのです。牡鹿半島のオジカの意味は判らないとしています。

納 男鹿半島と牡鹿半島ですか。どうも字がどっちがどっちかと、なんと判らないのですね。オジカ半島とオガ半島と両方あるでしょう。

平田 はい、両方あります。

納 どっちかが男で、どっちかが牡ですね。

平田 太平洋の方が男で、日本海が牡ですか。逆

かも知れません。よく憶えておりませんが。(太平

洋側が牡鹿:オシカ、日本海側が男鹿:オガ)

納 ピンと来ん所ですね。

平田 牡鹿(オカ)の意味は判らんと書いてあります、牡の鹿がそこでよく目についたということから来ている地名だろうと思いますけどね。これを

小鹿野(ヨカノ)と書くようになって、意味が判らなくなってしまったのが実態じゃないですか。

納 牡鹿舞という民俗芸能があるでしょう。伝統芸能で。

平田 どこの話ですか?

納 牡鹿半島ですよ。

平田 ああ、向うですか。そう云えば、NHKの

テレビでよく出ますね。

納 ものすごい格好でね、太鼓を叩いてやるのがありますよね。何か古代のお祭りというのですか、敵を威嚇するためのものだということだけは判つてゐるんですけどね。

平田 ああ、そうですか。

納 特殊な伝統芸能というのは案外起源が古い。やっぱり、いわれとかがないと残らんと思います。

平田 牡鹿野はそういうことですね。

止上(とがみ)

平田 止上。これは難しい。「トガミ」と読みます。「トカミ・トガミ。ト・カミという地名か、トカ・ミという地名もあるか」『地名用語語源辞典』もそれだけのことですから、全然手掛かりがないという理解をしています。「ト」というのはくせものだと思います。例えば、大和・瀬戸・港・止上。それと「カミ」。鹿児島には田上がありますが、これは「神」ともつながるのじゃないかと思うのですがね。「ト」というのは、山の入口の山門。大和は山の入口でしょうか。田頭とか田口とか田尻という対照的な地名もありますが、田上は田圃の神すなわち田之神とか田神と通じると思います。カミがつくのは、やっぱり、そう云ったところがあると思うんですね。その意味で、「止上」という地名はくせものだと思います。

納 その田上ですね。あの辺を見ますと、田上があり、武(タケ)があり、西田がありますね。連続しております。

平田 ああ、田圃がですね。

納 はい。田圃が連続しとります。人の話によれば、田上は田圃の方だった、と。上(たか)の方だった、と。地図で見れば、やはりそうだなと思うのですね。それから「武」ですが、田下を「タケ」と読んだ。

平田 それは、ちょっと。「武」は難しいなー。

納 田毛という表現もありますね。それから、西田は、やっぱり西かなと思って。

平田 西田は、鹿児島城下の西の方にある田圃ということと、もう一つ国分尼寺のね、尼寺の田という意味も引っ掛けております。(参考出)

納 ああ、尼寺の田な。

平田 薩摩国分尼寺の寺田が西田の方にありましたからね。その両方を引っかけたなあ、という感じがしますよ。

納 話は別ですが、重久から人吉まで距離はどれぐらいありますか?

平田 直線で? 地図を持って来ていないけど。

納 大体、どれくらいのもんですかね。

平田 人吉までですか。50Kmはあるでしょうね。

納 そうした場合に、この社伝の解釈が難しいのじゃないかなと思うのです。

平田 どういうことですか。

納 止上神社は「景行天皇が熊襲を討ち給う時、神の稜威によりたまひし故に御勧請なり」とある社伝のことですが、ちょっと距離が遠すぎやせんかとなあと思うのです。

平田 大和の勢力が国分平野に軍を進めたことは事実のようです。城山山頂を発掘した時、大和の土器が出土しましたからね。4c.末~5c.初には乗りこんで来ているのですね。ですから、あの辺にそういう伝承があっても、何も不思議じゃないのですが

納 これは「神の稜威」とありますからね、神の稜威として、ここに止上神をということになりますよね。そうなりませんか。「景行天皇熊襲を討玉ふ時、神の稜威に頼給し故に御勧請なり」と書いてある。

平田 ああ、これは神のお蔭で熊襲を征討できたと。そこで、交通上の要所にこの神社を勧請した、というのでしょうか。

納 そういうことになりませんかね。

平田 何も不思議はないのでは。

納 おかしいんじゃないでしょうか、やっぱし。

―――――― (議論噛み合はず)

隼人塚(はやとづか)

平田 その次、112ページの上段の5~6行目、これが本来の隼人塚ですね。鹿児島短大の増田勝機さんがこの隼人塚について民俗学的に分析されたのを読んだことがあります。これは田圃の中に残っています。元のままの形にしてあれば有難かったのですが、石で固めてしまって、もともとの山みたいな小高い所は全然見えなくなってしまいました。本来の隼人塚というのは、止上神社から五百メートルぐらい離れた所にあります。それから、重久は平安時代末期の開発名主の名前が残ったものでしょう。止上という地名は要注意という理解で、とめておきたいと思います。今日は小園先生が見えるだろうと期待していたのですが、彼は止上神社のことを学生時代からずっと研究していますから、彼が来るのを期待してたのですけれども。それから止上神社に残っていた神楽の面は現在国分市郷土資料館に展示されています。去年、高千穂夜神樂を見に行ったのですが、現実に高千穂の人たちは神楽の面をつけて舞をしております。止上神社にもそんなのがあったのだろうと思いますが、面が残っているだけです。隼人塚の民俗行事なども残っておればと思うのですが、何も残っておりません。

花田 隼人町の隼人塚と、この隼人塚とは違うのでしょうか。

平田 隼人町の隼人塚は、昔は軍神塚とか將軍塚と云っていました。明治35年頃の5万分1地図に、はっきり、軍神塚と書いてあります。

花田 ああ、そうですか。

平田 これをですね、明治38年頃、鹿児島神宮の神主さんですが、この人が熊襲塚と名前をつけたのですね。しかし熊襲はあまりよくないと云うことですね。

隼人塚(はやとづか)と名前を付けたのです。「はやひと」はなじみが薄かったのでしょうか。隼人(はやと)と人々は呼んだようです。それに基いて隼人駅・隼人町というのが出来たのです。石造層塔や四天王像に鹿児島神宮の神主さんが思い付きつけた名称からスタートして隼人町という行政地名に発展してしまった。もう二進も三進もいかないですね。

花田 あの隼人塚の四天王像は、よく見ると寄せ集めなんですね。一式じゃないんですよ。

平田 そうですね。しかし、あれは大正年間に国指定の文化財にしてしまいましたからね。鹿児島県のお偉方の威光ですね。もう二進も三進もいかないのじゃないですか。

花田 そうですね。

平田 あれをね、正国寺石造層塔と云ったような名称に変えたらいいと思う。平安末の石造層塔・四天王像であることは事実ですからね。そう云った方にもない。

花田 四基のうち、三基は同じ形式なんですね。毘沙門像だけが違うんですよ。あれだけ一基が。

平田 ああ、そうですか。

花田 はい。兜のハネがね。肩から下がる。あれだけ一つ、びょこんと跳ねあがってるんですがね。時代が違うんですよ。

泉 製作年代はいつ頃なんですか?

花田 何ですか?

泉 製作年代。

平田 やっぱり、同じ頃でしょうね。

花田 毘沙門天の肩あたりがちょっと若いだけで50年ぐらいしか違わんでしょう。50年ぐらいの違いでしょう。だけど、やっぱり、平安期の頃でしょうね。

平田 まぁ、平安末、12世紀のものとみて間違い

ないでしょう。その意味では、やっぱり貴重です。

花田 年代は平安末とみた方が一番確実でしょう。平安末とみた方がね。この四つの中で毘沙門天だけがちょっと違うけれども。ただ兜の形が違う。以前の形は下がるのですよ、冠った形が。それからみると平安末のものとみた方が無難でしょう。それ以前には、よほどの文献がないとね、遡らせることは出来ないです。一番下のぎりぎりの線にもって来た場合が、平安末。

平田 一つの目途として、国分寺の石造層塔に康治元年(1142)の銘がある。あれより少し下ると

天道信仰関係の地名

花田 清潔

天道信仰論というのを何か発表しないかということだったんですけども、実は天道信仰論というものは加紫久利信仰とのつながりが非常に多いのでそれと並行して今まで研究して来たわけなんです。

出水に丸塚(マツカ)という地名があります。これが問題の地名になります。この字図にはついていませんが、ここに地図を持って来ていますので、あとでご覧になって下さい。高尾野と江内地区の字図があります。小字図。江内の字図の中に、42番尾ノ島(オシマ)というのがあります。43番は堂山(ドウヤマ)。それから12番ですかね、平房(ヒラフ)というのがあります。これとつながるのが黒之瀬戸(カヒセト)になります。この上の所に加紫久利(カシリ)という地名が出て来ます。この加紫久利山が昔の加紫久利神社の跡で、現在の加紫久利神社はこっちの反対側の方にあります。だからここを中心と考えて下さい。それから国道を下って、左側の方に宮島という所があります。宮前とか宮島というのがあります。(地図を指しながら)ここに宮島という所があります。これがまた問題の所なんです。それと、これは国道3号線です。これは368号線。上の方に安原(ヤハラ)

みると、12世紀後半とみて間違いないわけですね。

そっちの方に話が行ってしまいましたが、その他で問題は。

松田 今ちょっと思い出したのだけど、志加牟という、シカム。

平田 ああ、隼人の七城のね。

松田 はい。あれは止上に通じますね。シ・カム

平田 あれを、ト・カムと読むの? シカムとしてはおかしいのじゃないかな。

じゃー、読会の方はこれで終りましょう。

が、この海岸の所ですよ。それだけの地名を念頭に置いといつてもらえばよいと思います。

天道信仰というのは、加紫久利信仰よりも早いのですけれども、やはり加紫久利信仰と関連づけて眺めなければちょっと判りにくいと思いますので、両方を眺めながら説明していきます。

大体、4世紀頃だと思いますが、景行天皇が球磨を征伐して、それから佐敷に出て来ます。佐敷、今の芦北町。芦北町へ出て、水島に渡るわけです。そして水島に二十日間滞在するわけです。その時の水島というのが、天草の御所浦島に比定されるわけです。その手前に獅子島というのがありますと、此処に「天道山」という山がある。その下に御所之浦という地名がある。『出水郷土史』によれば、景行天皇説話は大体5世紀初頭とみておりますが、私は4世紀じゃないかと思います。先般、阿久根で鳥越古墳が見つかり、4世紀初頭ということですので、私は4世紀とみているわけです。八代海から黒之瀬戸へ抜ける時に、目標になる山が笠山と矢筈山。これを目標にして来ますと黒之瀬戸へ軽く抜けられる。長島の方を目標にしますとね、中へ入りこんでしまう。こっちだったら簡単に抜けられる。ここに今、加紫久利神社というのがありますけども、カシは人の名前で、クリというのは古代語で「君(キミ)」という意味だと云われています。「君」ですね。

平田 加志君(カシキ)?

花田 「加紫」という人が、まあ、居った。これらの人たちは海洋族で、景行天皇が佐敷に降りて来た時に、佐敷にはその当時、海洋族の主な大きな軍團はいなかったですね。出水地方には海洋族の集団が居たわけです。これらの人たちは大和朝廷に服従していた集団です。『出水郷土誌』は景行天皇が来たんじゃないかと云いますけども、實際は黒之瀬戸の海洋族を頼りにしたのでしょうね。

何故、佐敷におりたかというと、佐敷におりると

いうと、海洋族に守られるわけです。球磨川から八代の方へ行くと、あっちは火の国の領地で危いわけです。また、軍隊も五百人以上あったと考えられます。五百人以上あったとするならば、これに対する輜重隊というのがあります。これもまあ五百人ぐらい。そうすると千人位の人間であって、馬も沢山いる。だから、それらのものを運ぶとなれば、相当大きな船がおったということになります。

そこで本論に入ります。結局、この目標が一直線に並ぶわけです。この一直線上に加紫久利というのが出て来る。加紫久利神社ですね。そうすると当時は郡郷制ですが、この加紫の一族に対して大宰府管内のクニとしかみていないんですね。一種の領主的存在とみているわけです。加紫国(カシノクニ)とは云っていない。ここに狩猟民族的な人たち、加紫久利の一族がいるわけですが、地主神的存在としかみていないのです。

加紫久利の横に「山ノ段」「山神元(ヤマカモト)」それから「平松」「才脇(サイキ)」。平松の横の方に「高細工(タザイク)」、その上に「山ノ口」それから右の方に「上原(エンハイ)」下の方に「永福(エイフク)」とあります。ずっと上方には「狩集(カツマイ)」というのが出て来ます。ここで問題になりますのは山神元と山ノ口の中間の所に古墳らしきものがあることです。そこを基準にして四方の線を考えると、ちょうどこの線上にあるわけです。そして此処でこの一族はどういう生活をしたのかということを地名から考えると、出水の方に「針原」という地名が出て来ます。端っこの方に「小針原(コリハラ)」というのが出て来ます。一番上方に、針原。この針原という所は中世文書で出て来ます。これは「堀(ハリ)」のこと、開墾されたという意味です。この針原の所に川がありまして、その付近からタタラが出て来ます。ここは加紫久利一族の人たちの製鉄所であったということですね。そしてこの横の方に、

「槽木(ハシケ)」という地名があります。「路木」と書く場合もあります。槽木。ここは「ハシケ」を作った所です。

今度は先程見ました「安原(ヤハラ)」という所ですね。安原の右下の所に「御供田(ゴクテン)」という所があります。ゴクダ・ゴクデン。安原という所は、昔酒を造りよった所です。安原がどうしてこのように変ったのか、今のところは未だ判っていません。針原と槽木についてですが、針原は非常に開拓し易くて田圃になり易い所です。ところが段々田圃が作りにくくなつて、今ではミカン山になっていますが、針原というのは中世文書によく出て来ます。針原という所はそういう開拓された所です。槽木。ロギは非常に難しい。ハシケを焼いた所だという考え方もありますしね。「口」は火鉢の炉というような考え方ですね。まぁ、そのように理解して下さい。（編集者後記：舟木・槽木・舵木などは同類の地名で原材料の産地と見るべきではないか。）

安原という所は酒を造った所なんですけれども、ここには森神社というものしかありません。昔は奇麗な水が出よったんですけれども、今はもう全然出ています。安原の右の所に熊野前とか先達というのがあります、ここには慶長年間に中将坊という人が住みついて熊野神社を完成して、安原の上の方に溜池を作った。それからいい水が出なくなつて、酒造りも出来なくなったということです。安原という地名はどういう意味なのか、まだそこまでは吟味しておりません。

次に六月田(ヨツカタ)という所があります。これは古代から加紫久利神社の祭田(サイン)、いわゆるマツリダです。現在、この地図には七月田と六月田しかありませんが、昔は三月田(サンカタ)から九月田(クカタ)まであったのです。その前もあったのではないかと思うんですけども、私が見た範囲内だけでは三月田から九月田までしかなかった。現在残っているの

は六月田と七月田。これは加紫久利神社のお祭りをするために米を作りよった所ですね。

その次、名古(ナガ)という所があります。名古。ここに住吉(スミヨシ)というのもあります。そしてこの横の方に先程云いました宮島(ミヤジマ)という所があります。この名古というのは、今日でも魚取りを中心とした人たちの集落なんです。そして、住吉というのは加紫久利神社に祀ってあった住吉神をここに祀ったわけなんです。と云いますのは、木牟礼城に島津氏が最初に入った時に八幡神を持って来ておりました。その八幡神は鹿児島に行く時に分祀しましたが、出水では最初住吉の所に持って来て、それから六月田に持って来て、それから現在地に持って来ているわけなんです。その後に住吉神を持って来て据えた所なんです。名古というのはそういうことで、古代から海洋族の古代軍団の舟漕ぎ・舟の漕ぎ手が居住した所なんです。

ここで問題になりますのは、この宮島なんです。この宮島に高尾神社というのがあります。高麗系統の高麗神社とも昔は云いましたが、本当の意味はやはり高尾神社なんです。祭神は八大龍王です。何故此処に八大龍王が祀ってあるかというと、現在は米之津川が大きいようですが、昔は小次郎川の方がむしろ大きかった。小次郎川を閉め切ることに成功したのは元禄時代です。その閉め切りに成功したからこっちの方も田圃になったわけです。字図を見てみると、この付近に小次郎という名前が沢山出て来ます。小次郎川後というのは、昔の川口に近い所ですね。

そうした場合に、小次郎川が広い範囲に流れていたもんですから、この宮島一帯は大きな洲になっていたわけです。洲になつたところに現在高麗神社、いや高尾神社がありますけれども、昔は石を積んで塔を建ててあったという伝承があります。結局、塔を建てたわけですね。と云うのは高潮

と重なった場合は水に漬かりやすいのです。だから高尾神神社の所に八大龍王：水の神を祀った。水を治めるお祭りをしようわけです。それから此処は現在は今釜の地域なんですけど、高尾神神社というのは本来は名古の氏神なんですよ。で、この高尾神神社がこの矢筈山と笠山を結ぶ線上にあります。

そうして此処にもう一つ、尾ノ島というのがあります。字図を見てもらえば判ります。尾ノ島の横は堂山。この堂山の所に神社があったわけです。これは白山権現です。尾ノ島、これも一直線上にあるわけです。尾ノ島には海洋族の戦闘軍団が住んでいたのです。「島」というのは、居住地域の意味です。「尾ノ」という意味は「鬼の」という意味です。戦闘集団ですので、「鬼」という言葉が付いて「鬼の島」となった。これがいい意味に変って、佳字に変って「尾ノ島」となったわけです。ここに白山の宮が祀られています。これも一直線上なんです。

天道信仰の中に、もう一つだけ不思議なことがあります。それは何かと云いますと、大体朝の十時頃の太陽を拝むのです。獅子島に天ヶ七郎嶽といふのと天道山があります。そして、その下に御所浦があります。それともう一つ、御所浦ヶ島といふのがこっち側にあります。そして御所浦から天道山を眺めますと、大体朝の十時頃の太陽がこの上からあがるんですね。また、尾ノ島と紫尾山を結ぶと、やっぱりこれと同じ角度になる。

もう一つ、広川(ヒロカワ)という所があります。これは尾ノ島から分離した所です。この広川は本来広郷じゃなかつたかと推察するわけなんです。

（操作ミスでツナギ部分の録音喪失）

尾ノ島には古墳がありますが、ここにはないので丸い塚を造らせた。これが丸塚の語源になったのです。大体それが、まぁおそらく3世紀。天道信仰の始まりというのは紀元前3世紀から5世紀ぐらい

の間です。加紫久利神が4世紀とした場合に、それよりもちょっと前ぐらい、3世紀頃じゃないかというように考えているわけです。

高尾野に大久保という地名があります。大窪とも書きます。まぁ、一種の凹んだ所です。この大久保からは紫尾山は全然見えないです。紫尾山のこちら側に柴引(シハキ)という所があるんですが、柴引から見ると紫尾山がまともに見えるのです。だから柴引に古代の紫尾神社の中宮を祀った。大久保に祀らずに、こっちに寄せたわけなんです。「柴」というのは、結局「祀場」のこと。祀場を引き寄せたから「柴引」というわけです。古代交通路：古代の駅路は、柴引の横を通っているのです。

もう一つ、諏訪山という所があります。昔は此処に紫尾神社の下宮がありました。また、島津氏が治めた時代に、この柴引におった人たちをほとんど移住させています。その時、出水および高尾野の紫尾神社は全部廃棄したわけです。そして、此処に諏訪神社をもって来たのです。本来、諏訪という地名はなかったはずなんです。それと諏訪山一帯から石器が沢山出て来ます。そういう所です。そこから田圃が続いて尾ノ島になる。朝の十時頃の太陽の位置が、この上からあがるという形になっています。丸塚はそういうような所にあります。

柴引は、大久保にあって来なければならない紫尾神社を柴引という所に引き寄せた。柴は祀場で、祀場を引き寄せたから柴引。そして紫尾神社の中宮のあった所は鶴田山(ツルタヤマ)という名称が付いています。鶴田山のうしろの方には東禅寺という禅宗の古いお寺があります。その西側には狐藪という所がある。そして上狐ヶ尾・中狐ヶ尾・下狐ヶ尾と続く。まぁ、狐がおった。薩摩国では隠密のことを狐と云いますので、まぁ忍者ですね。修験者とは、またちょっと違った形で忍者のことを云っている。薩摩の歴史には沢山忍者の話が出て来ます。狐の話

がですね。朝鮮の役でも雄狐と雌狐が戦死したのでそれを祀ったという記事があります。まぁそういうことでしょう。

さて、クマソですが、クマソはふだんは漁業をしておった一つの集団と考えます。尾ノ島は戦闘集団で、この笠山を中心に生活していたと考えます。ここに蓮雀野(レンザクノ)なんていう地名もあるんですけども、どういう意味なのか。「蓮」の字を書いてありますけれども、最初はこの「連」で、連雀野ではなかったかと思うのです。山の中に柵らしいものをして、ここを中心に牧場を作ったわけですね。馬を放し飼いにしたんです。記録によれば、室町時代にここから駿馬が出て、足利幕府に献上したという記事があります。古くから笠山の所には牧場がありそれは江戸時代の中期まであったようです。

次に加紫久利神社の所をちょっと説明します。平松・高細工(タケイ)・才脇(サイエ)というのがあります。平松。出水では「松」という字があっちこっちに出て来ます。例えば、ちょうどこの真ん中辺、高次田(コイテン)の下のところに上松(カツラ)という地名が出て来ます。高次田の真下のところに御堂という所があります。それから3センチばかり右の方に上松という地名があります。そして溝下(ミシタ)という地名もあります。溝が通てから溝というのですけれども、上松という所は溝下から二男・三男家が移転した所です。ところが此処に祇園とか諏訪下とか、いろいろな地名があります。此処は紫尾神社の下宮のあった所で、古代の駅路でもありました。郡山とか紫尾神社などもありました。紫尾神社を祀る集団がこっちへ移ったわけです。その移った所が上松であったわけです。「松」は「祀り」になるような気がするんですね。

高尾野にもあります。高尾野の場合は「松ヶ野(カツラノ)」という所です。大久保の横に松ヶ野という所があります。これの「松」はマツリに関する地名

です。そうすると、上松の「松」もマツリに関する地名になります。

そうしますとね、この山神元(ヤンカンモト)とか山ノ口は神主たちの居た所だと云っていいわけです。結局、平松というのは加紫久利神社にいたいわゆる神戸(カバ)。神に仕えて神の米を作ったりした人たち、マツリの手伝いをする人たち、すなわち神戸の居住した所が平松じゃないかと考えます。

その下の才脇(サイエ)というはどういう意味か。ご承知のとおり神主のことを太夫(タイフ)と云いますね。漫才などの場合も太夫という。尾張万才の場合には太夫に対して才蔵という。だから、才脇というのは平松に住んでいた才蔵と云われる人たちに関係がある。その脇にあるから才脇と云ったんだ、ということです。それと平松は「マツリ」に関係しているから、平松というより方をしたんだ、と。高細工というの、マツリに関するいろんな道具を修理した所、また作った所、ということが云えるわけなんです。(編集者後記: サイワキは一般的には塞之神の脇をいう)。

今度は、山之口と上原の間に川があります。上原は台地になっております。「永福(エイガ)」というのは、お寺の跡です。昔の加紫久利神社というの、矢筈山なども全部含めた地域だったのですけれども現在ではこの地域だけになっております。これだけのものになってしまったのは島津吉貴の時代です。「度々の野火にあうことにより此処へ移した」と云われております。こちらの方は台地で、山ノ田・山ノ段・山ノ口・山神元というような地名が見られます。下の方の三つだけ、高細工・平松・才脇だけが、昔の紫尾神社に関する地名の名残りということになります。

高次田の所を、もう一回見て下さい。高次田の上の方に、宮町(ミヤチ)というのがあります。高次田の上の中泉(カバミ)の上にあります。この宮町という

所には神社があるんですよ。記録によれば、六月田地区には二つの神社があると書いてあるんですが、一つしか判らないのです。それで先程云ったように名古にまず八幡を祀った。八幡神社はそれから宮町に移転した。さらに宮町から現在の出水八幡に移転したわけです。遷座したわけです。それで宮町には豊作の神を祀ったんじゃないかと云われています。六月田あたりの米を作る集団の一族の長を祀るとかそういうことをしたのではないかと思われます。

天道信仰にもとづく地名というの、以上のような地名です。大体それらが出て来るのが4世紀から5世紀の頃ではないか。時代測定のめどとして、5~6世紀の地名とみられるものをまず調べたのですが、景行天皇紀と比較した時に、おかしいのじゃないかということになりました。出水郷土誌には5世紀初め頃と書いてありますけど、私は4世紀じゃなかろうかと思います。阿久根で4世紀初頭の古墳が出て来ましたので勇気を得たわけなんです。時代設定も大体4世紀とみていいのじゃないかなというふうに考えています。

参考のために古代の駅路のことを話します。昔の交通というのは海上交通が中心でした。陸上の交通は、この尾ノ島からずっと紫尾山の方へ行くわけなんです。江戸中期になってから、現在の3号線に沿った道を行くようになります。だから尾ノ島から陸路で行きますと、野田を通ります。野田に山内寺というのがあるんですね、天台宗の。この寺は現在ではあとかたありませんが、大体平安時代に出来たんじゃないかと云われています。昔の神社や寺院は古代の交通路との関係も無視出来ません。廃寺になって全然判らない有名・無名の寺でも、地名だけは残っています。判らん場合はそういうようなことからみると、解決すると思います。

現在、尾ノ島地区にリゾート基地を作るという話が出ていますが、今一つ問題になるのは、烽火台が

どうなってたのか、それから町がどうなっていたかが疑問になって来ると思います。この地図には笠口(カブチ)といったような地名が載っていないのですけど。江内地区的地図は半分しか付いていません。半分は阿久根市になるもんですから。それで、この地図を見ますと、尾ノ島の横の方に、43番と32番に堂山(ドヤマ)というのがあります。この堂山というのは白山神社を祀った所です。尾ノ島にも古墳がありますし、その付近に庶民の古墳があるんじゃないかということで探しているわけですが、怪我をしたためにまだ調べておりません。

以上が大体の天道信仰と加紫久利信仰にもとづく地名関係の問題なのです。それと6・7世紀の古代交通路も関連して来ますので、いろいろ面白いことが出て来ると思います。古代の交通路: 駅路を考える場合、この高次田土手を作ったのが元禄年間だということを無視して現在の国道に合わせて考えるので、とんでもない間違いをしているわけです。参考のために申しますと、出水の方に小原山というのがあります。このそばに牧野という所があります。小原山は馬を放牧していた昔の人たちの居住地域になります。それと此処に内椿(ウツバ)、そして馬差場(カツラバ)という所があります。そして駄子田(タコタ)。ここに湯原橋(ヨラシ)というのが架かっています。江戸時代は、この付近は湯原村と云いよったのです。馬差場の所に市来(イサケ)という所があります。市来、そして此処に上市来。(地図は市木・上市木となっている)。一段さがって内椿というのがあります。上赤木田、これはカミアカゴダと読みます。これは違うな、上赤木になっている。此処は湿地帯で、祭りのための赤米を作った所です。また老神(オレガ)という所がある。此処を通って行くわけなんですよ、古代の交通路は。それで市来駅(イサケ)というのとは此処なんです。馬差場というのとは馬に水を飲ませたりして、指図をする所なんです。竹

串をさしてやる。駄子田といふのは馬子の居住した所です。それと湯原。牧野は牧場ですね。馬差場といふのは馬に荷物を積んだりする所。それで市来は出水の駅の中心になるわけですね。内梅といふのは駅司の居住地です。それでこれの地名が残っているのが阿久根と葦北です。川内には内梅といふ地名はないようです。消えているんだと思います。その代り網津の場合は、湯原といふ地名がある。湯原といふのは昔は旅行する場合は全部ほだ立小屋に泊めてもらうわけなんですね。旅館と云っても、今みたいに御飯を出すわけでもないし、全部自分で乾飯を持って行って、そこで湯を沸かし、野菜を買ったりなんかしてですね、自分で食事を手配しなければいけないわけですね。それと体を湯で洗ったりする。湯を沢山使うから結局湯原(ゆわ)と呼ばれるようになった。湯を浴びることをユカリとも云いますよね。この地名は出水には橋の名前に残っているだけですが、網津の場合は上湯原・中湯原・下湯原と、そういう大きな地域になっています。阿久根の駅の場合はこういう地名はなくて、梅(カイ)という地名だけが残っています。そして駅には必ず神社が出て来ますので、こういう神社を比較して行けばいいと思います。

また機会がありましたら今度は加紫久利からどういうふうに通つて、地名がどういうふうになっているかを話したいと思います。今日は以上で終ります。

(質疑応答)

平田 どうも有難うございました。

花田 地名の話も横を撫でながら、お尻を撫でながら通った感じになりました。何か質問がございましたら。

平田 最後に話された薩摩国の駅路で、市来駅というのが出てきました。市来駅は説明されたように落着いて来ておりました。良い参考になったと思い

ます。それから天道信仰といふものについて縊苦を傾けて頂きました。先程配った会報をちょっと聞いてみて下さい。その中で求聞持山から見たらどっちの方向だとか、どの山とどの山を結んだら一直線になる、というようなことを本田先生が述べておられます。神社が一直線に並ぶというようなことです。天道信仰とはこんなものかなと思いました。

花田 入来の本田先生が云つておられるのは天道信仰とは云わずに、トリーティー方式と云つております。私の云つている天道方式とは、またちょっと違うのです。

平田 どういうことですか、トリーティー方式というの?

花田 ああ、こういうことです。今判っていますのは入来・川内を中心とするのがトリーティー方式ですね。それから、大和の方のトリーティー方式というのが今一つ発表されています。どういうことかと云いますと、いわゆる春分と秋分の朝の太陽の出る位置から見るわけなんです。これに山を当てるわけですね。それと、これから30度の角度にもって来るんですよ。そうすると、片一方は夏至で片一方は冬至の太陽のあがる方向になる。これが30度。そうすると、これに対してですね、ここに一つの目標があるとします。二等辺三角形になるようにここにもって来るわけです。そして、ここに何もない場合は、神社を作ったり烽火台を作ったりするわけです。どっちから見てもいいようにこれが二等辺三角形になっている。このような春分・秋分を中心とした太陽のあがり場所から云つたものがトリーティー方式です。

平田 トリーティーですか。

花田 はい。天道信仰の方では、こういうことはあまり問題にしてないわけです。新しい問題として私が云つたのは十時の太陽が問題だと云つたのが、そこなんです。

平田 よく判らん。

花田 そこが、ちょっと違うんです。天道信仰の場合、太陽の出る位置といふものは春分・秋分に関係なく云つてゐるわけです。トリーティー方式の場合は、これをやかましく云つてゐるわけです。これが条件なんです。天道信仰の場合は、これをあまり云わない。さっき云つたように、大体ここから出る太陽をいう。結局、十時頃の太陽。夏にしても冬にしても、十時頃は一番強くなりかけた時の太陽ですから、その頃の太陽を祀るのが天道信仰の中心になると云つてゐる。

平田 天道信仰といふのは、どなたが云い出したことなんですか。

花田 最初、私が一人だけだと思っていたところが、対馬の久留先生が。

平田 対馬の方ですか?

花田 ええ、対馬にそういう資料が多いのです。いろんなのが出ています。今日も出すようにしちゃたんですけど、補足の資料を置いて来たもんですから。「天神と海神」ということで出ているわけなんです。加紫久利神社が式内社になったというのは早くから海洋族として大和朝廷に服従しちゃったからだという。朝廷が祀ってくれるようになったのが式内社のはじまりだということなんですね。

郡山 私のところでは天狗講といふ講をしているのです。掛軸があり、その掛軸には文字が書いてあります。普通の者は祀ることは出来ないとしてある。天狗講はいわゆる雷さまを避ける、そんな。

花田 ああそうですか。何か関係があるかもしれませんね。それから天道信仰の場合、天童信仰に変化することもある。天童はいわゆる日子ですね。日子信仰に變るわけです。天子は日子で、日子は太陽の子である。こういう変り方をするのです。それで大隅八幡の日子信仰:一之宮伝説に結び付く。

納 それとはちょっと違うのですが、何年か前に

関西の人人が書いた本があるんです。それをちょっと見たんですが、日本を直線でつないだ場合、一番東が鹿島神宮ですか、そして西の端が出雲大社なんですね。あれが東西一直線になるんだ、と。それともう一つ、熱田神宮だったか、伊勢神宮――

平田 伊勢神宮ですね。NHKが特別番組で放映したことがあります。

納 ああ、それ。

平田 よう追っかけたもんだと思って見ていました。率直に疑問を述べますけどね。トランシットを据えて、ずっと見通して、一直線であるというのは確かめていない。大縮尺の地図に定規を当てて、一直線だと云つてゐるのではないか。マークなんかは並べてみたら、一直線みたいに見える錯覚を起こすことはあると思うのですけどね。本当に機械を据えて、ポールを立てて、大昔にこのような見通しをつけて神社の配置を決めて行ったのか。これは疑問だなと思うのですけどね。それともう一つ、具体的にお尋ねします。尾ノ島と紫尾神社の間に神社が一直線に並んでいるとのことでしたが、それらの神社はみんな同じ方向を向いているわけですか。

花田 尾ノ島からは紫尾神社の方を向いていますけど、他の神社は全然残っていません。

平田 同一系統の神社だったら、同じ方向を向いて同じように拝むとか、そういうのが残っている。

花田 天道信仰との紫尾信仰とはね、ちょっと次元が違うのですよ。高尾野側の紫尾信仰というものが、これに次元を合わせて來てるのですね。次元が違うけれども、それに合わせて來ている。

平田 それから、もう一つ。4世紀とか紀元前3世紀とか5世紀頃という、まあ弥生から古墳時代の頃のことで、考古学者も考えつかないようなことを云つておられるんですが。昔、家を建てる時に鬼門の方角とか、陰陽道にもとづいてお祓いをするなどは、どうみても平安以降のことと、そんなものが特

に盛んになるのは室町の頃でしょうけどね。街作りなんかは、確かに春分の日とかですね、そんなのを選んで方向を決めたかもしれませんけど。例えば国分の町並みで、国分高校の歴史の先生が気付いたことですが、義久が築いた舞鶴城を中心とした町づくりは、ちょうど春分の日の朝の日の出の方向と一致しているわけです。車を運転しながら何故真直ぐ朝日がさして来るんだろうということから変だなと気付いたことで、あんなほど、春分の日の出に合わせて国分の町づくりをしたなあと想像できるわけですね。戦国時代などに町づくりをする時に、この方向で作った方が縁起がいいとかね、それはあると思うんですね。ところが神社が一直線に並ぶとかね、それらを非常に古い弥生の頃まで遡らせるというのは、一体どういう根拠なのかな、と思うのですが。

花田 天道信仰ということを問題にして云い出したのは私もその一人ですが、天道信仰との結び付きについて塔を立てるということだけが非常に引っ掛かったんです。いい参考になったんです。

平田 塔とは何の？石塔ですか？

花田 石を積んで塔を立てる。丸塚みたいにですね。それが非常に参考になった。

平田 そう云ったのは山伏とか、そう云った人達でも積みますよ。そう云った信仰形態というものは一世紀も経つとほとんど判らなくなっているわけですけどもね。

花田 ただねー、平安京とか飛鳥京とかを造る場合においては、仏教寺院以外はほとんど陰陽道を中心とした造営ですよね。それが密教が入ってることによって変って来る。密教的な要素が入るのはだいぶ後になりますよね。だからそれ以前は道教的なものであった。さらに天皇が死ぬたびごとに都を造るわけですが、その時に朝鮮の方位師みたいのがおって、それが地形を見てこういうふうに立てた

らしいんじゃないかと、此処がいい場所だということを指摘するわけですね。それは古いんですよ。

平田 そういうのはやっぱり平安以前でしょうね
花田 それよりずっと以前です。

平田 そういう証拠がありますか。

花田 それは論文に書かれておりますが。

平田 話は別ですが、さっき蓮雀野という地名が出て来ましたけど、あれは連雀商人と云って、戦国時代は治安が悪かったから、行商人たちが群がって飛ぶ雀と同じように固まって行商して行った。それが連雀商人という呼び方で、そういう連雀商人が住んだ所に「連雀」という地名が付くわけです。

花田 その場合は馬牧地としての住宅、人間が住んだとしか云えないのですよね。

平田 日本全国をみた場合ですよ。

花田 日本全国の場合は、そうですけど。

郡山 石の塔を立てるということ。それはどんなのですか。

花田 石をずっと積みましてね、立てます。

郡山 実はですな。八重山に昔の山伏の修験場がある。それを調べに行きました。霧島から太陽が出て、川内の新田神社に沈むことを確認しました。一直線上になる。そこに石の塔と小屋を作って修行したこと。まぁ、そういう――

花田 石の塔を立てる天道信仰そのものの考え方というのがですね、天というものには天の神以外に穀靈信仰がありますね。それから祖靈信仰もありますね。そういう、いろんなものをすべて「天」で示すというような存在ですね。それが山岳信仰のもとになって行くわけで、それに祖靈信仰が加わって行くわけですね。そういうようなものが中心になって天道信仰というものになった。天道信仰の名残として残っているのは、朝の太陽を拝む人たちがいること。あれは昔からの名残ですね。それから景行天皇にしても長田王の水島にしても、同じ所です。

そういう人たちが遠征に来た場合に、早く平定して帰るために太陽に向ってお祀りをしなくならんということですよね。それと水島の場合に景行天皇の遺跡を調べてみたら、やっぱり20日間はそこに居りますもんね。結局兵員をあそこで休めるわけです。今日的に云うと、あそこで武器・弾薬・兵糧を補給した。そうした場合、海洋族のことが今まで積み残された問題だったわけです。

ただ、私が云っているこの石塔であっても、どこまで通用するのか。これを研究することによって、鶴田の方の紫尾神社信仰がちょっとあやしくなって来たわけです。紫尾山の上宮が鶴田の方にないですよ。出水の方にはありますけども。紫尾山からちょっと降りた所にですね。

平田 ああ、そうですか。鶴田の大田さん、どうですか。今の話は。

鶴田 山頂部はそういう形ですよね。山頂の所は出水側。

平田 そうですか。まぁ、難しい。われわれには判らないのですけどね。こういう非常に古い時代の信仰というのは、どれだけその信仰形態が現在に伝わって来るのかですね。

花田 誤解のないように話しておかなければならることは、天道信仰というのは海洋族のによる信仰であるために、どこまでその範囲があるかということは、今後の研究課題なんですよ。内地の方は内地のまた別の信仰がある。太陽信仰にもとづく天道信仰でなくとも、別の信仰があるということを前提として研究しているわけですがね。それを考えておいて下さい。

平田 地域的な信仰形態であり、全国的・普遍的に通用する信仰でないと云ったら、地域・地域の研究はどうにでも古い形にあって行くことが出来ると思うんですよね。一般的に云えば、どういう神様でも、スタートした時の信仰よりももっと古いもの

もっと古い形にと、後から後からどんどん上に遡らせて行くわけです。古いものほど実は新しい時代に創られたものとということになる。それが一般的な歴史解釈になるので、あんまり古いということを云われると、本当かいなという気がするんですね。

花田 天道信仰の場合は、結局そこで行き詰まりですよね。年代的に行き詰まりだし、それ以前の信仰からちょっと変って来ますよね。古い時代の信仰や世界各地の信仰形態から見てみると、また別な角度の信仰になって来ますよね。

平田 だから古いものであればあるほど、例えば沖縄とか台湾とかインドネシアとかとの共通因子を持つないで行って、どういうルーツがあったかを分析すべきです。それからこれがどこまで広がって行くのかという問題もある。地名の場合でも、天道信仰に関係のある地名が全国的にみてこういう共通性があるとかね、そう云ったものが出て来ないと人々を納得させられないんじゃないでしょうか。

花田 少少はそれがあります。その海洋族のおものと云いますと、これにも書いてありましたように、豊玉彦を中心とする考え方ですね。

平田 豊玉ですか。

花田 豊玉彦を中心とする考え方であって、出水の加紫久利神社でも、開聞神社にしても、主祭神を豊玉姫としますよね。宇佐大社も確か豊玉姫のはずです。

平田 いや、それでね。江戸時代に作られた地誌類にはいろんな御祭神の名前を沢山書いてありますが、本当のことを云えば、どんな神様を祀ってあるのか判らないという神社の方が古いはずですよ。いろんな神様の名前が判っているのは、案外新しい時代に創られたものだということです。豊玉姫とか豊玉彦の名前が出て来れば、これは江戸時代の学者たちが勝手にほじくり回していかにも古そうな感じをもたせたとしか思えないのです。

花田 まあ、古事記に出て来るのを基礎にしてるわけです。古事記・日本書記に出て来るのを基礎にしているのが一番古い時代であって、それから後は神社によっては古事記を作った時点ではほとんど祭神系統を破壊されています。例えば加茂久利神社でも宮司に云わせると、今の神社がもう1400年以上になります、という。そして、この祭神は天照大神です、なんてことを云い出すのですよ。1400年前とか1500年前というと、合わないのですよ、年代が。天武天皇の頃になるでしょう。天武天皇の頃に、や 伊勢斎宮の問題が出て来るわけですよね。全然話が違うわけです。

海洋族の場合は、豊玉彦を中心とする考え方があ 一番正しいんじゃないかと思う。そうした場合に、日本の神信仰としての問題が出て来るのは、大体、3世紀頃からではなかろうかと推定しているわけです。

平田 うーん。

花田 古墳時代と大体重なって来るわけです。

平田 そういう古いものだったら、ずっと大事にされてもっと語り継がれて来ていると思うけど。

（録音消滅）——昔、山で修行したのに平安時代の山岳仏教がありますが、これは早く消えて修験道に変ってしまった。江戸時代の山伏たちは山に登って石の塔を立てたり、春分の日の太陽はこっちの方だから、こっちにも石塔を作ろうとかね、したと思うのです。修験者たちが山の中で修行したものに関係があるとみれば、それは江戸時代の話になりますよね。そうした云い伝えがないことを理由にして、これは修験道なんかよりもっと古いもんじゃなかろうかと、現代の研究者が時代を古くもって行く傾向はないのですか。

花田 いや、その点はね。天道信仰と修験関係とは、はっきり年代が分かれています。天道信仰も大体5世紀頃でストップします。やっぱり、変って

います。

平田 天道信仰は何故消えたのでしょうか。

花田 結局天道信仰というものが天童信仰にすり変って来てるわけです。大隅八幡みたいにですね。

平田 律令政府によって信仰形態を変えられたというわけですか。

花田 結局、天皇家と天童信仰との結びつきを追認してしまったんですね。それで本来の天道信仰はなくなってしまった。

平田 うーん、難しいな。私ばかりが議論してもしようがないけど。他にありませんか。

納 テンドウのドウは「天童」ですか。

花田 いや、天道。天のミチです。

納 さっきはワラベとおしゃったようですが。

花田 ワラベ説というのは、結局、天子の生誕説ですね。日の御子が生まれ、その子供が天皇になるという、その天童ですよね。そのワラベが天童になる。

平田 ああ、天子を天童というわけです。

花田 そういうふうにすり変って来るわけです。朝廷によって天道信仰そのものが利用されて来るわけですよ。

平田 よく判らない。そんなことを説く研究というのは江戸時代がさかんなんでしょうが、そういうことを説いた学者は誰なんですか。

花田 江戸時代のことは調べてはいませんが、今日それを云い出したのは私と久留さん。他にも二人ぐらいあります。

平田 極端にいうと、20世紀の後半に云い出したことですか。

花田 まあそういうことになりますね。私は出していますが『東アジアの古代文化』に3~4人、そういう論考を出しています。

平田 うーん。

花田 まあ大体トリーティー方式と同じ頃です。

ティー方式はぴしゃっとした春分・秋分の日を出しますけれども、そんなに地形的にうまく行くはずはない。海洋族だったら、なおさらのこと。海を渡るための一つの基準はありますからね。その目標をもって、それを祭神化していくわけですから、時代的に祀り方も違うし、時代的にも違って来ると思います。だからトリーティー方式というのは天道信仰よりも、もっと新しくなるんじゃないかな。あまり正確すぎると云うんですよ、トリーティー方式というのはね。

平田 ああそうですか。他にありませんか。

納 ちょっとお尋ねします。図書館の鹿児島方言研究会で聞いたことなんですが、県内に別府という地名があちこちにありますね。「ないごて（何故）ビュウと云うた一ろかいいな」という疑問が出たんですよ。ご存知だったら教えて頂きたい。漢和辞典やら中国語辞典を見たのですが、漢和辞典には別府を「ビュウフ」と書いてありました。中国語辞典には bitfuと書いてあったかな、中国の読み方が何か手掛かりならんかなと思ったのですが。

平田 小川先生、どうですか。今まで考えたことがないのですが。

小川 別府は、いろいろ書かれます。ペフとか。ペフからビュウになったんじゃないですかね。

平田 ペフからビュウですね。（後記、てふてふ：ちょうちょう、けふ：きょう）

小川 ペフからビュウ・ビュウですね。

納 鹿児島語の特徴というのは、ほとんどが変化していること。変化そのものが特徴とは思ったのですが。ほとんど変化しておりますからね。それにつながるなどの感じは持ったのですが。

花田 薩摩弁特有の音韻というのですかね、あの変化はまた違う、他とすればね。出水には上鰐淵(がさわが)・下鰐淵(がさわが)という大字がありますが、鰐(サワガ)というのは他の言葉で当てはめると、私たちが小さ

い頃、雨の降る日に草履や下駄を履いて通る時に「サバをとる」と云いましたね、あのサバに由来する。辞典を見てみると、サバというのは湿地帯という意味なんですよね。だから湿った所に行くと、サバをとるということになる。今でも「サバをといやったが、今夜は御馳走をしやっとな」というわけですね。この前、サバとサマをどっちゃにしていたもんですから出水地名研究会で云ったのですが、サマというのは狭間と書いて狭くなつた所、サバというのは湿地帯の意味ですから。鰐淵という場合は湿地帯が額縁みたいにずーっと淵がつながった所をいうのですよ。薩摩弁の場合は読み方の変化というものが非常に大きいのじゃないかと思います。

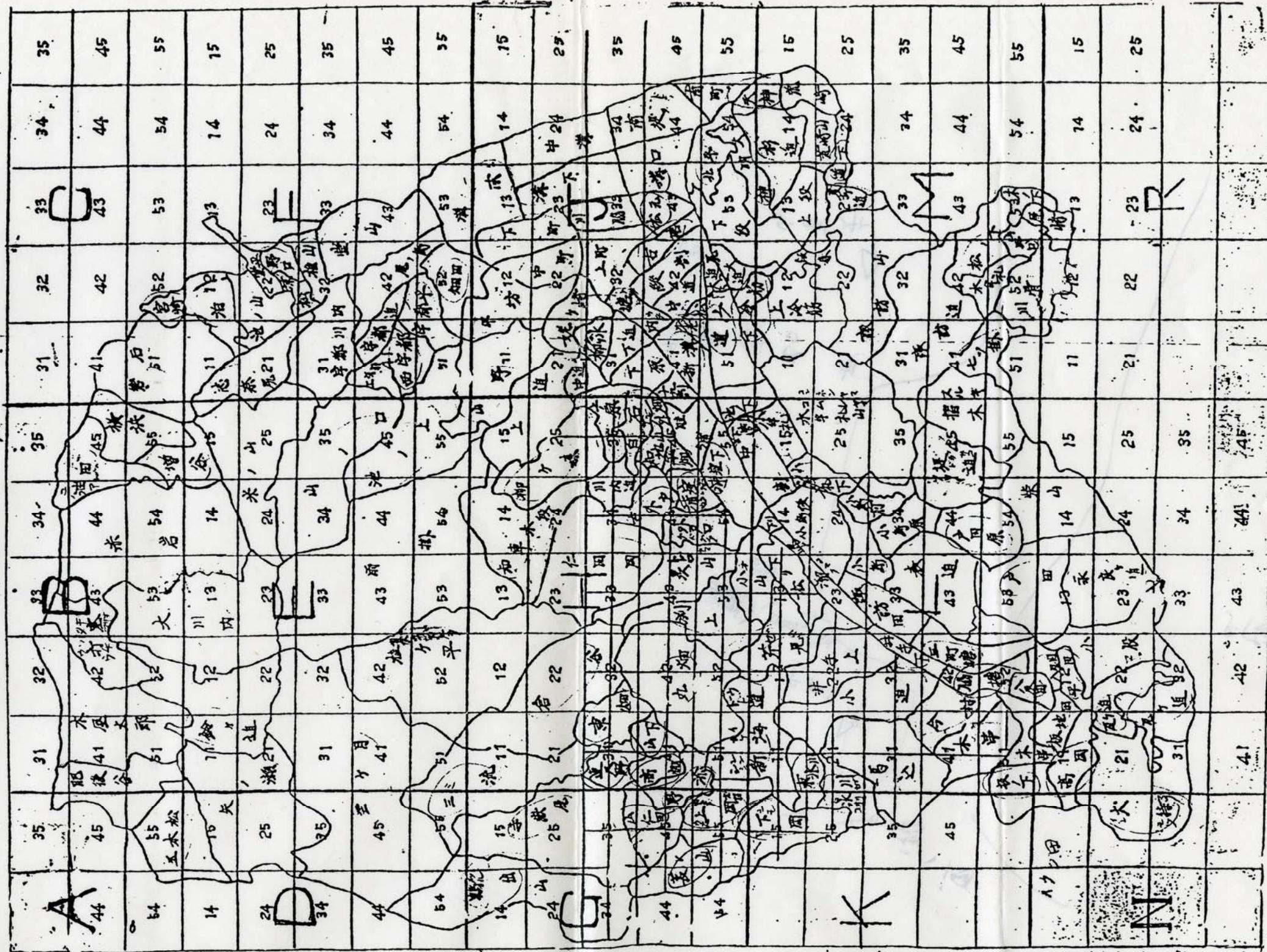
納 その変化についても鹿児島の場合はいろいろある。例えば山のつく地名。谷山はタンニヤマ、それからマッチャマ(松山)・フッキヤマ(福山)。山の前の音が全部促音になるんですね。促音になる土地が多いのですよ。促音になって「山」にもって来るから「ニヤマ」とか「チャマ」にいうふうに音が変化する。

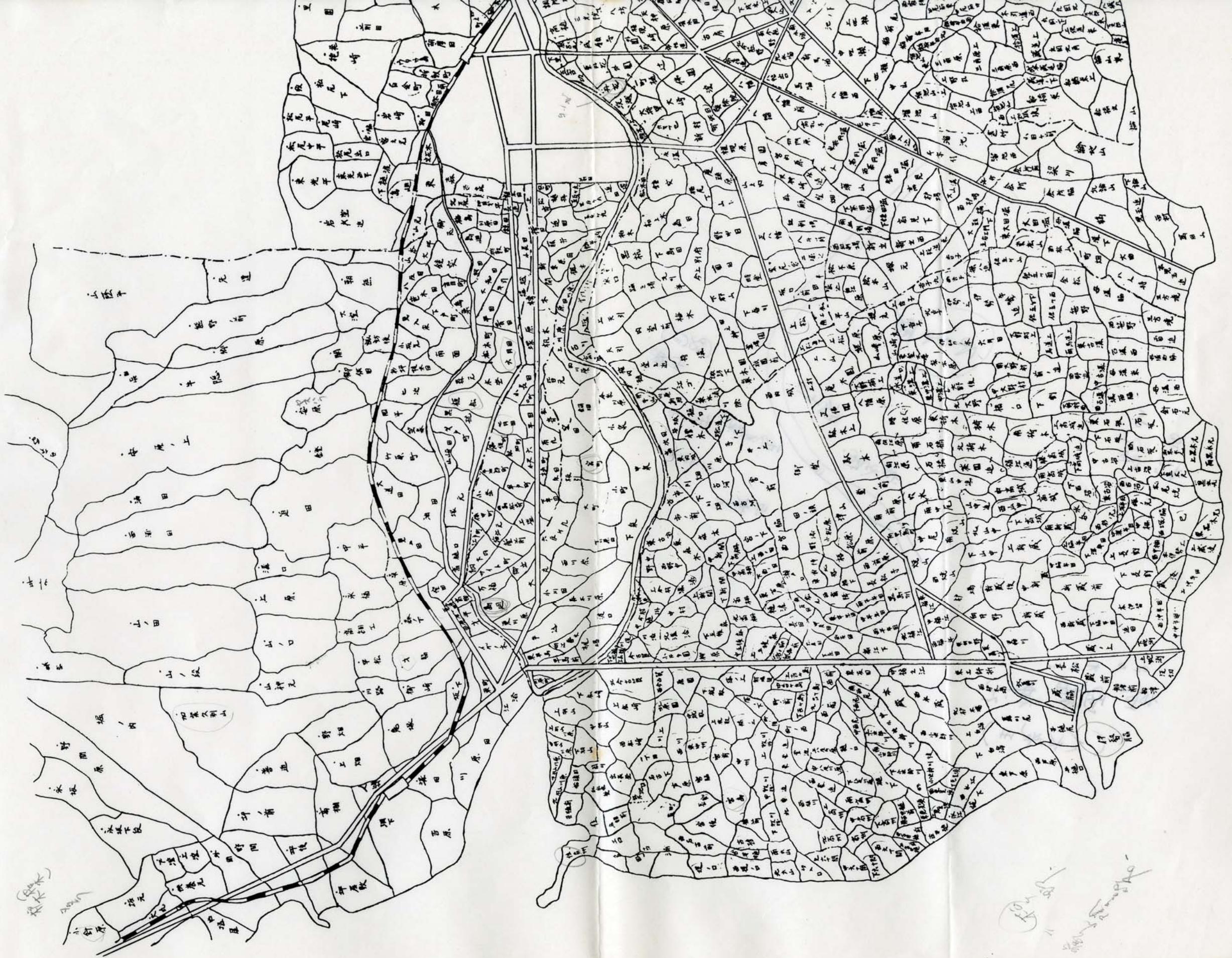
花田 促音形に変って来るのは、梵字なんかでもそうですよ。梵字が何字も重なって来ると、母音が消えてしまって子音だけが残るんですよ。薩摩弁の場合も母音だけが残ったり、子音だけが残ったりしてつながっていくという考え方があるんじゃないかなと思いますけど。どんなものでしょうか。

納 それはありますね、子音が消えて母音だけが残るとか。とくにサシスセソの「シ」ですね。前の子音だけ云う場合と、母音だけ云う場合とがありますね。鹿児島の場合の「シ」ですが、「カゴイマ」「カゴシマ」「カゴッマ」と、「シ」だけを云うてみたり、「イ」を云うて済ましてみたり、「シ」を落してたり、そういうのがありますね。

花田 それと仏教の真言の中にも、母音が後に付かなくちゃならんのが前の方にひつ付いてみたり、

江內地區地籍圖字典一覽圖





卷之三

三八田 — 高次田

27

112

卷之三

二〇一



地名研究会報

第3・4号

平成4年3月1日

鹿児島地名研究会

I. 第34回例会 平成3年9月8日(日) 於教職員互助組合会館和室

(出会い者) 青柳俊二・池田信夫・泉 嶽夫・大田照夫・小川亥三郎・納 栄蔵・小野寺伸子・

郡山政雄・小園公雄・小原親英・梶原 武・鈴木順一・肥後芳尚・平田信芳・

藤浪三千尋・松田 誠・松浪由安・山口静也(計18名)

II. 墓藩名勝考読会 P.113 ~ P.116

(問題となった地名および事項) 四肢神社・姫城浦・気色の浜・真孝・拍子橋・隼風神社・

景色の森・大隅薩摩への侵入路

『揖斐川流域の地名』

平田 国分の若い人たち三人を紹介します。特に一番若いのは緑のシャツを着ている鹿大法文学部の梶原君。卒業論文に「門割」をやるということで、門と苗字と地名とが密接な関係があるので、是非と思って案内状を出しました。その次が国分市教委の鈴木さんです。こちらは国分市図書館の小原さんです。よろしくお願ひします。

事務的なことですが、これは三日ほど前に来た案内です。締切は過ぎているのですが、九月一杯までは受け付けるということです。岐阜県揖斐郡の小・中学校の先生方が揖斐川流域の地名というものを本にされるわけです。値段はちょっと高いのですが、1万円1図に字図を復元して、そして解説を付けているやり方です。地名研究としては、これが一番オーソドックスなものだろうと思います。参考になるかもしれません。回しますので、希望があったら裏に名前を書いておいて下さい。

それでは、今日読んだところの問題点を出して下さい。

四肢明神

平田 114ページの上の方に、野口の四肢明神とあるけど、この神社はどこにありますか?

納 大体同じなんですね。

平田 地名というのは案外古いのですよ。例えば鹿児島・姶良・肝属・曾於なども、みんな奈良時代にはありますからね。発生は古いとみなければいけない。

納 それにしてもですね、最近はよう地名がね、変えられていくでしょう。ほとんどの場合行政の簡略化のために、合併してとんでもない名前を付けていますね。古い地名で変えられた所があるもんどうかと思ってですね。

平田 鹿児島県は二つが一緒になって、それから採ったというような地名はわりに少ない。ここに書いてあるままに来ている。あまり進歩していないから變っていないとも云えます。

小園 名前はどうにでも付けられる。

平田 それはそうだけど。勝手な名前を付けますよね。例えば、西郷団地なんてのをね。

小園 116ページに、姫城浦というのがありますね。気色杜より午方二十余町の海辺だ、と。姫城浦といふのはどこになるんですかね？天降川の海岸？

平田 気色の浜一帯のことでしょうね。

小園 しかし、そこには姫城浦とある。これは海辺ですね。

平田 これは、こういうことでしょう。姫城村から見たら、気色の森と同じ方向に気色の浜があるということでしょう。今では気色の浜は国道10号線の近くにありますが、昔は相当海が入り込んでいたと考えなければならないのじゃないですかね。

小園 というのはね。この村近のことが俊寛が流される時、硫黄島に向う時に出て来るわけ。

平田 ああ、長門本の平家物語に。

小園 平家物語に、行く時も帰る時も。それから鳩ノ脇(トトワキ)というのが出て来ます。鳩ノ脇といふのは、これは長浜のことですが。この姫城浦からたどって行けばどんなことになるのかなと思って。

浦というのは湊ですからね。いわゆる舟が出て行くところ。

藤浪 住吉崎に近ければ、富隈城の近くになりますよね。今の氣色の森の辺だとすると、姫木城との関係がどうなりますかね。

納 二十余町は今の距離で云えば、約2km。

平田 そんなもんじゃないかな。

藤浪 気色の浜も今の氣色の浜じゃなくて——

小園 今の新川はちょっと曲っているでしょう。作り直してね。具体的にはこっちが早い。

平田 これはまだ新川を作り直していない時代の話だから。

小園 気色の浜の下のところに、同郷の中神溝村

藤浪 「カミミヅ」じゃなくて「シンコウ」。

小園 ああ、真孝(シンコウ)。

平田 なるほど、神溝(シンコウ)か。シンコウ：真孝と読めば意味がすっきりするね。

小園 この辺まで真孝が入っていたわけですね。広かったんですね。

平田 真孝は広いね。

小園 115ページに歌があげてありますが、気色の森に来てうたったというのは？

平田 それは少ない。

小園 気色は景色で、想像的に書かれたんじゃないか——

平田 有名な歌枕だから来なくともちゃんと盛り込んだ。それは和歌のテクニックだから、当たり前でしょう。

小園 実際に来てうたった歌というのは、判っていないのですか。

平田 ここに来てうたったのは少ないんじゃないかな。というのは、恐らく大隅国府の人々が素敵だと宣伝をして歌枕になってしまって、歌人達がうたい込むだけですからね。

青柳？ 西行法師ぐらいは来たんじゃないですか

納？ 西行は来たかな。

平田 細川幽斎は来てるでしょうがね。

藤浪 遊行上人は来てるのではないですかね。

平田 遊行というのは何世もいるからね。遊行上人は来てるでしょうよ。

拍子橋・隼風神社・景色の森

肥後 小原さん。この拍子橋というのは今のどの辺にありますか。

小原 四方田団地の東、ちょうど、ソニーから。

鈴木 京セラから、です。

小原 そう、京セラから入って来るところに。

肥後 何か立っていますか。

平田 石碑が立っています。

小原 橋は残っていないようですが、昔は石橋だったそうです。それが、どこの場所だったかは判りません。

藤浪 113ページの隼風宮。隼風(ハヤゼ)はどういうふうに考えたらいいのでしょうか。隼人町には早鈴神社というのがありますけど。

平田 小浜の線路脇にある神社のことでしょう。

小園 これは隼風(ハヤゼ)と読みます。

平田 ハヤテ？

小園 止上神社もあります。神社の入口に。

平田 止上神社のは隼風(ハヤゼ)神社と読むの？

小園 そうです。同じ区域にある。

藤浪 止上神社は正宮と同じ系統ですよね。宇佐神宮にしても。

小園 隼人を征討した時に勧請した。だから祭神は決まっている。えーと、ちょっと忘却ましたが。

藤浪 隼風はやはり早いですか。

平田 だからハヤテというんでしよう。それからこれは消えてしまってますね。115ページに出て来る「木堀」という小字。

肥後 ああ、木堀。これはない地名ですね。

平田 これ(木堀)は、なくなっていますね。

肥後 鼻面はある。小字名で残っていますけどね。この前もらって来た資料に、東さんの書かれたのにですね、鼻面川というのがある。

平田 鼻面川というのは肥後先生の家の側にある川。

藤浪 実業高校の西側の川。

肥後 えゝ、あれです。

平田 今はドブみたいになっている川。

小原 鉄道の向うから流れて来る川です。

平田 これを読みながら、今年の巡検は今日読んだ歌枕を回るのもいいなと考えました。あとで曜日を決定しますけど、国分の人たちも今日見えたわけですから、案内役を引き受けてもらって歌枕を回るのもいいなと思います。景色の森から132ページの嘆きの森・風の森、それから景色の浜まで見れたらね。今年の巡検は、そこを選びましょう。勝手に提案しますが、具体的にどう行ったらよいか、国分の人達に考えてもらいましょうね。

再び姫城浦

納 116ページの下の欄の最後なのですが「一名住吉崎、住吉神社有による。姫城浦、長門本平家物語に出たり」と、その次に「気色杜より午方二十余町の海辺の名也。姫城村よりも同じ方に当りぬれば称ふ上世は海涯いとちかかりしとぞ」。この中に姫城村とありますね。この姫城村とですね、気色浜との関係ですが、気色の森といえば、自衛隊のある海岸の方でしょう。

平田 ああ、あれは気色の浜です。

納 森はどういう所にあるんですか。

平田 ちょうど真ん中ぐらいにあるんです。

納 真ん中ぐらいの所？

平田 姫城と気色の浜の中間にぐらいにね。国分駅のすぐ側です。

納 国分駅の方？

小原 ソニーの北側。

肥後 鉄道線路のすぐ北側。
小原 ソニーの北側ですかね。
納 ソニーの北側?
肥後 日豊線よりは、ちょっと山手の方に行った所。すぐ近くです。
納 真ん中辺に何とか、村と書いてありますね。
平田 ああ、あれは今のは姫城の方。
肥後 あれは姫城の方です。
納 姫城の方?
肥後 はい。
納 ああ、そんなら判りました。姫城浦というの、どうも判りにくくて。
平田 別名、住吉崎とも姫城浦ともいう、ということでしょう。
納 気色の浜=姫城浦が、どうも。私が思っていた所と、自衛隊の下の景色の浜と混同しちゃったもんですから。
藤浪 景色の浜は、現在はかなり海側に来ているのですよ。以前はまだ上だったんでしょうけど。
納 あそこに、バス停もありますよね。
藤浪 あれはまあ云えば、この頃なんですから、それよりはまだちょっと北にあった——
納 まだ北にあった?
藤浪 まだ北に入りこんでいますね。
平田 気色の浜という歌枕、いや、気色の森ですね。汽車通勤をしつゝて気付いたことですが、汽車の窓から見て、ああこれだなと思ったことがあるんですがね。景色の森・府中あたりに霧がかかって、高千穂峰とか韓国岳が霧の上に島のように浮かんで見える時があるんです。これから「霧島」と名付けたのだなど、大隅国府の国司たちが名付けた名称だと、すぐ判るんですね。霧のかかった情景が、止上神社あたりの景色が、ちょうど水墨画を描いたような状態になるのです。すばらしいと都で宣伝するのに恥じない景色なんです。とに角、すばらしい。

肥後 眺めは良かったでしょうね。
平田 霧島の方を眺めても良かったでしょうし、桜島の方を見てもね、昔は眺めを邪魔するものは何もなかった筈ですから。
肥後 さえぎるものはないですね。
平田 すばらしい景色の所だったと思うのです。
小園 ただ、気色の森は現在の景色の森ではないのですよね。
平田 そう、移動している。
小園 どの位、移動したのですか。
肥後 どの位かな。
平田 もとの場所が具体的に判っていないので。でも、そう離れてはいない。100メートル ちょっと位。
藤浪 今の神社がありますね。何ですか。
平田 天神さん?
藤浪 あそこまでは、ちょっとありやせんですか
小園 森の原処はどっち?
平田 ああ、辰の方一町許り。南の方に行って、ちょっと低い処。
小園 僅かですね。
平田 そう變っていないと思う。鉄道線路の辺にもとの所が考えられる。
納 ちょっとお尋ねします。そこに姫城浦と書いてありますね。姫城浦と。あの辺が浦という。普通海岸を浦と云いますが、姫城から見た場合あそこは海岸じゃなくて牟田、川の——
平田 そうです、河口です。
納 河口の?
肥後 河口じゃなくて、大津川。いわゆる現在の新川ですね。
納 浦ということばがですね、川の上流の方だという意味もありますね、浦は。
肥後 えゝ、それもありますけど。
平田 そういう意味もありますけど、この場合の浦はやはり海岸でしょう。

納 海岸ですね。
肥後 そう、ここは大津というて、大津川の港というかな。昔はずーっと上流まで入り込んで來たそうですから、景色の森の近くまでですね。
小園 江戸時代の浦となると。
肥後 えゝ、舟はそこまでのぼって、舟の何ですかね。
納 舟着場といふ——
肥後 舟着場ですね。そういう意味もある。
納 海浜だけじゃなくて河川でもそういう意味の浦があり得る。吉田に宮之浦という地名がありますね。普通「浦」といえば、海岸だけを考えますが、あそこは山の中でしょう。どこかで聞いたことなのですが、ウラというのは木の末(ウラ)と云いますね。
肥後 えゝ、大浦とかね。
納 稲荷川のズーっと上流にも「浦」というのがあるらしいですね。それで、この姫城浦というのを考えてみると、姫城というのは府中の向うの方ですね。あそこだったら、ちょっと浦の解釈が難しいなと考てお尋ねしたのですが。
平田 116ページの下の段の4行目に、気色の森の木末(コリ)とあるでしょう。「木の末(ウラ)」と。キノウレをコヌレと訛って読んでるわけです。万葉集などもそう読んでいますけどね。ウラ・ウレというのは先っちょという意味ですね。
小園 今の浦の話で。宮之浦というのと佐多之浦とか西浦とかありますね。現在は舟では行けませんけど、宮之浦は吉田八幡のある所で、宮の先端とか上方という意味で使ったでしょうが、下の方は近世まで舟で物を運んでいたらしい。しかも佐多というのは禪寢氏の領地ですから、禪寢氏がそこに移動して佐多之浦と名付けたことも考えられる。近世までは年貢の運搬を舟でしつゝて。そんなことがありますので、下の方の浦は港に近い意味かなという気がします。宮之浦は、とても舟では行けません。
宮のウラ側という意味でしょう。まあ、私の考えですが。
納 福山に宮浦神社というのがありますね。あれは海岸にあります。それと、屋久島に宮之浦という地名があります。あそこも舟着場なんですね。それとつながらせんかと思って。吉田町の宮之浦が以前から気になっていたのですが、木の末が「ウラ」だということを聞いて、そういう意味もあるんだなと思って申しました。
平田 まだ他に、西浦とか、奥の方にあります。この「ウラ」はしおちゅう話題になります。
大隅・薩摩への侵入路
小園 ヤマタケルノミコトとか川上タケルとかよく話題に出て来るのですが、大隅国・薩摩国に軍隊を引き連れて、どこから来たのかなということをいつも考るのですがね。明確なのはないわけですね。ただある程度、串良の方の海岸に日向の方から來たということが考えられます。あるいは小林から霧島の尾根を越えて来るとか。
平田 ああ、攻め込んで来る場合のルート?
小園 えゝ攻め込んで来る場合のルートですね。云うことを聞かぬまつろわぬ隼人というのは、天降川の近辺・桑原の東郷; 桑東郷(くわとうごう)、桑原郡の近辺にいるんですね。そこに侵入軍を引き連れて入って来るんですけどね、隼人討伐の軍隊というのはどこから來たのか。これは歴史的に証拠がない話ですがね。
平田 難しい問題だな。一つ・二つ手掛かりは考えられるけど。大隅国を征圧する場合、必ず国分近辺が問題になります。例えば、島津氏が大隅国を征圧する時、まず最初に攻撃したのが国分地方。その上で周囲を征服して行くわけだから。大隅国府が置かれた近辺を叩くことが大隅国全体を抑える道だろうから、国分はまず叩かれるということだね。逆にいうと、国分地方が反乱の拠点になるわけだ。

まつろわぬ隼人たちの巣窟だった。それに対して、さっさと降伏した隼人たちが手引きすることも考えられる。そうでなければ入って来れないでしょう。それから、もう一つ。島津氏が国分地方に勢力を広げる時に、長浜の生別府城(おゆみやじょう)を拠点にした。だから、大隅国を攻める場合はやっぱり隼人町と加治木の間あたりから攻めて来るのが、一番攻め易いのじゃないかな。

藤浪 でも、あそこは山で、陸上はちょっと難しいですね。

平田 海から攻めて来るのが一番攻め易いのじゃないかな。

藤浪 さっき話題になった鳩ノ脇から、よく上っていますけどね。近衛信輔卿なんかも。鳩ノ脇は今の三島ドライブインのあの辺ですから。

小園 三島ドライブインというのは、新しいバスが出来る所?

藤浪 国道10号線。

小園 あの近くのドライブイン。島津義久や義弘なんかも、よくあそこから入って霧島に向っていません。判りました。

平田 海から攻めて来なきゃ、攻めにくいのじゃないかな。

小園 長浜のあそこですね。それから、もう一つはどうだろうか。今の都城・隼人間の道路の延長上には。

藤浪 大友氏と戦った時には、やはり霧島越えを

しております。

納 福山の病院の院長さん。何病院だったか。

平田 松下病院?

納 ああ、松下病院の院長さんが書かれた鼎馬台国の本に、隼人のことを書いておられたのですが、都城あたりから山越えをして国分に入ったような説明をしていました。

藤浪 隼人町の松永から霧島の方へ抜けるところに豊後田という地名があって、豊後の兵が侵入して来たという伝説があるんですよ。あの辺が古道かなと、今ふと思つたりしたんですが。

小園 豊後田というのは、松永小学校の近く?

藤浪 はい、向い側です。

小園 霧島の方に豊後坂というのがありますね。豊後迫というのも。

平田 同じようなことを云つてゐるわけですね。

小園 それから、もう一つ。霧島に韓國岳とあります。それが明治10年の陸軍省の地図には霧島西岳と書いてありますね、韓國岳ということばは使ってないようですが、「虚國」という表現がありましたかね?

平田 これ(鹿児島名勝考)にも入っているよ。

小園 ありましたかね。明治になってから「韓國岳」ということばが使ってないもんだから、おかしいなと思ってですね。

平田 前回のところに出て來たようです。前半はこれくらいにして、ちょっと休みましょう。

す る 地 名

月巴 後 芳 尚

料を整理したので、どうも泥縄式のようです。

「竹に関する地名」とはっきり書きましたけれども、まだ本論に入りきらない状態で、今回は問題提起と云つた形でお考え頂きたいと思います。

竹に関する地名は、植物地名に関連して竹の方も

一応見ておきたいという程度で調べて参りました。それと、山の地名について以前から関心を持っていましたが、山岳の岳(峯)地名と植物の竹地名との関連に興味を覚え、資料に当っていました。

さて、竹についてですが、特に鹿児島では昔から土木・建築・生活用具・食料等と生活全般に亘って欠かせぬもので、皆さん十分ご承知のとおりです。私も復習の心算で、先日蒲生町の県林業試験場を訪ねて、浜田甫経営部長からいろいろ話を聞き、貴重な資料を頂いてきました。

浜田さんは鹿児島大学農学部の出身で、わが国の竹の権威者であった京都大学名誉教授の上田弘一郎先生の指導を受け、竹の研究者仲間でも一目置かれ、植物学のみならず民俗学等いろいろな方面から研究しておられます。また、県内の竹産業界の振興に尽力され、大きく貢献しておられます。

(I) 竹の品種について

竹にもいろいろな品種がありますが、臘葉(サヨ)を見て、ここで説明しましても実物でなくてはお判り頂けないと思いまして、試験場内の竹類見本林で代表的な県産竹類の写真を撮って参りました。また浜田さんから頂きました資料の一部をコピーしてお手元にお配りしましたから、これ等を参考にして回覧いたします写真と見較べてみて下さい。――

(資料2. 林業試験場竹類見本一覧表)

竹というのは高いということからきているのだろうで、山岳の岳(峯)も高いという意味があり、そういうところで結びつきができたのかも判りません。

竹には大別してタケとササがありますが、一般に大型のものがタケで、小型がササだと思えば間違いないそうです。

それから、先に申し上げましたとおり竹は竹幹の利用、竹皮、筍、それに竹林が防風、防水、生垣等に利用されますが、竹の品種によって用途が異なることはご存知のとおりです。

さて、身近なものから見てゆきますと、第一にマダケ(真竹・苦竹:方名カラタケ)です。全国の70%がマダケであるといわれ、マタケの数万年前の化石が見つかっており、古くからわが国に産したものです。変種としてキンメイチク、ギンメイチク、ホテイチク(方名:コサンダケ)があり、ホテイチクは稈は釣竿として利用、筍の美味なことは第一といわれています。

次に、モウソウチク(孟宗竹・江南竹:方名モダケ)は用材として利用が多く、筍は庶民にもなじみのものですが、これは元文元年(1726)第21代藩主吉貴が琉球に命じて薩摩に送らせ、磯の仙巖園に植え、ついで領内・外に及んだといわれています。ハチク(淡竹)は稈高、周囲ともマダケより小さく、筍はモウソウチクの終る頃に発生し、マダケより少し早いですが中国産です。

クロチクはハチクの変種といわれ(牧野博士)、稈は暗褐色、年を経て、紫黒色乃至黒色となり、庭樹として利用されています。

カンチク(寒竹:方名ゴゼダケ)。この竹には大小2型があり、大はハチクのようで、小はキセルのように細いものがあります。筍は秋より初冬に発生。株立ちの姿態は雅趣があり、小庭向きの材料です。

シカクダケ(四角竹)は稈の断面が四角形、稈高3~5m、筍はカンチクと同じ。庭園に植えられます。

ホウライチク(蓬萊竹:方名キッチンダケ)。わが国では生垣として普及。九州でよく見られます。中国産。

カンザンチク(寒山竹・大明竹:方名デメダケ)材は極めて軟く、雪折の害に弱い。中国産。リュウキュウチク。稈高2~3m。琉球に自生し九州南部に植栽されています。

メダケ(女竹・弱竹・簾竹・苦竹・川竹:方名

ナイダケ。加世田方面はニガタケ）。日本産竹類中最も普通のもので、原野、荒地等のも見られる。筍は6月に発生、苦味が強くて食用にならず、ニガタケの名はこれによるものです。稈は小細工物・墙壁の骨として用いられ、生垣にも用いられます。

ヤダケ（矢竹・篠竹）は、節間が長く矢を作るのに適しています。

ダンチク（蘆竹・ヨシタケ：方名、屋久島ダチク加世田ダチッガラ、垂水タデキ、佐多タデッガラ、大島タテク、奄美デーク）。茎は木質、高さ2~3m、周囲0.12m。筍は4・5月に発生、本州（関東以西）・四国・九州・琉球に産し、海岸地帯・臨水の地に生えています。

以上、代表的な竹を挙げましたが『鹿藩名勝考』に数ヶ所竹に因んだ地名が出てまいります（資料3——鹿藩名勝考より）。林業試験場の浜田さんの説明によれば、加世田の「竹屋郷」の竹はホウライチクで、「竹島は青葉竹などのうるはしく生る地」とありますが、これはリュウキュウチクとのことです。国分市郡田の青葉山は「大隅州名所の一つで、青葉竹は此山の名産、俗に台明竹という」とあります、これはカンザンチクで、この近くの篠田は「篠竹の竹ヤブ」とあるのはヤタケの由。

(II) 竹に因んだ地名について

小川 豊氏は建設技官としての立場から危険地名について書いておられます、そん中で竹地名をとりあげています（資料4。小川 豊『災害と地名』より）。

タケは 1. 滝 2. 岳 3. 竹 4. 茎を意味し、ダケは 1. 崖 2. 破碎石の堆積地を意味しているとしています。反論する方もおられます、現地に行きましたと同氏の説に賛成させられることが多いです。

次に、手持ちの県内の地名文献から、竹に因んだ地名を拾ってみました。

○諫北町の『わが町の字絵図に見る地名の由来』

下百引 竹迫=タケは崖の意で、崖の上にある地
竹之上=同じく崖の上にある土地
笹ヶ迫=社寺のあった所で、酒を作った名残り。

○宮之城町の『珍らしい地名の由来』

格野区 笹段=メゴ笹が繁っていたから
泊野区 笹段=小笹が密生し、狐や狸が出る所。

久富木区 こさん山=こさん竹山を伐り開いて屋敷とした。

○上屋久町 永里丘『屋久島の地名考』

上屋久町

永田区 志ノ山(シヤマ)=死出の山

吉田区 志ノ竹(シタケ)=シノは凌ぐの意味で、周囲の山を凌ぐ高い山がシノ岳

一湊区 竹山

宮之浦区 竹山ノ上

竹ノ数(タカハ)、竹ノ数東、竹ノ数西
竹ノ数下=岳ノ岸(カタ)の当て字。

高い山の不毛の地(岸)(岩片まじりの崩土)

小瀬田区 篠山=死出ノ山。

○屋久町 平内区 竹山、竹ノ山

中間区 駄竹河=両岸にダンチクが密生している谷川。

栗生区 駄竹谷

県内の地名研究の方々の解釈は、以上述べた通りですが、何分私の手持ちの資料が少ないので、これ以外に多くの意見・解釈のあることは勿論です。

次の作業として角川の日本地名大辞典の小字一覧から竹に因んだ小字名を拾ってみました。大島郡の地名は判り難いし、読み違いのあることをおそれて今回は大島郡は省きましたが、県下82市町村の竹に因んだ小字名は資料5ノ1のとおりです。

竹に因んだ小字名の中で、「竹」字の付いた小字

名は150種余を数えますが、最も多いのが竹下、竹山の夫々11種で、駄竹(ダチク:和名ダンチク)と竹原の9種、竹迫の7種が多い方です。一方、一つしか出てないものが33種もありますが、その中に竹の品種名がいくつか見られます。

小字一覧に出てる小字名の中には、当て字と思われるものが少なくありませんし、一つの植物でも異ったいくつの方名で出ているものもあります。例えば、高竹、村竹、笛竹は葦竹で、田竹は駄竹を、女竹、成竹(イカ)・苦竹(トカ)、志ノ竹はメダケを指し、唐竹はマタケ、四目竹はスズタケ、破竹は淡竹、小三はコサンダケ、屋竹は矢竹と思われます。

笹の字の付いた小字名では笹原5種、笹山、笹野が夫々3種、笹平、笹段、笹尾が夫々2種で、金峰町に笹連(サレ)の43種の小字名があります。また西之表市に先述の笹嵐があります。

姓氏と地名には密接なつながりがあり、姓氏の約8割が地名に由来していると云われています。身近な例として、先頃平田先生から頂いた植物地名「桟木(カキ)」のレポートがあります。私もずっと以前、川内市出身の桟木という人から、「桟木」とは辞書によれば役に立たない樹とありますがどんな樹ですかと聞かれ、調べたことがありました。桟木というのはゴンズイ、センダン、こうぞを指します。

日吉町の吉利に桟木山、桟木畠という小字がありますので、平田先生のレポートを頂いてから早速同町の郷土史家の瀬野先生に問合せました。瀬野先生は日吉町郷土誌の編纂にもたずさわっておられて、周りの事情にも精い方で早速返事を頂きました。桟木山という小字地区は日吉町の奥まった所で、桟木畠とは大分離れているそうです。桟木山の地区には藩政時代から桟木、新留の二つの門(カド)が住みついており、桟木山という地名は桟木門の人々が住みついたので、その辺りの山を桟木山というように

なったのか、桟木山の辺りに住んでいたから桟木という姓を名乗ったのか不明です。

桟木畠は大分離れているので、多分桟木門の人々がそこを開墾して桟木畠の地名が付いたのではないだろうかと瀬野先生の意見でした。センダンは暖地の海岸近くによく生育する樹で、私達の小さい頃はほとんどの小学校で、校庭に緑蔭樹として植えられていきました。日吉町でもセンダンはよく見かける樹で、桟木山にも比較的多く生えていたから桟木山という名がついたのかも分りません。桟木畠というのが楮が栽培されていたのかもと期待していたのですが、期待は美事に外れたようです。

桟木門の人々は代々木挽(ヨキ)を業とし、川内市や人吉、宮崎方面へも進出してゆき、製材業に手を広げた人もいるそうです。

国分市の敷根にも桟木という分限者がいたそうですが、桟木家も舟大工から財をなした家と聞きました。

姓氏が先か、地名が先かで地名と姓氏とは切離せないと思いましたので、鹿児島市内の「タケ」に関するある姓を電話帳から拾い上げてみました。それが資料5の2です。「竹」のついた姓で一番多いのが竹内姓で、次いで竹下姓になっています。「笹」では笹平姓が多く、篠原姓も案外多くなっています。「武」姓も参考までに調べてみました。

次に、山の地名で「岳」との関連を見ようと、南日本新聞社刊の『ふるさと鹿児島万能地図』の町村界あるいはその周辺にある山の地名を拾ってみました。鹿児島には「岳」のつく山の名が多いと云われていますが、離島を除くと県本土の山の名は100近くあり、「岳」が49で42%、「山」が34で36%、岡が5つで5%です。「竹」と「岳」との関連を知るには現場を見ることが第一条件で、現地を見ていない現在、この程度に止めておきます。

以上、「竹」地名について問題提起をしましたが

その由来の分らない地名が多いので、皆さんのご協力・ご指導をよろしくお願ひ致します。

(資料の訂正をお願いします。)

竹に関する地名(角川小字一覧) 5の1

中列 竹敷(誤) ⇔ 竹数(正)

(質疑応答)

平田 ありがとうございました。実は駄竹(タケ)という地名は以前から疑問に思っていたのですが、ご説明でよく判りました。また和名抄の竹屋郷とか竹島について、ホウライチクの植生にもとづくものであるとか、リュウキュウチクによるものであるとか、さすが自然科学系統の人々は文科マンとは視点が違うなと感心しました。それから今日頂いた資料で最後の2枚は神話・民話が網羅してありますので役立つ資料になると思います。ほんとに有難うございました。もう時間も12時になっておりますが何か質問があれば出して下さい。

鈴木 「シノ」には「端っこ」という意味がありますよね。シノダケもありますけど、そういうのも必要じゃないかなと思うのですけど。

肥後 「シノ」ですか?

鈴木 端っこの方という。

肥後 端の方という意味があるのですか。

鈴木 はい。

小園 林業試験場の竹の品種の説明に、カンザンチクとリュウキュウチクの例示がありますね。私たちは普通ダイミョウダケと云いますね。国分市郡田の日枝神社の、いわゆる青葉の笛竹の竹とリュウキュウチクを比較すると、リュウキュウチクはちょっと小さいような気がするんですが。

肥後 そうですね。見た感じがほっそりしています。この写真を見てもらっても判ると思うのですけど。

小園 われわれが見る台明竹は大きいような気が

するんですが。

肥後 えー、そうですね。

小園 カンザンチクは、まだ大きいのがあるらしいですけど。リュウキュウチクは?

肥後 リュウキュウチクは、写真にありますけども、これはすらーっとしてます。

小園 デメダケというのは正式の名前ですか。鹿児島ではダイミョウダケをデメダケと云いますが。

肥後 デメダケというのは、方名です。

平田 ダイミョウダケも方名ですか。

肥後 そうですね。

郡山 さっき話がありました城つくりと「タケ」の関係ですが、私のところ(郡山町)に12、城(城)とつく地名がある。そのうちに7つぐらい「竹・岳(峠)」という名前が付いております。だから興味深くお聞きしました。

肥後 やはり、輝北町の報告にもありました通りですね、山城は崖の険しい所を選んで作られていますから。竹迫という地名の場合もそうですよね。城の近くにある。

郡山 それで、城のまわりの小字に「竹」が付いているのが、何か理由があるのじゃないかとも考えるので

肥後 まあ、コサンとかマタケというようなのはあとで付いた名前だと思うのです。ただ「タケ」というのが付いたのは恐らく読み変えがついているんじゃないかなと思いますけど。全部が全部そうではないかも知れませんけど。現地を見て考えることが必要だと思います。そう云いながら、私はまだ現地を見てないもんですから。

平田 今日頂いた資料でバンブーの竹田が30例、武士の武田が20例。これだけ使い分けられていたら感覚的に混同はないですね。だから案外漢字の意味というのも相当理解していた、裏付けがあって漢字を用いているという感じを受けますよね。それから

松竹梅という考があるて大事にされるのですが、松竹の地名は案外少ないのでよ。

青柳 地名というのは当て字だという考方は、少しは考直さなければいけない。漢字も意味があるということですか?

平田 漢字も相当意味があると思うのですよね。しかし、まるっきり漢字を信じ込んでしまったら間違いでしまうけど。竹田と武田は明らかに使い分けがあると思われます。

小園 ちょっと知った方で、「武」を二字にされて、「田毛」と書いたり「竹山」としたり、いろいろそういうことをされるのですが、やはり今云われたように竹に関するものはやっぱり「竹」。古代には「竹之御厨」というものもある。その武岡の場合は、竹があつて岡と付いたような感じがしますね。

鈴木 私は、先日ある開発関係の方と車で一緒に回りました。現地には降りなかったのですが、ちょっと気付いたことがあります。特に国分市の場合、いわゆる始良カルデラの縁になる古い崖があつて、なんと云いますか、以前からある竹林のようなんですが。崖を見た場合、やはり竹林がありますので、国分地方の「タケ」地名は、崖と結びついているなと思いました。と云うのは竹之元という所に行った時に聞いたことですが、そこは昔崖崩れがあったそうですが、現在は竹林になっています。竹というのは生命力が強くて根の張り方が早いということで、すぐそこに竹林が出来てしまふらしいのです。今、先生が引用された地名をみると、やはり場所を云つてゐるわけですね。竹下とか竹山とか。そして地名と災害の関係についても、崖崩れがあった後にすぐ竹が生えるということも事実ですが、崖崩れ以前から竹林があることも考えられますから竹の付いた地名はその点も考える必要があると思ったのですが。

池田 長い竹垣の家。偶然かも知れませんが竹の生垣のあるところが全部医者のです。そういう

云い方は歎医者ということ。(笑い)。鹿児島だけの云い方かもしれません。

松田 外来の竹で、磯庭園にあるのは?

肥後 孟宗竹ですか。

松田 他所から持つて来たんだということですが肥後 あれは、そうですね。

松田 持つて来たんじゃなくて以前からあったのだというのを、どこかで読んだ記憶があるのでその史実の通りですか。

肥後 えゝ、それはそうですね。もう一つ、説があるのですが。磯に入ったのが日本に孟宗竹の入った一番初めだと聞いたのですけれども、京都の宇治黄檗山の僧が唐から持ち帰ったという説もあるのです。この僧が851年に死んでいるから、磯に入ったのよりは千年近く古いという。日本にもとからあったのは、メダケとマダケだそうです。ゴキダケもそうです。

平田 ジャー、終りにしましょう。どうもありがとうございました。

(事務的連絡)

平田 二つ決めておきたいと思います。12月の第1日曜は小園先生に「与論島の地名」をお願いします。何日になるかな?

小園 1日ですね。

平田 1日でいいですか。

小園 いいんじゃないでしょうか。与論島のこといいのかな。

平田 他にしたいことがあるの?

小園 霧島町の旧道。明治以前の古い道を、一応やらしてください。卑近な例ですから。

平田 面白いテーマですね。それをお願いします。11月の現地巡査は、さっき提案しました歌枕を回りたいと思います。11月はどの辺が都合がいいですか。第1・第2日曜日あたり。去年は11月の終

り頃でしたか？

肥後 終りでしたね。

平田 例会の2週間前にしましょうか。

肥後 おせいと寒かったりしますから。

小園 17日はどうですか。

藤浪 17日は県の考古学会が隼人町である。

平田 隼人町である。重なるのはまずい。11月10日に予定しておきましょう。具体的には案内役の国分の人たちと相談します。

33号の訂正

○ 4ページ左 下から11行 平房(ヒラボ)⇒平坊(ヒラボ)

○ 4ページ右 下から14行 (コゲン:コイテ)⇒(コイテ)

○ 5ページ左 下から 4行目以下

『出水郷土誌』は景行天皇が来たんじゃないかなと云いますけども、実際は黒之瀬戸の海洋族を頼りにしたのでしょうかね。⇒『出水郷土誌』は出水地方の隼人を討つために景行天皇が来たんじゃないかなと云いますけど、実際は来なかったといえます。

○ 5ページ右 上から 8行 大きな船がおった ⇒ 大きな船が沢山おったということになります。

○ 5ページ右 上から 9行 この目標が一直線に ⇒ この目標の矢筈山と笠山が一直線に

○ 5ページ右 上から12行 当時は郡郷制ですが ⇒ 当時は郡郷制の成立以前ですので、

○ 5ページ右 上から13行 大宰府管内のクニとしか ⇒ 大宰府管内のクニとは

○ 5ページ右 上から15行 狩猟民族的な人たち ⇒ 領主的な人たち

○ 5ページ右 下から11行 四方の線 ⇒ 中心の線

○ 6ページ左 1行目 「路木」 ⇒ 「呂木」

○ 6ページ左 2行目・14行
ハシケ ⇒ ハジキ(土師器)

○ 6ページ左 下から12行 完成して ⇒ 勧請して

○ 6ページ右 上から14行 その後に住吉神を ⇒ その後に加紫久利の住吉神を

○ 6ページ右の真ん中辺 ~7ページ左の上から 5行まで
高尾神社 ⇒ タカオカミ神社(6ヶ所)
高麗 ⇒ 高麗(3ヶ所)

次に、尾野島の堂山の白山権現と紫尾山を線で結ぶと、天道信仰で話しましたとおりに其の線上に出水市の紫尾山のすぐ下に「丸塚」があり、次に高尾野町の「大久保」があり、次に古代の紫尾神社(下宮又は田ノ宮)の存在地とされ、現在は諏訪神社が祭られている「諏訪山」がある。

そこで出水市にある「丸塚」については、紫尾山のすぐ下にあって紫尾山の頂上は見えない場所であるために、方角として「石を積んで塔となす」石の塔でもって山と見ると考え、山を拝むための方角的な方法とも考えられるが、出水市の「丸塚」の塔は傾斜地の田圃の中にあり、底辺の直径は13m以上あって上部の平面の直径は5m以上ある。高さは低いところから5m位あり、高いところから2m位のもので比較的大きいものである。この丸い塚が「丸塚」の語源であるが、古代信仰としての「天道信仰」の研究から割り出された地名である。

今日の研究で「天道信仰」の年代設定は、西暦紀元前3世紀から5世紀頃までは存在した信仰とされ、後に「天童信仰」として変化したとされる。更に別の「トリニティ方式」と呼ばれる太陽信仰形式に変化したものといえる。この信仰の形式は入来町の本田親虎先生が発表されているので省略します。

そこで、加紫久利神社に関する「天道信仰」は西暦3世紀頃と考えられ、紫尾信仰もその頃にむしろ同時に成立したものではないかと推察される。

そこで、紫尾信仰が成立しますというと、高尾野の大久保というところが出て来ます。大窪とも書きます。-----以下、5行目に続く。

○ 7ページ右 下から 7行目 東禪寺 ⇒ 東全寺

○ 7ページ右 下から 8行目 狐藪 ⇒ 狐ヶ尾

○ 8ページ左 上から 4~5行

クマソですが、クマソはふだんは漁業をしておった一つの集団と考えます。(全文、消去)

○ 8ページ左 上から 5行 尾ノ島は戦闘集団で、⇒ 尾ノ島の戦闘集団は、

○ 8ページ左 上から 7行 蓮雀野 ⇒ 蓮尺野
○ 8ページ左 上から 9行 連雀野 ⇒ 連尺野
○ 8ページ右 下から10行 島津吉貴⇒島津義虎
(島津義虎は薩摩家第六代)

○ 8ページ右 下から 5行 紫尾神社⇒加紫久利神社
○ 9ページ左 21行~24行 次のように変更

その他いろいろ地名がございますけれども。それで、当時の交通について参考のために申し上げますけれども、昔の交通というのは日本の縦の交通は全て海上交通が中心であって、陸上の交通は港を起点として山の方へ行くのが主体でした。加紫久利神社関係の主力は余程のことがないかぎり動きませんが、この尾野島の人たちは戦闘集団であるだけに「尾野島」から紫尾山の方に相当に奥深く進出しておったはずで、戦国期以前から「けもの道」即ち「野道」を通じて不意打ち攻撃をしたとの記録が出てきますが、これらの「けもの道」は既にこの当時に道筋があったわけです。江戸中期になってから、現在の3号線に沿った道を行くようになります。

○ 9ページ右 1行目 町が ⇒ 牧の跡が
○ 9ページ右 上から 9行 その付近に⇒平坊の所に
○ 10ページ~12ページ、14ページ~15ページ

トリーティー方式(10ヶ所)⇒トリニティ方式
○ 13ページ左 上から 4行 遺跡 ⇒ 事跡

○ 13ページ左 上から 5行 あすこ ⇒ 水島
○ 13ページ右 下から11行 宇佐大社⇒宇佐神宮

○ 15ページ右 21行~26行 次のように変更

花田 そういう言葉ですね、促音形に変ってくるのは、あの、梵字なんかでも、それですよ。梵字なんかでも。あの梵字が何字も重ってきますというと母音が消えてしまって、結局、単音だけ残るんですよね。子音に当たる部分のみ残ります。例えば、よくご覧になる梵字ではこういうのがあります。「娑」(娑一)、普通は阿弥陀如来を表現する梵字ですが、この字の一番中心になる梵字は「娑」(ガ)、

これは「ha(ハ)と発音しますが、これに「ト(ヲ)字と、「イ(イ)字、「ア(ア)字の略した記号を加えて、キリーグの一文字を形成致します。これを発音記号で書きますと《ha+ra+i+ah+》。これを梵字の正しい発音に直しますと《hrih》となり「キリーグ」と発音する文字になります。一字一字の発音から母音が消えて僅かに「イー」字(i)のみがこの場合は残るものとなります。以上のようなことがありますので、母音が消える場合と逆に子音が消えて母音のみ残る場合とがあると考えます。薩摩弁なんかの場合は特にその考え方があるんじゃないかなと思いますが、どんなもんでしょうか。

本田親虎先生からの手紙（要約）

(1) 第32号で、浜崎さんが言わされた田積のことについて
1段 = 360 歩 = 5丈 ですから、1丈 = 72歩 となります。

(2) 第33号の「トリーティー方式」はすべて「トリニティ方式」の間違い。入來の神社配置について仮称しているものですが、これは「trinity」です。

何故わざわざ外国語を使ったかというと、ヤソ教の三位一体をいうトリニティ

から、現在学界で使用されているところの三位一体的祭り方、例えば弥陀三尊
弥陀・觀音・勢至のように○○の形になりますが、入来でも川内でも国分地方

でも大和の明日香地方でも神社の配置がこのように三神社を1セットにした形

になっているからのことです。私はトリニティ祭祀法=三位一体祭祀法と仮称している次第です。

（後記）第23号のためのチェック原稿が連絡の一

(後記) 第33号のためのチェック原稿が連絡の手違いで、例会の日に自宅に届きました。帰宅後

それを手にしたので、このように訂正の多い会報になりました。

鹿木 ← ごくあ 皆さぬ土 玉モモIO になりました。皆さぬ土を入手すれば、立派な魔力

林業試験場竹類品種見本一覧表

平成元年5月現在 100種

属名	種名	属名	種名	属名	種名
ホウライチク属	ホウライチク(キンチッダケ) スホウチク(シマギンチク) ホウオウチク(コギンチッ) ギンメイホウライ ミドリベニホウオウ・本県特産 ミドリスホウチク・本検特産 コバコマチ(コマチダケ) チュウバノコマチ ホウライコマチ ホウショウチク ベニホウオウチク ダイフクチク(ラッキョウダケ) キンシチク リョクチク チョウシチク パンブサの一種(斑入種)	メダケ属	アケボノザサ ゴキダケ(ゴッダケ) ハコネダケ フイリハコネダケ オロシマチク ウエダササ(コウモンチク) チゴザサ(シマザサ) ケネザサ タイミンチク(アオバタケ) ラセツチク・本県特産 カンザンチク(デメダケ) シロスジカンザン・本県特産 キッコウカンザン・本県特産 フシダカシノ ギボウシノ(コガラダケ) リュウキュウチク(デメダケ) ゴザダケザサ メダケ(ニガダケ) キスジメダケ ハガワリメダケ カムロザサ オウゴンカムロザサ	アズマザサ属	フイリシイヤザサ コチク マクラザキザサ・本県特産 ゲンケイチク(シノ)本県特産 アズマザサ フイリアズマザサ スエコザサ ヒメシノ
カンチク属	カンチク(ゴゼタケ) チゴカンチク	ヤダケ属	ヤダケ(シノ) アケボノヤダケ ラッキョウヤダケ ヤクシマヤダケ(ヤクザサ本県特産 オオバヤダケ・本県特産	ナリヒラダケ属	ナリヒラダケ リクチュウダケ アオナリヒラダケ ヤシャダケ(キセルダケ)
マチク属	マチク	クマザサ属	ミヤコザサ エゾスズ(シノダケ) スズタケ(シノ) キスジスズ ケスズ(クマザサ) タカクマザサ(クマザサ)本県特産 ハツロウザサ(クマザサ) ウンゼンザサ イシズチザサ チュウゴクザサ キリシマコスズ(クマザサ) シャコタンチク(カナヤマザサ) クマザサ キスジネマガリ	オカメザサ属	オカメザサ(メゴダケ) シマオカメザサ
インヨウチク属	インヨウチク			トウチク属	トウチク(ビゼンナリヒラ) スズコナリヒラ
ハシダケ属	インドカラムス・ラティフロレス			シホウチク属	シホウチク(シカクダケ) キンメイシホウチク
マダケ属	ホテイチク シマホテイチク ギンメイホテイ キンメイチク ウサンチク(ウサンチッ)本県特産 カシロダケ(ホシナシダケ) シボチク ビセッチーダケ・中国産 ニドラリヤタケ・中国産 キッコウチク モウソウチク オオゴンモウソウ キンメイモウソウ ヒメハチク タイワンマダケ クロチク(クロチッ) ウンモンチク ハチク(ハチッダケ) トサトラフダケ			トリソスター チス属	シャムタケ

- 竹の選定には ①日本代表種、
 ②本県固有種、
 ③高価値種、
 ④珍種を植栽し
 各々の特性調査及び
 病害虫調査を行う。

鹿藩名勝考

(卷三) 五八頁

(卷三)

七五七六頁

同郡同郷内山田村

○竹屋郷 薩摩風土記○和名鈔作簾屋、所謂笠狹宮の舊蹟也、距竹屋大明神社 午方二里許に在り、此處川邊郡山田郷下山田村の界とす、

地志略曰、竹屋郷古跡は絶頂に二畳許の地ありて、上古柱口の石三、小石多く有之、山田郷にて竹ヶ尾と唱ふ、是を王子大明神と申すと云々、今按に、尾トハ丘の事にて、猶竹屋の岡といへるにひとし、今見に、一の山岡にて、其崩調ニ畳許平地ありて、竹屋大明神の宮蹟といへり、この竹ヶ尾ハ蓋無戸室を營られし城なるへし、さて竹屋郷といへるは、此尾の麓の蓑敷野と称る地にて、是笠沙宮皇居の址ならん、この蓑敷野は竹ヶ尾より亥方十町許にて、平々たる廣所なり、里人上舞敷野・下舞敷野といふ、舞敷ハ蓑敷の訛なるべし、上古神社ありし時、神人等か宅地の跡といふ處もあり、此より丑寅に丁リ、鳥居口と云晶の字あり、竹屋神社ありし時の鳥居跡なり、又竹ヶ尾の山下五六十間許り竹林あり、是皇子の臍の帶を截し竹刀を棄し竹林の遺蹟也、節間尺餘、葦人植で煙屏に換へ、或は舟子・山伏の蠶架となし、又火縄に造る、其制頗る多し、根櫻行せず、其筭芽の如く叢生して、母子敢て散す、掉へ能活く、漢名の義竹・孝竹などいふ風なり、又船渡せし葦竹といふものは殊に太く、其質脆く索に作るのみなり、別種なり、凡此葦竹ハ本藩に多く、九州稀に有るのみなり、笈埃隨筆曰、薩隅に竹數種ある云々、一種キンメイチクといふ、他國にて見ず、太五六寸、節の間長く、中の中細く叢生す、尤柔也、國人此竹を四枚に裂て皮なる方をとれり、樹て網とし、船毎に貯み、能水に堪て強し、故に諸國の漆に日薩の船懸りぬれハ、他國船ハ其を除て舟點りす、彼竹網と此方の李網、海中に網切るゆゑなり、是か爲に亭、そも、此地は皇孫瓊々杵尊笠沙御前に戻止ましゝ時、宮柱太知立御坐ましける皇宮の壇

(卷五) 一二二頁

同郡同郷山路村青葉山

日吉山王、地主權現とも称す、その地主廟ハ、臺明寺の門より西廿間許に森山ありて、大槻の下に石室を立て、其故址を存ぶ。

奉祀大穴持命、例祭十一月未申日、

此一山を青葉山と称ふ、地名便覽に見えたり、大隅州名所の一なり、青葉竹ハ即此山の名産、俗に臺明竹といふ、○社壇は益救の杉材にて、昔時名匠一の鉈を以て造立たりといふ、社の西、淨見瀧といふあり、高二間許、其水清徹にし鑑へし、社前の流を御手洗の清水と唱へ、祀具を洗淨る所なり、鄉名の清水即淨見瀧布より出たりとぞ、○篠田は篠竹の竹田なり、相傳、むかし神武帝いた高千穂宮に御坐ましける時、御箒の簾に用ひさせられし處なりとて、今山王鳥居の川向に在り、天武紀、篠竹三千通送り、夫より後、天智天皇太子にて筑紫へ御下向の時、此地へ過臨あり、青葉竹を以笛材の貢御所に定められしより、笛竹之事につき、或は大使を遣され、或ハ綸旨を給り、在應人及臺明寺主僧へ下知し、竹林を愛護すへきの旨を論され、又同じく武家執權の奉書等若干通、臺明寺に笥藏す、俗に臺明寺臺明寺ハ竹林山衆集院と号す、自天智帝の勅額所と称ふ、然とも當時勅願の定額寺あるこ

同郡同郷山路村青葉山

とを聞く、是皇太子の時此地へ御過有り、其後登極ありてより、青葉竹を以て貢御に命せられしをいへるなるへ

122

し、笈埃隨筆に、むかし天智帝筑紫に六年まで止り給ふ、その間に九州の地を巡見遊へし、大隅國にいたり玉ひ、此時大隅國てふ名ハ、またなし日向國內也、此邊に笛につくるへき竹也有ると御尋ねあるに、當所の民、この山の竹候とて、一本を青葉つけながら伐て奉りし笛竹を貢まるらせよとて、大内にもてはやし、數々笛に造出されるほどに、世々に傳りしも多く、壽永に平家の敦盛なとも是を秘藏せしを、俗に敦盛の笛ハ節にひき作りたる後、岬より青葉を生したりなどいひなしけるハ、其本をしらぬみたり言なりと記したり、此事いかなる傳へ有て記したるかは知られとも、其実を得たりとハおもはる也、又青葉竹を今臺明竹といふ、他國にへなきものなれば、蒲葵など同しく朝廷の御用に召れしもの也、今臺明寺文獻の中、鐘銘一通を鈔錄す、

開州臺明寺、是青葉鳳笛之貢御所、白馬龍蹄之清蹟也、

竹島古紀○武備志・全衛兵制錄・日本風土記並曰、竹島花計甚好、益所謂五龍山と混する者あらん、海東諸國記作高島、○圖書偏作高島、亦高島の前有島、然二級石而非洲也、○竹島今隸屬貢島、

府坤位廿八里、周二里、○島中多產美竹、古紀曰、

彦火瓊々杵尊到于吾田笠狹之御崎、遂登長尾之竹島、乃

巡覽其地者、彼有人焉、名曰事勝國勝長狹、天孫因問之、此誰國歟、對曰、是長狹所住之國也、然今乃奉上天孫矣、

所説ハ加世田の老德紀曰、薩摩之曲竹島之門、是に山に竹島

或ハ竹島之門とは、坊津より加世田浦かけての泛称なり

しとハ見へたり、又竹島てふ島は出水郡にも、片浦・中木

さて此嶼ハ青葉竹などのうるハしく生る地なれハ、獨竹にしへハ黒嶋・硫黃島、或ハ益救島などを竹島之門と

称へしを、後々に黒く見ゆるを黒島、硫黃出を硫黃島、

島の名を擅に呼びしならん、蓋皇孫の西に幸し玉ふ、必

大山高岡に登臨之、西州の極界を經歷し玉ふの爲なれハ、獨竹

島の名を擅に呼びしならん、蓋皇孫の西に幸し玉ふ、必

■タケ(竹)

『日本方言語典』によれば

- (一) 「大言海」はタキ(滝)を「たかる意。濁るべきを清む」とし
 (1) 河瀬の水の疾く奔り流るもの。急流の響
 カカツムの。疾き瀬。
 (2) 蓋(い)、垂水、すなわち懸崖より流れ落つ
 る水。また水の高きより直に落つるもの。

- (二) タケ(岳)のつく山名は、
 (1) 全国的に分布するが、西九州と南北アルプ
 スに特に多い。中国・四国には少ない。

- (3) たけ(山・巖)・タカ(巖・岩)・タケ(山)・
 の意。中世、タケとも。

- 高くそびえ立つた山。また、その山頂。雨
 雲などを支配する神が住むと信ぜられた(『岩

『古語辞典』)。

- (三) たけ(竹)・タカ(の転)イネ科の多年生常緑木
 本。タケ(丈)・タカ(高)と同根とする説は、
 アクセントを考えると成立困難である(『岩波古

『日本方言語典』によれば

- (一) タケは堀のことをいう(島根、その他)。
 (2) タケは崖をいう(和歌山その他)。

- (三) タケは崖状の地形をいってたる地名をタケと
 いふ。たゞこの「タケ」は「崖」の意味で、日本
 の「タケ」とは土石流が起つたものである。

- (四) タケ・タケ・タキ・タケ地形は崖状のといひ、

- たゞこの「タケ」は「崖」の意味で、日本
 の「タケ」とは土石流が起つたものである。

- 山の、風化地形で、露柱(せきしゆう)といひ。露柱には
 ては土石流が起つたものである。

- 崖(くわ)・露柱(せきしゆう)の一つのの地名で、小
 さい。山(さん)の裏田(うらた)豪(ごう)が露柱(せきしゆう)
 だ。

危険な地形の裏田を露柱したる地名で、云々

竹貫(たかぬき)、乘竹、竹谷、竹ノ川、など。

まで及ぶだろうか。危険地帯を知ることがまず
 先決である。それには、危険地として示唆して
 いる地名の範囲(区域)を知ることが一番であ
 る。

危険区域がわかれれば

- (1) 危険区域から保全(民家・公共物)するも
 のを移転する。
 (2) 危険区域内の設置(家、公共物など)認め
 ないこと((危険行為(崩壊原因)の禁止))。
 (3) 危険時期の避難体制をたてること。
 (4) 家屋などの移転が不可能なときには、崩壊
 防止対策をする。

(八) 危険雨量に達すれば避難することを考えねば
 ならない。

(九) 地名例

竹佐、竹林、竹浦、細竹、竹ノ塙、竹谷、竹ノ川、など。
 ノ花、竹貫、竹迫、大竹、小竹、三竹、竹野、
 植竹、寺竹、竹原、竹内、竹所、竹合、竹瓦、

竹に関する地名

「竹」

下竹上竹山内中原追元添平尾野頭崎段谷川渡場場峯重山山山脇嶋添竹竹田烟竹竹
竹下竹上竹竹竹竹竹竹竹竹竹竹竹竹竹竹竹竹竹葉竹竹葉竹竹雜野嵩村竹竹田若
山木八葉折竹竹

「イケ
ヰ」

山原歸平段尾追峯尾脇烟連
芭籜都林木芭嵐方田
芭大芭芭芭長芭芭芭
千字文，有目錄

竹山南村姓名 (麻退萬市)

44 - 49

内下迫田原山元本井崎中上 林野島尾森宮部園壁川口永場町廻橋福平庄礼安重多歲波
竹竹竹竹竹竹竹竹竹竹竹竹竹竹竹竹竹竹竹竹竹竹竹竹竹竹竹竹竹竹竹竹竹竹竹竹竹
之竹
年計

卷之二 --- 24

平川山原尾安谷峰嶺領田部河井野元本殿測森内木令
世世世世世世世世世世世世世世世世世世世世世世世世

計 163

卷之三

東崎田宮塚山川下
條條條條條條條條
篠^篠_計
「嶽嶽嶽嶽嶽嶽嶽嶽嶽嶽
丘^丘_嶺_峯_下

武 --- 33

記 錄

鹿児島県内に残る竹にまつわる
神話・民話・伝統行事（I）

鹿児島県林業試験場 浜田甫

Myths, Folklores, Traditional Events about Bamboos
handed down in Kagoshima Prefecture (I)

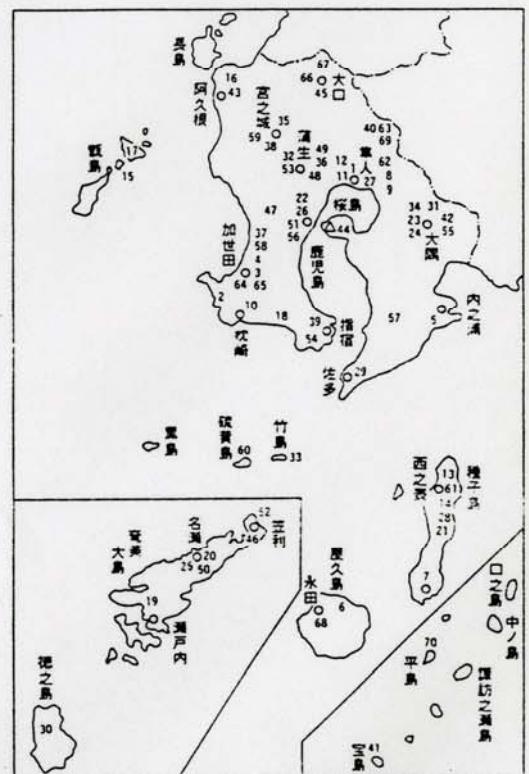
Hajime HAMADA Forest Experiment Station of Kagoshima Prefecture

はじめに

神話や民話は日本だけでなく世界各国いたるところにあって、今日もなお語り伝えられ親しまれている。また、地域に伝わる伝統行事にしても、その土地の風土とそこに住んだ先人の生活習慣に由来した、おもしろく珍しいものが見られる。これらは大切な文化であって、現在これを記録し後世に伝えていきたいものである。

竹類の豊富な鹿児島県には特色のある竹の伝統文化があり、竹に由んだ多くの物語りや伝統行事が伝承されている。

ここに、それらの一部を紹介することにしたが、いずれも筆者が直接土地の人々から聞き出す一方、郷土史や民族の研究家のご指導を得てまとめたものである。御指導、御協力いただいた多くの方々に謹んで厚くお礼を申し上げる。



竹にちなむ神話、伝説、伝統行事一覧

項目	場所	竹種	内容
神話			
1. 蛤兒神社の金筋竹	隼人町日当山	ギンメイチク	蛤兒尊が上陸時に使った水棹が活着した。また釣竿が活着した。
2. 鈴ヶ追のスイノンタケ	笠沙町黒瀬	スズダケ	ににぎの尊の使った杖が活着した。
3. 竹屋ヶ丘の逆竹	加世田市舞敷野	ホウライチク	ひこほほでみの尊の出生時に使った竹刀が活着した。
4. 阿多の雙子池の神竹林	金峰町阿多	ホウライチク	ひこほほでみの尊の出生時に使った竹刀が活着した。
5. 笹尾岳のいわれ	内之浦町国見岳	エゾスズ	うがやふきあえずの尊の出生時に使った竹刀が活着した。
6. 益教神社の火吹竹	上屋久町宮之浦	マダケ	山幸彦を祭神する益教神社に火吹竹を供え百日咳を治す。
7. 茎水の逆竹	南種子町茎水	ダイサンチク	玉依姫が馬をつないだ杭が活着し逆竹となつた。
8. 篠田の縁竹	国分市清水	ヤダケ	神武天皇が使用したといわれる矢の竹。
9. 台明寺の青葉竹	国分市清水	カンザンチク	天智天皇に笛竹として貢献された竹。
10. 鹿児島の名の起源	枕崎市鹿嶼	マダケ	ひこほほでみの尊が使用した目無籠に由来する。
11. 鹿児山の伝説	隼人町鹿児山	マダケ	ひこほほでみの尊が使用した目無籠に由来する。
12. 隼人族の竹細工	隼人町内山田	ホウライチク他	大化改新の庸役での隼人族の竹細工技術。
伝説・民話			
13. 種子島の“お千代笹”	西之表市池之久保	ゲンケイチク	恋人同志のあいびきの場所の目印に植えた笹。
14. 思い結びのササ結び	種子島	リュウキュウチク	心に秘めた男性の家の門近くに2枚の葉を結んで置く。
15. 親孝行竹	甑島・中甑	ダイサンチク	母親の病気を治そうとして寒中に荀を出させた。
16. 兵助どんとカッパ	高尾野町	モウソウチク	カッパと人間との歯の強さ比べ。
17. 竹姫物語	甑島・上甑	モウソウチク?	正直おじいさんが竹を切ったところ美しい姫が現れた。
18. 火吹竹のお化け	開聞町	マダケ	お化けと火吹竹の物語り。
19. イマジョの伝説	瀬戸内町小名瀬	ダイサンチク	掉したトウダケをゆすぶると不幸がある。
20. 松と竹の話	名瀬市	マダケ?	人をさらう悪鬼を竹刀でやっつけた。
21. 善吾おしゃんの悲恋	中種子町坂井	ホウライチク	恋人同志が逃走の際に使った杖が活着して逆竹になった。
22. ぬれぎぬに泣く“お梅”	鹿児島市伊敷町	ホテイチク	殿様の前で竹がしなって異様な音が出て誤解された。
23. モウソウチクを植えないわけ	福山町	モウソウチク	猿が“鬼火たき”の火をもって家々を走り大火となった。
24. モウソウチクを植えると厄となる	大隅町	モウソウチク	竹を植えた家々に不幸が続発した。

項目	場所	竹種	内容
25. たけのこで親の病気を治す	奄美大島	モウソウチク	親の病気を治すため2月の寒中に竹山に入り筍を得た。
26. 正直爺さんの婆さん	鹿児島市	モウソウチク	筍が伸びて天井を破ったら、大金が落ちて豊かになった。
27. キンチク竹の由来記	国分市府中	ホウライチク	かくれ叢になった竹ザル。
28. 秋筍と娘	種子島	リュウキュウチク	たけのこを娘には食べさせても娘には食べさせない悪い母親。
29. 上村の荒神さあ	佐多町上村	モウソウチク	神様の気に入らない出来事があると竹がバチバチと割れる。
30. ある兄弟の話	徳之島	ホウライチク？	瓶のかけらを庭に埋めたら竹が生えてきて大金持になった。
伝統行事			
31. 七夕	財部町	マダケ	7月7日に七夕用に1本、竿用には家族数より1本多く切る。
32. 五月の節句	入末町	モウソウチク	5月5日の男児を祝う節句には御供えに竹皮巻きのアカマキを作る。
33. 竹島での鬼火焚き	三島村竹島	リュウキュウチク	1月7日、紙ツバメを竹棒の先につけ鬼火焚きの炎に当て飛ばす。
34. 住吉神社の“油竹登り”	末吉町住吉	マダケ	11月19日方祭の油竹登りは先頂に油の入ったマダケに登り健康を祈る。
35. 現王神社の方祭	宮之城町泊野	メダケ、ヤダケ	11月23日の例祭で、メダケを焼く音で厄払いし、来年の豊作を祈る。
36. お盆の“はしたまつ”	姶良町北山	マダケ	8月14日祖先の靈を迎える行事で、マダケ先端の“うけ”にたいまつを投げる。
37. 熊野神社の“しへ竹”くらべ	伊集院町飯年礼	マダケ	5月17日、各部落のマダケの長さくらべを行い豊作を祈願する。
38. お盆の笹踊り	東郷町山田	ホティチク	7月13日、御精靈を迎える行事で、ホティチクの糞で腰みのを作って踊る。
39. 勇壮な竹打ち合い	指宿市東方	マダケ	5月5日、川面を竹でたたきあい、豊作を祈願する。
40. 火流っじょ	牧園町宿窪田	マダケ	8月14日、天降川に先祖の靈を大イカダで送る習わし。
41. 宝島での豊作の祈願	十島村宝島	リュウキュウチク	1月2日、枝葉の多い竹を火の神様に供えた後、田うちをする。
42. 筍の皮で眼病を治す	大隅町	モウソウチク	筍の皮に焼木で穴を開け、家中につりさげると眼病は治る。
43. 阿久根の七夕竿流し	阿久根市山下	マダケ	七夕祭に七夕竿を川に流し、「晴着ができるよう」と祈る。
44. お産のしへ竹	西桜島町	メダケ	産室や炊事場に2本の若いメダケを立て、しめなわを張って清める。
45. 塞の神様に祈願する	菱川町田中	マダケ・メダケ	火吹竹を塞の神様に供え百日咳を治す。
46. 米寿祝いのトカキ	笠利町	マダケ	8月8日に多く行われるが、トカキに白髪を1本そえて配る。

項目	場所	竹種	内容
47. 火振りの祭り	東市来町養母	モウソウチク	7月15日、精霊を送り供養し、部落の災害、悪疫を払うための行事。
48. 火吹竹に穴を開け感謝する	蒲生町北	マダケ	耳の悪い人や病気の人は塞の神様に火吹竹を供え治す。
49. 貧乏神は火吹竹につけ払う	姶良町木津志	ホティチク	大晦日の夜、貧乏神は火吹竹の中に入れて近くの川に流す。
50. 大島での葬儀風俗	奄美大島	ホティチク	死人があると門の内に入れないよう竹垣をつくる。
51. 火の神様に火吹竹を供える	鹿児島市宇宿町	マダケ	天之御中生神社に火吹竹を供え、火の安全、無病を祈る。
52. 筍皮の鬼面	笠利町	モウソウチク	9月、10月に初種子を薛くお祭りで豊作祈願に筍皮製の鬼面をかぶる。
53. 蒲生八幡神社の“福笹”	蒲生町	ホティチク	元旦に家内安全、五穀豊饒を頼いつつ福笹を求める。
54. 鬼火たきの余興“さんごめ踊”	山川町浜兎ヶ水	モウソウチク	1月7日、鬼火焚きの前に、お金の入った青竹をふり廻しながら踊る。
55. 熊野神社の奇習“鬼追い”	末吉町深川	マダケ	1月7日、鬼追い行事に青竹を使う。
56. 小正月のハラメウチ	鹿児島市谷山	メダケ	1月14日、15日笹竹で垣をつくる。
57. 節分の火祭り“せつがい”	田代町 鶴園	モウソウチク他	節分の行事で、竹のやぐらに火をつけて厄払いをする。
58. お田植え祭りの“笹踊り”	日吉町八幡	メダケ	6月6日青竹で地面をたたき神靈を招き大地に鎮ってもらう。
59. お盆の笹踊り	東郷町 南瀬	メダケ	お盆の8月15日に精霊送りの行事でメダケを身につけて踊る。
60. 砥黄島のハシタマツ	三島村砥黄島	リュウキュウチク	旧盆の15日に後窓の靈を迎える行事。
61. 七夕竿持ち帰る	西之表市	リュウキュウチク	悲運の2人である國陸と千代女の靈をなぐさめる行事。
62. 耳の神様に火竹を供える	隼人町坂城	カンザンチク他	耳の病氣を治すため、石像に火竹を供える。
63. 節句に笹ダンゴをつくる	森島町田口	キリシマコスズ	3月の姫節句に、ダンゴがくっつかないよう笹の葉を敷いた。
64. 竹矢來組をたたくと大雨	加世田市内山田	メダケ他	干天時に竹矢來をたたいて雨乞いをする。
65. ワラットヘ竹飾り	加世田市内山田	ホティチク	旧暦の10月亥の日に行う豊作祝いで、田んぼのワラットに竹を飾る。
66. クヨッ（供養焼き）	菱川町羽月	メダケ	家畜の安全祈願のため、メダケ365年を水神様に供える。
67. 豊作祈り“モグラ打ち”	大口市 青木	ホティチク	今年の豊作を祈って子供達がもぐら退治を行う。
68. 農漁を祈って笹竹を振る	上屋久町水田	リュウキュウチク	トビウオの豊漁を願うため青竹を海岸で振って魚を招く。
69. ウバッチョ踊り	栗野町	マダケ	笄を腹に立て、春には竹ヘギ18本を傘状につけて踊る豊作祈願行事。
70. イラカ祭り	十島村平島	リュウキュウチク	芽（竹笹製）屋根を葺き終ると、イラカ祭りと称して竹の弓を立てる。

(1987年9月9日受領)

大隅国歌枕巡検

鹿児島地名研究会

I. 日時 平成3年11月23日(土)

場所 守公神社・景色の森・古賀の森・歎きの森・隼人町歴史資料館・富隈城跡・大穴持神社

(参加者) 納栄蔵・梶原武・小原親英・鈴木順一・下野敏見・花園正志・肥後芳尚・平田信芳・
二見剛史・藤浪三千尋・鉢之原矢七・本田潔

II. 巡検地での説明・質疑

祓戸神社(守公神社)

平田 現在は祓戸(ぬいど)神社と云いますが、明治の初めまでは守公(しゅこう)神社と云いました。守公神社は川内市もありますが、それは薩摩国のものです。一般に守公神社は、平安末から鎌倉時代の頃に国府の守護神と云いますか、総社的なものとして設置されたようです。ここは大隅国府の守公神社になります。この神社付近が大隅国府の中心で、大隅国衙の所在地であったと考えてよいと思います。この鳥居から南に向かう道路は真南を指しており、云うなれば大隅国府の朱雀路にあたるとみられます。この守公神社の拝殿のつくりは、黄金比。いわゆる黄金分割の比率を用いています。 $a : b = b : a + b$ 。数値で云いますと、 $1 : 1.618$ の比率を用いたものです。近似値になりますが、間口が10尺、奥行が16尺の建築になります。奈良時代の建物、例えば奈良東大寺の最初の金堂、すなわち創建時の金堂は黄金比を用いていました。平面形がですね。一般に奈良時代の建物は、黄金比を用いたものが多くみられます。見たところ何の変哲もない普通の社殿ですが、奈良時代以来の寸法・規格というのが代々の宮大工によって伝えられて来たものと考えられます。大工さんたちはそんなことは意識しなかったと思いますが、古代の寸法は守られて來たとみてよいでしょう。

こちらの方(境内の西南隅)に、不動明王の石像があります。土地の人は蛇の神様とかマムシの神様

と呼んでいます。桃木野石で作られており、背中には元禄五年の年号と作者の名前が刻んであります。廃仏毀釈でやられなかったもんだと感心しています今まで見て來た限りでは、県内の石像の中では最も古いものです。その意味で、守公神社は由緒が古いと云うことです。

今日は梶原君のような若い人がいるので云いますが、将来、郷土史を調べる場合はこういう立看板に書いてあることを丹念にノートすることだね。それをずっとためていって年代順に整理したら、やがて郷土史の大家になるんじゃないかな。そういう作業が基本だと思うよ。何か質問はありませんか。

二見 菅原道真との関係は?

平田 菅原道真? 向こうの天神さんの説明でしょう。(江戸時代に景色の森にあった天神社を明治以降に合祀した)

藤浪 平田先生はさっきこれを不動明王と説明されたのですが、不動明王じゃなくて水神さんだと思います。

平田 蛇の神様が水神?

藤浪 蛇の神様は、人体、水の守り神ということです。

平田 あゝ、なるほどね。竜王信仰ということで

花園 蛇の神様というのは、水神さんですよね。

平田 形からは不動明王ですよね。

大隅國の歌枕

鉢之原 この剣は何ですか？

平田 蛇の神様。

鉢之原 蛇の神様ですか。

藤浪 水天縁の所にもこの形がありますし、竜波見(わゆみ)にもこんなのがありました。

平田 それじゃ、蛇の神様は水神様だ。

藤浪 日当山にもありますし、嘉例川の中福良にもあります。

鉢之原 手に持っているこれは何ですか？

平田 あゝ、蛇の身の部分ですね。判りました。これは水神様ということですね。

気色の杜(景色の森)

平田 もともとの景色の森は説明に書いてありますように、辰巳の方、東南の方ですね。一町ばかりですから、本来のものはちょうど日豊線のあたりにあったと思われるわけです。それが洪水で流されて江戸時代の初期にここに移されて天神様が建てられた。大した移動じゃありませんから、この一帯が景色の森という歌枕であったと理解していいと思います。これほどの古い歌枕がありながら、鹿児島県ではあまり宣伝されていません。こんな史跡はもっと大々的に宣伝すべきだと思います。その意味で巡検資料には『鹿児島名勝考』と『三国名勝図会』と拡大コピーして大体B5に入るよう収めてみました。今後資料として利用してください。とくに二見先生などは女子大生を引率して回る時の資料にされたら良いと思います。そういうことをすることによって歌枕を一般の人々が知るようになると思います。

やっぽり本物の史跡は宣伝する必要がありますからね。古今集なんかに書かれたものであるということをね。

納 『三国名勝図会』の絵は、どこから見たものですかね。

平田 これは、南の方から見たものでしょうね。これが姫城の山ですよね。ここに順徳院の歌があり

ますね。

明渡るけしきの杜に立鷲の

上毛も深く雪は降りつつ

本田 余計なことかも知れませんが、私は加治木中学校に通学したのですが、日豊線で通る時、此処に大きな松がありました。そして天神さんがありました。ここにお宮があったわけです。そしてお宮はあとでさっさと行きました。祓戸神社と一緒にありました。それから、こういうふうにならん以前に聞いたことがあります、日豊線を作る時に此処は土を取った所だ、と。それでこんなふうになった。もとはずーっと陸続きになっていた。ここを流れているのは天降川の、天降川じゃなくて、手籠川——

小原 松永溝？

本田 松永溝がここを流れているわけです。これはずーっと小村新田の方まで流れていますから。松永溝を作った時に向うとこっちとが分かれてしまった。その時、道路工事の人たちが土を寄せた。

平田 此処から百メートルばかり向うに行けば、布目瓦が出て来ますからね。ここは大隅国府域の西端になります。大隅国の国司たちがこの辺で和歌を作った。そして京都(平安京)で宣伝したのが歌枕として定着したことですよ。

二見 何年ぐらい国府の期間があったのですか？

平田 うーん。大隅国府としては。

二見 大体、いつ頃までと考えれば。

平田 大隅国は設置は713年ですね。そして大隅国の場合、贈於国府と桑原国府と二つあります。ここは桑原国府になるのか贈於国府になるのか議論が分かれますが、私はまあ贈於国府だろうと思います。桑原郡に国府があった時期があることは和名抄に書いてあります。しかしまだ贈於郡に帰っているのだろうと思うのです。府中という名前は鎌倉時代に出来る国府のよび名です。だから鎌倉時代の大隅国府は此処にあったと考えてよいわけです。そして

大隅国府の最後は大永七年(1527)。武家方と公家方の争いに巻き込まれてしまいます。現在の大河ドラマ「足利尊氏」では、南朝と北朝とが争っていますが、武家方というのは新しい勢力、公家方というのは古い勢力で南朝ですね。ここでは川を挟んで向うが大隅守護代の本田氏、清水城主が武家方でした。これが大隅国の在庁官人と鹿児島神宮の勢力を叩きつぶすわけですね。それが大永七年のことです。その時、大隅国衙・守公神社一帯で力をもっていたのは調所氏ですね。おそらく調所広郷の先祖だと思うのです。本田董親が守公神社を焼き払う。調所氏とか留守氏は鹿児島に逃げて行く。そういう歴史がありますから、16世紀の初めが大隅国府の最後になります。

二見 そうすると、千年ぐらいの長さですかね。この辺に留守氏という姓はありますね。

藤浪 留守氏はありますよ。

鉢之原 昔の豪族というのは判っていないのですか？

藤浪 税所がありますよ。

平田 税所氏がありますね。図師もある。次へ急ぎましょう。

花園 舟形の手洗があるんですが。

平田 大きいのがありますよ。

花園 天神信仰と関係があるのでしょうか。大きいなと思います。珍しいんじゃないかな。

鉢之原 何ですか？

平田 舟形の手洗鉢。

こがの森

平田 「こが」というのはいろんな字を書きますが、巡査資料で確かめて下さい。風の森とも言われます。資料に茂杜(けりのもり)というのを入れておきましたが、これは読んでみてもただ入れてあるというだけで、確認は出来ません。それから夕暮の闇というのもあるようです。松永にですね。これもただ

そういうのが入っているだけです。大隅国で歌枕として大っぴらに宣伝出来るのは四つだろうと思います。景色の森、歎きの森、こがの森、景色の浜ですね。それから薩摩渴(さつまく)なわち錦江湾がありますけどね。説明はいたしません。説明文を読んで下さい。肥後先生。この石碑にある村長さんの肥後喜次郎という人はご先祖じゃないですか？

肥後 親戚です。

鈴木 これ(説明板)が台風で倒れたのですが、今度作り直しますけど、夫木集と夫木抄とがありますが、どっちがよろしいでしょうか？

平田 夫木集でしょうね。

鈴木 夫木抄と書いてあるのもありますが。

平田 それはあるでしょう。どっちにも入っているということでしょうから。歴史辞典などは夫木集ですよ。~抄はピックアップしたものですから。この看板の説明は?「恨みしな」じゃないの?

藤浪 「しな」でしょうね。

本田 原文のまゝ、これに載っているように書いた方がいいでしょうね。

平田 それはそうですね。

小原 国分郷土誌には「恨みしし」とある。

平田 それは郷土誌の間違いでしょう。

小原 郷土誌から採ったのが間違い。

平田 よく憶えておきなさいよ。担当者(笑い)

鈴木 こっち(鹿児島名勝考)で訂正しますから。

花園 杜と森は何か違いがあるのですか？

平田 杜の場合には何か信仰的な意味があるのでしょ。古くは杜を多く使っている。しかし現在の人はこれを読めませんから、「森」を使った方が良いでしょうね。

鈴木 「森」という字を「モリ」と読む場合も。

花園 「杜」というのはこの近辺に多いのですが

平田 下野先生、どうですか。モリが多いことにについては、先程、列車の中で話題になりましたが。

鈴木 義を「モリ」とも云いますよね。

下野 モイどんですか。ムラとも云いますね。

鈴木 ムラとも云いますし。

下野 何と云ますか？

鈴木 風の森。風が強い。

花園 こっちでは、この字を書きますよ。

本田 判らん字は説明板にみんな平仮名を付けたらどんなですか。

平田 それは当然です。難しい字を書く場合にはルビを振ることでしょうね。

二見 親切でしょうね。それが。

平田 読めなきゃ、人が遠ざかって行きますからね。

本田 いつか、そんな話を聞いたことがある。

二見 大体こんなもの（観光案内板）はどこかで検証してもらってから出すべきだな。

鈴木 これからは市の四役とも話して、それから市議会の方へも説明しておきます。

本田 私なんか昔の高等女学校しか出ておらん。こんな難しい字を書かれても何のことやら判りませんと云われますよ。わざわざ看板を立てておって、何じゃいわけが判らん、と。

平田 このまゝでは、もう読めない人がいますからね。だから、小学校6年生か中学1年生に読まして判るという文章が一番よいのでしょうね。

本田 そうでしょうね。

平田 そこまでレベルを下げる。内容はレベルを下げるわけではないですからね。表現はそこまで考えた方が良いと思う。

本田 南日本新聞の支局長さんと話をした時の話ですが、新聞記者は中学2年生が読める文章というレベルで書くのだそうです。

平田 そうでしょう。それでも難しいからな。

本田 中学2年生程度の文章。記者ハンドブックで調べなさいと云われた。

（豪公式対談）（11月）平田水大寺跡の歴史調査
平田 丹波成経・平康頼・僧俊寛というのを知らない人が多いでしょう。

二見 書き直さにやいかんな。標準漢字にないものが多い。判らないでしょう。

平田 これは写せますけどね。

二見 石碑の説明はせにゃいかんでしょう。

平田 梶原君よ。暇な時に石碑を全部写しておきなさい。郷土史の勉強の基本だよ。

小原 拓本をとるのですか。

平田 拓本というのは残っているから、碑文を写すだけいい。

歎きの森

平田 これは知らなかったな。西郷さんが泊った家が此処に移されているとは。ますます名所が増えたね。この石碑はどこからもって来たの？

藤浪 これは以前からありました。

平田 此処にね。

藤浪 はい。

平田 此処にあった？

藤浪 あつたですよ。

平田 これは気が付かなかつたな。

藤浪 これなんかも。

平田 大正十年のものだね。あれは『三国名勝図会』に出ている古い御神木というもの。

花園 この絵ですね。

平田 いわゆる蛭児を流した舟があそこで根着いて大樹となった。蛭児が親に捨てられたことを歎いたので歎きの森になったということになるのだけれども、それよりも木を投げて占う投木（なぎ）神事の方が近いのじゃないですか。まぁ、大隅国二之宮ですから、由緒は古い。

本田 二之宮さあというのはここですが、ほとんどの人が知っておらん。

平田 一之宮は正八幡で知っていますけどね、二之宮ということは知らないのですよね。ここの御神

体であった鏡が葡萄鏡で、隼人町の歴史資料館に展示してあります。

藤浪 唐式の銅鏡です。

平田 だからね、国分市と隼人町は喧嘩をせずに一緒にになって古い歴史をもっと宣伝すべきだと思うけどね。

藤浪 喧嘩をしてるわけではないのですけどね。

平田 分かれているというのがおかしいんだよ。

藤浪 繩張り意識があつてやな、やっぱり。

平田 いろんなものが結構古いからね。ここは有名な歌枕です。

花園 そういうことで考えればいいですね。

藤浪 地元の人は別として、遊行上人などは来ている。都からはあまり来ていない。

平田 島津の殿様は来ているよ。

藤浪 正八幡に参拝して、此処に殿様は来ています。数えあげたら、きりがないですね。

隼人町歴史資料館

平田 これと隼人塚の四天王像、それから大隅国分寺の石造層塔は、みな同じ石材です。この辺で石垣によく使うのは国分の遠寿寺石ですが、これらの石材は加治木の二瀬戸石と遠寿寺石のちょうど中間位の石です。

納 加治木石よりちょっと固い石ですね。

平田 加治木石よりは、ちょっと軟らかい。

納 軟らかいですか。

平田 遠寿寺石はもっと軟らかいですからね。その中間位の石。場所から云つて松永あたりが真ん中ですね。松永近辺で採った石でしょうね。

肥後 これは、先日、新聞に出ていたもの？

平田 そうです。これが出て来たものです。藤浪さん、まだ、あと一つか二つ、出て来るかもね。

藤浪 どうですかね、この下に埋めてあるかも。

（笑い）

藤浪 これは国指定の大隅国分寺の塔と同じ年号

をもっているのです。あそこは十一月ですね。こっちは九月なんです。発見された場所は正国寺という寺の跡なんです。正国寺の創立は南北朝か鎌倉時代の後半ぐらいなんです。康治元年という銘は平安末期ですから、正国寺よりは古いわけですね。それで何故だろうかということを考えておったんですけども、三国名勝団会の記事によりますと、正国寺の原形が隼人塚の所にあったらしいのですね。それで、正国寺を建てた際にこれも本尊の一つとして持ち込んだのじゃないか、と推定しているわけです。新しい寺に古い年号が入っている仏像が入っているんだから、後の推測じゃないかと云っている人もいらっしゃいますが、ここに彫ってある康治元年という字が大隅国分寺石造層塔の書体とそっくりなんですね。供養——致す、という碑文もですね。康治元年に、妙顯という人が父親のために彼岸の供養をやっているのです。当時の人たちは供養をするために宗教活動をやっているわけです。塚を建てたり、そのために水田を寄進したりすることなどと関係があるんじゃないかなうかという気がしているんですけども、まだ解明出来ません。

それから、石質自体もその頃は全国どこでも凝灰岩の軟らかい石に彫ってあるんだそうです。これは軟らかそうで強いんですね。火碎流が溶えて出来たものだそうです。こっちは平田先生がおっしゃった隼人塚の石質と同じじゃないかと思うのです。

これも、このすぐ下で私が発見したのですが、後頭部のようのが出ていましたので、同じものじゃないかと思ってはいるんですが、ちょっと頭でっかちのような気がするんです。まだ頭をつなぐ勇気がないのです。しかし興福寺の仏頭みたいにふくらとした良いお顔ですよね。隼人塚に仏像が彫ってありますが、あれなんかと共通した円満な顔ですね。

二見 鼻の部分がほげているけど。

藤浪 ここがですね、べっちゃんこなのか、欠け

て埋めたのか、ちょっと判りません。どうしたらいいのでしょうか。

平田　これは古いな。

二見　この文字が残っていたというのがねえ。

藤浪　これらはちょうど三体並んでいたのです。

館長　上に見えとったんですよ。

二見　埋まっていたのを、何だろうかと探って、掘り出したんでしょうが。

藤浪　掘り出したのじゃなくて。

館長　山の奥に。

藤浪　このまゝ出ていた。

二見　ああ、出ていたの。

館長　55～56才代の人たちは、山に行ってこれに乗って遊びよったと云うんです。古老の方が、山に行くと怪我をすっと云って、いましめていたそうです。

鉢之原　排仏毀釈の時に山に捨てた？

藤浪　排仏毀釈の時に山に捨てたんだと思いますね。そうだろうと思います。それから楯とか矢とかあるかも知れないのでよ。それとつながればよいのですが。まあ、ゆったりとしたポーズをとっておられます。

平田　国分市とか隼人町は、じっくり調べて下さい。すごいのがありますよ。

富隈城（とみのくまじょう）

平田　現在立っている所が島津義久が築いた富隈城の本丸になります。平城ですね。ここは沖小島や辺田小島などと同じ類の火口丘の痕です。それから此処の石を探って富隈城の石垣を築いています。石垣というものは大体地元調達と考えていいようです。すぐそばに石を探る所があるということです。此処で石を切るとすると、この山の石しかないわけです。富隈城の石垣は、全部、此処の石を使っていました。国分の舞鶴城は背後の宇都越の石を使っています。近世の城の乱積みの石垣は、大体すぐそばに

石の採取場があると思っていいですね。

そこが浜之市港ですが、景色の浜というのは読んでみると、浜之市のことですね。ところが地名は現在2kmばかり先のバス停に移動しています。早くバス停に名前を付けた方が勝ちですよ。（笑い）この辺が景色の浜だということですね。原典を見る限り、浜之市のことです。この辺の眺めはやはりいいですね。

二見　昔の海岸線はどの辺まであったのですか？

平田　国道の線までです。

二見　国道まで？

平田　真下の国道までが海岸で、あとは埋立地。

二見　道は海岸線を通ってたわけですか？

藤浪　海岸線ですよ。海岸線に最初に町が栄えたわけです。

二見　この干拓は、いつ頃のものですか？

藤浪　浜之市の港からこっちが寛永年間です。

平田　寛永と云ったら古いよ。

藤浪　寛永八年だったかな。あそこに石の祠があって、水神さんやら田之神が祀ってあるんですけど

鈴木　そうすると、結構早いですね。1630年代になりますから。

平田　17世紀というと、早いね。まあ、国分平野はそうやって開けて来たのですから。

鈴木　そうですね。

藤浪　小島はどう思われますか。天平宝字の爆発とは年代的に違うということですが。

平田　もっと古いのじゃないの。

藤浪　古いという説がありますが。

平田　続日本紀に出て来る三島が形成されたという有名な記事について、成尾氏などは地質学をやる立場からみると、岩石の年代分析でははるかに古いたと云っているよ。

藤浪　あがつたり沈んだりせんじゃったですかね大穴持神社のことを考えると疑問を感じます。

平田　この下の稻荷神社は、この城の守護神として城を築く時に祀ったものです。

藤浪　もともとは住吉神社です。此処が、まあ、住吉崎ですね。住吉崎という地名です。

下野　住吉神社というのはどこにあるんですか？

藤浪　下の稻荷神社のことです。合祀されたのです。

平田　住吉崎、景色浜は同じ所。別名ですね。

鈴木　五大石橋の岩永三五郎は関係ないのですか

平田　岩永三五郎はこの工事に関係しているよ
大穴持神社（おおなもちじんしゃ）

平田　桜島と瀬戸との間に開聞岳が見えるので、この神社はもともと開聞岳の爆発を意識して建てられた神社だということが考えられるわけです。大穴持という名前を考えてみると、噴火口の大きな穴をそのように名付けた、と。

本田　大きな穴な。

平田　現在、あちらこちらで噴火していますが、火山の爆発を大穴持神の怒りだというふうに考えたら、此処に祀ったということは開聞岳の噴火がきっかけだということが考えられる。先程は説明しませんでしたが、大隅国府と此処とは守公神社から見ると、開聞岳と此処とが一直線上にのっかって来るので。最初の位置はもっと沖の方にあったと云われますが、それもやっぱり一直線上の位置にあったと考えられます。それをこっちに引いたわけですから。開聞岳の噴火に際して、海辺に出て枚聞神の怒りを鎮める、そういう意味の神社だったのだろうと思うのです。現在は市場の建物が正面に建って開聞岳が見えなくなりましたけど、真南に開聞岳がのっかっていました。他に、国分市の神社では隈崎神社から見ると正面に沖小島・辺田小島・弁天島が来ます。鹿児島市の神社では、建部神社から見ると正面に桜島が来ます。神社と山とは何か関係があるようですね。普通は山に向かって拝むものなので

しょうけど。典型的なのは開聞岳ですよね。鳥居から社殿をみると、その上に開聞岳が見える。神社の向きは北向き。

納　開聞岳は神社の裏側に見える。他の神社を見ると、方角は南か東が多いのに、ないごとあそこは北向きやろかいいな、と思つたんですよ。

平田　開聞岳が神様そのものです。

納　いろいろ神様の名があそこに書いてあるけど実際は山だと云われる。

平田　まあ、そういうことです。今日は歌枕巡りをしましたが、この辺にはもう一つ式内社がいくつかあります。鹿児島神宮と大穴持神社。それから韓國宇豆峯神社。福山まで行きますと、宮浦神社があります。四つの神社を巡る歴史めぐりというのも一つのコースとして考えられます。国分地方では、この二つを柱として組み立てることが出来ます。その他細かいものを入れると、まだいくらでも組み立てられると思います。歌枕めぐりと式内社めぐりは、大いに宣伝していいメニューだと思います。国分市の人たち、隼人町の人たちが、そういうことで判りやすい説明とかパンフレットを作ってくださるきっかけになれば、今日の会は有意義だったと思います。どうも有難うございました。

① 日時 11月23日(土) 10時～12時

② 集合場所 国分駅 (9時50分集合)

③ 巡検経路

国分駅 — 守宮神社 — 気色の森 —
10:00発 10:05着 10:20着

ニガの森 — なげきの森 — 隼人町歴史資料館
10:35着 10:55着 (トイレ休憩) 11:15着
富隈城跡、 11:40着 景色の森 — 大穴持神社
11:55着

④ 大穴持神社で現地解散。

その後、希望者による昼食会。

(一天張で、各自好みの定食をとつての昼食会の予定)

平成三年度
鹿児島地名研究会
現地巡検資料

大隅国歌枕めぐり

蛭兒神なりしを、誤りて天満宮を祭れりとそ。
河野通古か贈於紀行に、寛文の比、なけきの杜見んとて
ゆきたりし時、齡八旬計なる翁のいひしハ、氣色の杜ハ
なけきの杜の枝杜と傳へたり、をちか童なりし比洪水に
流されしを、名木の跡絶さしとて、里人とも栽おきしは
つかなる杜、此川のむかヘ杉村の中に見えたりと語りし
と云ミ、是ハこの氣色杜ハ、初鼻面川の隈に在りしを、
寛永二年の四月比、大水漲出て岸崩れ、叢社共に漂蕩し
ける、この時の地頭喜入大炊久加、社壇を今之地に新建
して、天満天神の木像を安置すといへり、杜の原處ハ今
の社頭より辰巳の方毫町許上川原の地、木堀と字せる田
中に残れり、さて鼻面川ハ享保年中に川直して田地とな
りしとて、今も田の底よりむかしの杜樹の折たるか出る
をもて、字を木堀と呼へり、或曰、氣色杜ハ原天子とて
史記に、畢在齋東南杜中、注、杜一作社、戰國策云、神叢注、灌木中有
神靈托之、墨子、建國必擇木之脩茂者、以爲叢社云
々、凡某杜と云もの此に微見るへし、俗作森字非也、

(鹿藩名勝考より)

「かざし野」（『能因歌枕』）、「さつま湯」（『八雲御抄』）、「さつまの瀬戸」（『八雲御抄』）、「つかさ野」（『能因歌枕』）、「ははこしま」（『能因歌枕』）、「みなれ川」（『能因歌枕』）の七例である。以上のうち、『万葉集』所出のものは「さつまの瀬戸」である。卷第三、長田王、二四人隼人の薩摩の瀬戸を雲居なす遠くも吾はけふ見つかるかも」で、出水郡長島と本土側阿久根市訓り、又孝徳紀、生國魂社、又難波社とも、其字互に用ゆ。蓋古ハ神社林巖を杜と云、神籬なども日室木てふ義とあるにて知るへし、星王書東有土口、主、土上、波、國葉云、坤巖生、增木中有

との間の海峡。通称「黒の瀬戸」である。その潮流は奈良時代から著名であったと察せられる。「けしきの森」（国分市大字府中）は『千載集』卷第四、秋歌上、待賢門院堀河、二二七「秋の来るけしきの杜の下風にたちそふものはあはれなりけり」。「なげきの森」（隼人町、蛭子神社の森と同じ）は『古今集』卷第一九、俳諧、さぬき、一〇五五「疊^{かね}ぎ言をさのみききける社こそ果ては歎きの森となるらめ」。一さつま潟（錦江湾に同じ）は『千載集』卷第八、羈旅、平康頼、五四一「薩摩潟沖の小島に我はありと親にはつげよ八重の潮風」。その他は出典不明。「ははこしま」は阿久根市西方海上の小島「みなれ川」は出水郡高尾野町にある。他は所在不明。歌枕はいずれも平安時代の登場で、含蓄多く、今後の考究がまたれる。——黒之瀬戸——「国分市」、「蛭兒神社」
△奥村恒哉△

秋のくる氣色の杜の下風に立そふものハあハ
所古今

(鹿藩名勝考より)
千載集
待賢門院堀川
秋のくる氣色の杜の下風に立そふものハあへれなりけ
新古今
攝政太政大臣

夕涼ミ身にしむハかり成にけり秋の氣色の

見るまゝに移ひにけり時雨ゆく氣色の杜の秋の紅葉は

艸
玉葉
兵部卿有

三葉
うつり行氣色の杜の下紅葉秋きにけりと見ゆる色哉

中／＼に木葉かくれハ哀なり秋のけしきの杜の月影
我ためハつらきこゝろも大隅の氣しきの杜のさもしる

月清

後京極

公繼

下艸に露おきそめて秋のくるけしきの杜「ヒイ」
〔鳴_イ〕
声

拾玉

慈鎮

つくしなる氣色の杜を來て見れハ都のとものこよち
そそれ

夫木

順徳天皇大御歌

明渡るけしきの杜に立鷺の上毛も深く雪ハ降りつゝ
春のくるけしきの杜の下蕨をりしれるとや崩渡るらん

新葉

妙法院内大臣

鳴ぬへきけしきの杜の村雨に忍ひもあへぬ子規かな

山家

西行法師

音にきくけしきの杜に來てミレハ立そふものハ哀也け
り

千首

爲尹

月にはふ氣色のもりの子規いかにつれなき音をもをし
まし

千五百番歌合

良平

けふよりハ秋の氣色の杜なれややかて身にしむ山風の
風

冬きぬる氣色の杜の村時鳥染し木葉を又さそひけり

三宮

唐錦 太上天皇大御歌
瀧波を梢にかけて山深きけしきの杜の蟬のもう聲

冬の色をけしきの杜にあらはして埋れハつる雪の下艸
〔鳴_イ〕
声

中納言家久卿

春深き氣色の杜にたち馴て秋まで蟬の聲やきかまし
百首

清水中納言実業

露もさそ置まさるらし日にそひて染るけしきの杜の木
末ハ

四十四世遊行尊通

なかめハや花も紅葉も春秋の氣色の杜の名にしおぶら
ん

又、めくめ廣く隔てぬ春に大隅の國もゆたかに明わた
る空、是ハ立春の氣色や森の、朝霞けさそのこほりと
け初てくむにさはりのあらぬ若松、といふに附たり、
されと逢に大隅ハ附ぬなり、

（三国名勝圖会より）

氣色神叢 曾小川村、府中にあり、千載集歌枕等

氣色杜に作る、神叢の字、余毛本に注解す。松、杉、柏、櫟、森森たる中に叢祠あり、

祭神天滿自在天神なりと云、例祭六月廿五日、囃噭紀行に、

寛文の比、奈毛木の杜見んとて、ゆきたりし時、齡八旬ばかり

なる翁のいひしは、氣色の杜は、なげきの杜の枝と傳へたり、

おぼちが童なりし比、洪水に流されしを、名木の跡絶さじと、

里人栽置し、わづかなる森、此川のむかへ、杉村の中に見得た

りと語りしと云々、是はこの氣色神叢は、初め鼻面川の隈に

在りしを、寛永二年の四月比、大水漲きり出て、岸崩れ、叢社共

に漂蕩しけるが、當時の地頭喜入大炊久加、社壇を今地に

新建して、天滿天神の木像を安置せるとかや、神叢の源處は、

今之の社頭より辰巳の方、一町許に直り、上川原の木堀と字せ

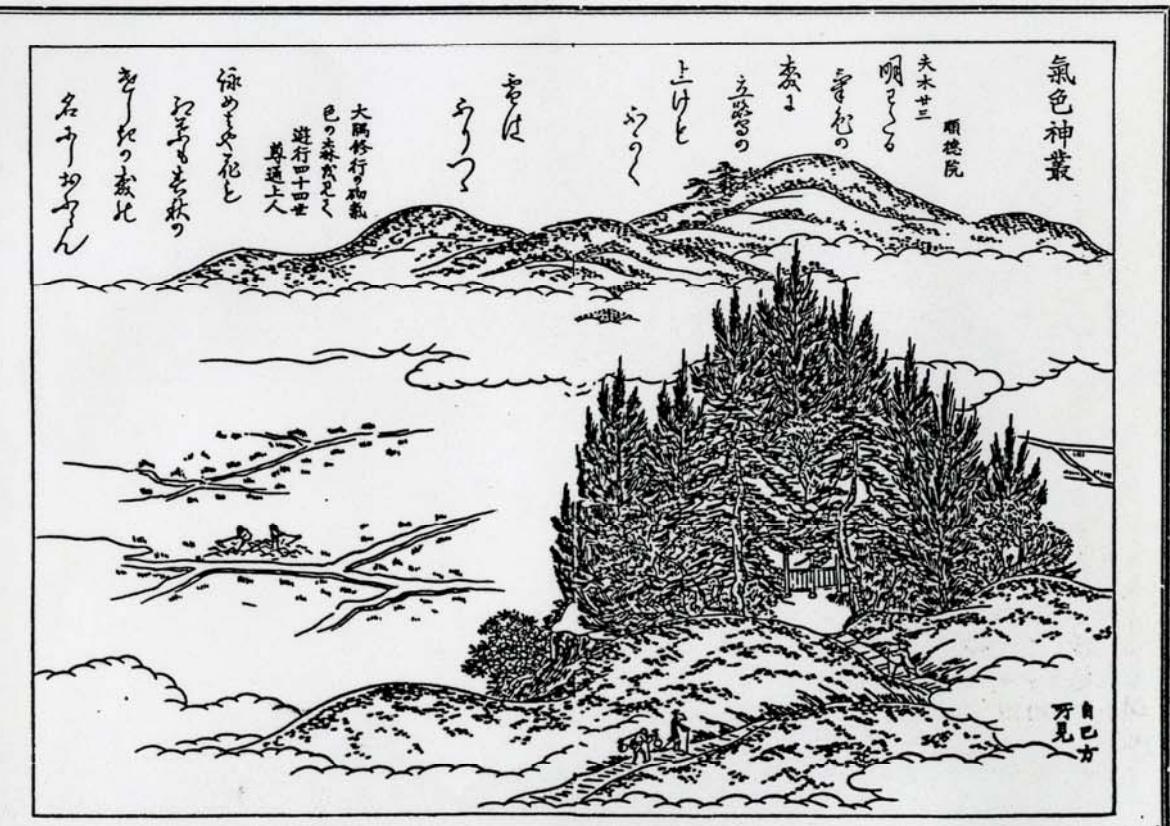
る、田間に残れり、鼻面川は、享保年中に河道を移して、田地と

なりしとて、今も田の底より、むかし神叢の樹木の折たるが

出るを以て、字を木堀と呼べり、或曰、氣色杜は、原天子とて、蛭

児神なりしを、誤りて天滿宮を祭れりとす、

○叢祠、前文より見ゆ、



待賢門院堀川

秋の来る氣色の杜の下風に
立そふものはあはれ成けり

新古今夏

後京極攝政太政大臣

秋ちかき氣色の杜になく蟬の
涙の露や下葉染らむ

續古今夏

從二位成實

夕涼み身にしむばかりなりにけり
秋のけしきのもりの下風

同前秋下

左近衛中將教長

みるまゝに移ろひにけり時雨行
氣色の杜の秋の紅葉ば

玉葉集

兵部卿有教

うつり行氣色の森の下紅葉
秋きにけりとみゆる色哉

新續古今春上

前大納言重資

柏にはおそきみどりを先みせて
春のけしきの杜の下草

續古今春上

前大納言重資

柏にはおそきみどりを先みせて
春のけしきの杜の下草

同前

公纖

冬の色をけしきの杜に顯して
埋れはつる雪の下草

方與集

中務

中／＼に木葉がくれば哀なり
秋のけしきの杜の月影

千首

爲尹

月はほふ氣色の杜の時鳥
いかにつれなき音をもをしまし

百首讀歌

清水谷前中納言實業

露もさす置まさるらし日にそひて
染るけしきの杜の木末は

新題林雜上

おり／＼のこゝろうつしてながむるや
かはるけしきの杜の春秋

素然

同前

タづく日なをてりそふや秋ふかき
氣色の杜の木の紅葉ば

隆長

春のくる氣色の森の下蕨
をりしれるとやもに渡るらん

同前十

後京極

下草につゆおき初て秋のくる
けしきの森に蟬の啼こゑ

新葉

妙法院内大臣

鳴ぬべきけしきの杜の村雨に
忍びもあへぬほとゝぎす哉

名所方角抄

我爲はうらきこゝろも大隅の
けしきの杜のさもしるき哉
此歌名所松葉集に誰爲につらき心は大隅のとあり下に人
丸とするす

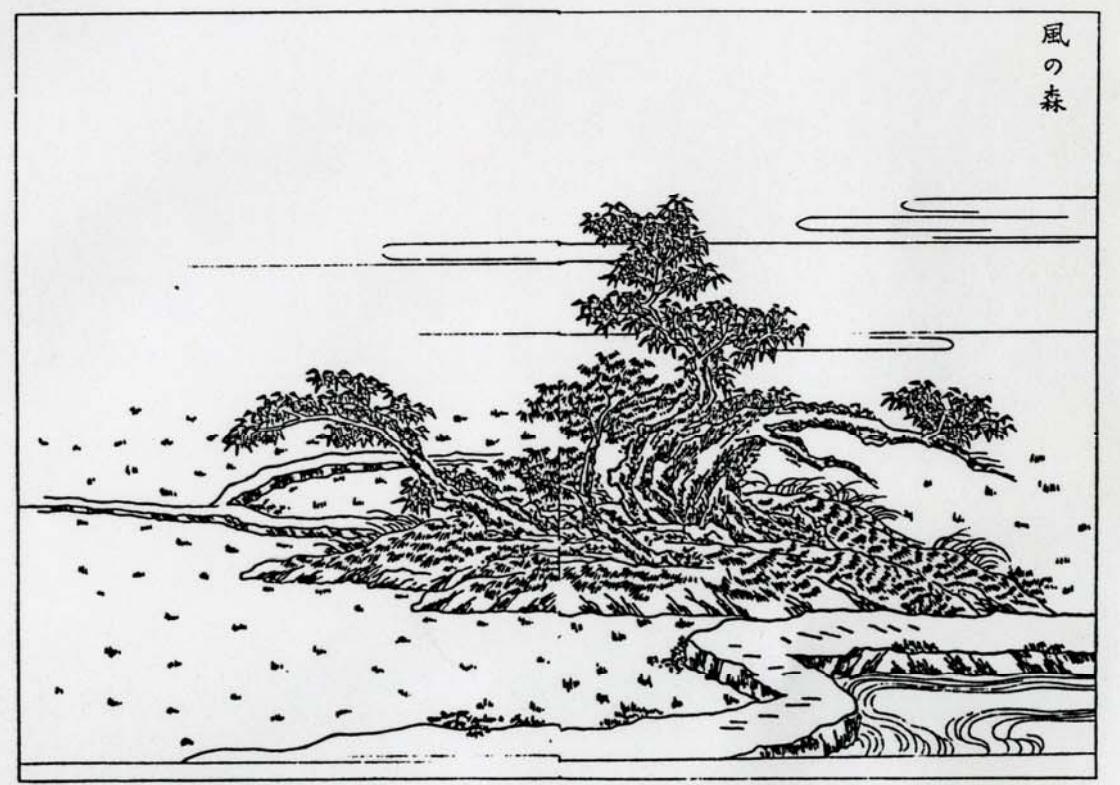
千五百番歌合

良平

けふよりは秋の氣色の杜なれば
やがて身にしむ山おろしの風
冬きぬる氣色の杜の村しぐれ
染し木葉を又させひけり

同前

三品



風の森地図館より西 姫木村にあり、名所方角抄等に載て、古

來大隅國の名所といふ、水田の内に一叢地あり、廣さ二畝許

よして古樟樹あり、是を風の森と稱ぜり、此樟今根幹三つに

分れ、其幹本周圍八丈二尺あり、邑人古賀の森といふ、久我大

臣といへる人の塚木なりといひ傳ふ又は木嵐の森とも、或

は古歌ある故に古歌の森とも呼といへり、其是非定めがた

し、隣邑國分の人は、是を風の森と呼べり、今衆人風の森と呼

べる故に、暫らく是に從ひて標名を置けり、和歌三才圖會に、

風の森は、大隅郡と記すは、曾於郡の誤りなり、一說國分松木

村小鳥の森小鳥、祭神詳ならずのことなりといふ、亦誤りな

り、大原貞以、名所舊跡を記したる書に、風の森は、氣色の森近

邊にありと見にたり今此風の森を見に、姫木村は清水の別

地にて國分に隣れり、風の森は、國分氣色の森より、東北拾町

許相隔れり、貞以が氣色の森の近邊と書しに符合せり、

○和歌

夫木集

按察

恨みしな風の森なる櫻花
そこそあだなる色に咲らる

松葉名所集

春渚

風の森とてただおらぬけしきかな

風杜方角集○土人古我杜とも称ふ、むかし古我大治てふ人の住址せし方十町許にあり、北

府北八里餘

夫木集

檢察

恨みしな風の杜なるさくら花こそあたなる色に咲らめ

松葉名所集 春渚

風の杜とてたゞをらぬけしきかな

同郡同郷重久村

茂杜名寄集○顯昭注する所によれば、深山茂林をいへるか如くなり、蓋此地重久のときも茂繁の言に庶し今地志略の傳説に據る

府北九里

名寄

み山なるしけりの杜の下紅葉いつくをもりてそむる年を

六帖

おもふこと何をか更にミ山なるしけりの杜ハ我としらなん

同郡同郷内村

奈牙木杜ナガメノモリ 古今集○東藻食作成、嘆

奉祀蛭兒、称二宮大明神、

是大隅州の二宮故に云、亦曰、蛭

月初酉日、十

月初酉日、十

この舊社地ハ、今之社より東方二十間許、杜の神木の北

方五間許にその故址あり、享保年中までこの邊ハ宮内原

といひし沃野の地なりしを、新田開墾の後水患を憂ひ慮

り、寛延三年、今の處に遷して杜の跡を傳ふといふ、

さて原の杜の神木てふハ櫟樟にて、今その樺幹の根株尚

残り、其幹中朽て空となり、その空の中に圍四尺餘りの

櫟樟樹生出、こは享保十三年の比ほひ、樺幹より孽芽

たりし子樹なりといへり、贈於紀行に、寛文七年十一月、

霧島權現社等に詣てし時、奈毛木の杜見んとて立よりし、

宮の右の方に、その廻り十尋許もあらん大くすの木うつ

はあり、中に十牛をもかくしつへし、齡八旬計なる翁、

鳩の杖にすかり、宮守なりとて來れり、なけきの杜ハ是かと尋れハ、是なりけり、秋津洲に艸木の無はしめ、高天の原より投玉ひし木なれば、奈毛木と名つけしと申傳へたりと云々、今そのうつは木の高三間許、匂拾二間、株

匂十五間許そある、万代記てふ史乘に、正徳五年五月十

一日、國分奈毛氣の杜、一の枝落て二之宮打つふしぬ、
その枝長拾武尋、その圍八尺ありといへり、この時まで
ハ樺幹ながらも猶朽倒れすや有けん、是より前つかた、
此杜を記せしものに、蛭兒を載玉へる天盤樟船の、此所
に漂着て蘖を生し巨木となりし、社の左に在る大櫟樟樹
是なり、其幹數百圍、枝葉扶疏蔚龍として天に參り數里
を蔽ふもの、即奈毛木杜也と云々、○貫明公國分に居玉
し時、特にこの杜を崇敬し玉ひしとかや、二宮大明神御夢
想ありとて、ある人歌を望し時よめる、龍伯公、庭の面
軒はをかけておく霜やミやまおろしにさえまさるらん、
と御歌など見えける、又國分の邑人語りしハ、此樟樹の枯倒たる片屑を拾ひ取て、板屋の材とし、中門の瓦に用ひしか、その家へは何となく惡しき事ありとて、本のことを返したるといふもの、余の見たりし時、此竹林の中に在りける、そもそも樟の巨木となり、或ハ石と化したるなとへ、和漢に數多ありて華にあらずといへとも、爰の杜のとく世に名高く、その由來の尚しきハ稀なり、又天書に、蛭兒ハ天下司農の神にて、幼少より田土にまめりて塊を遊び、田間の事をのミ業となされしはと、蛭兒の名を負せし也、三歳脚不立者、試蛭兒經三年之久、是神聖重農恤民之至如是、而後不疑蛭兒遂委任之、猶如放洋之舟、得順風無復一念之累矣と云々、ト部兼邦歌に、あはれミニの深き千尋の海原を譲り得るとやも知らん、招歌には、なげきを愁歎に寄て詠來れる事も、大江朝綱歌に、父母ハあはれとみすや蛭兒ハ三歳に足立して、又拾遺集に、こからしの杜の下、風はやミ人のなげきはおひそひにけり、この歌ハ、おもふ人侍る女に、物のたまひけれどつねなかりけれへ、つかはしける、おもふ人思はぬ人の思ふ人おもばさらなんおもひしるへくといひし返しなり、木枯社につれたまひ思過したる、風はやミに、あはれのほとをいさめ、其人のあまりなげきの杜けきの杜をとり合て、おひそひへり、

生添にて、思の繁きにたゞへたり、

祢宜ことをさのミ聞けん社こそ果ハなけきの杜となる
らめ

金葉集

橋俊宗女

いかにせんなけきの杜ハ茂れともこのまの月のかくれ
なきよを

詞花

清原元輔

おいたえて枯ぬと聞し木の本のいかてなけきの杜とな
るらめ

新續古今

藤原秀茂

かれにけり人の心のあき風にはてハなけきの杜の言の
葉

拾玉

慈鎮

人しれぬなけきの杜につもりぬる此ことの葉をちらさ
すも哉

現存六帖

信実

まとハるゝなけきの杜のさねかつら絶ぬや人のつらさ
成らん

六百番歌合

權太夫

哀とも思ひもやしる我戀をなけきの杜の神に祈らむ

葉

太守光久公、元祿七年、七十あまり九とせにて逝去
し玉ひし時、平松中納言時庸公

消しこそ哀奈毛木の杜の露八十またるゝ年のことなたに
同し君をいたミ奉りて、山本春正

あふきこす君にわかるゝ國民やさこそなけきの杜にふ
すらん

この社にもふてゝ、三十五世遊行

春ハ花秋ハ紅葉のあかなくに散るやなけきの杜といふ
らん

北郷忠能

君か代のをさまる國の春をへて奈氣木の杜も色かへに
けり

山田有栄

あふことをなけきの杜のゆふかつら長くたのミやかけ
て祈らん

二階堂孝行

そのかみに誰うきことのありしよりなけきの杜の名を
残しけん

古のなけきの杜の名もつらし我祢宜ことの神のミツ垣
顯季

子規なけきの杜にあはすして君か待よハ過にけるかな
かな

神さぶるなけきの杜の子規引しめ縄もなく／＼そこし
俊頼

後久我

子規あかぬなけきの杜にきていとゝも聲をほしめつる
かな

よのつねの秋の物かは佗人のなけきの杜の色の深さは
新葉集、後醍醐天皇かくれさせ給ひて、又の春よま
せ玉ひける、

文祿年中、豊臣公の命を受て下りける時、此社に詣
て、

山かせをなけ木の杜の落葉かな

此社に詣玉ひて、中納言家久公

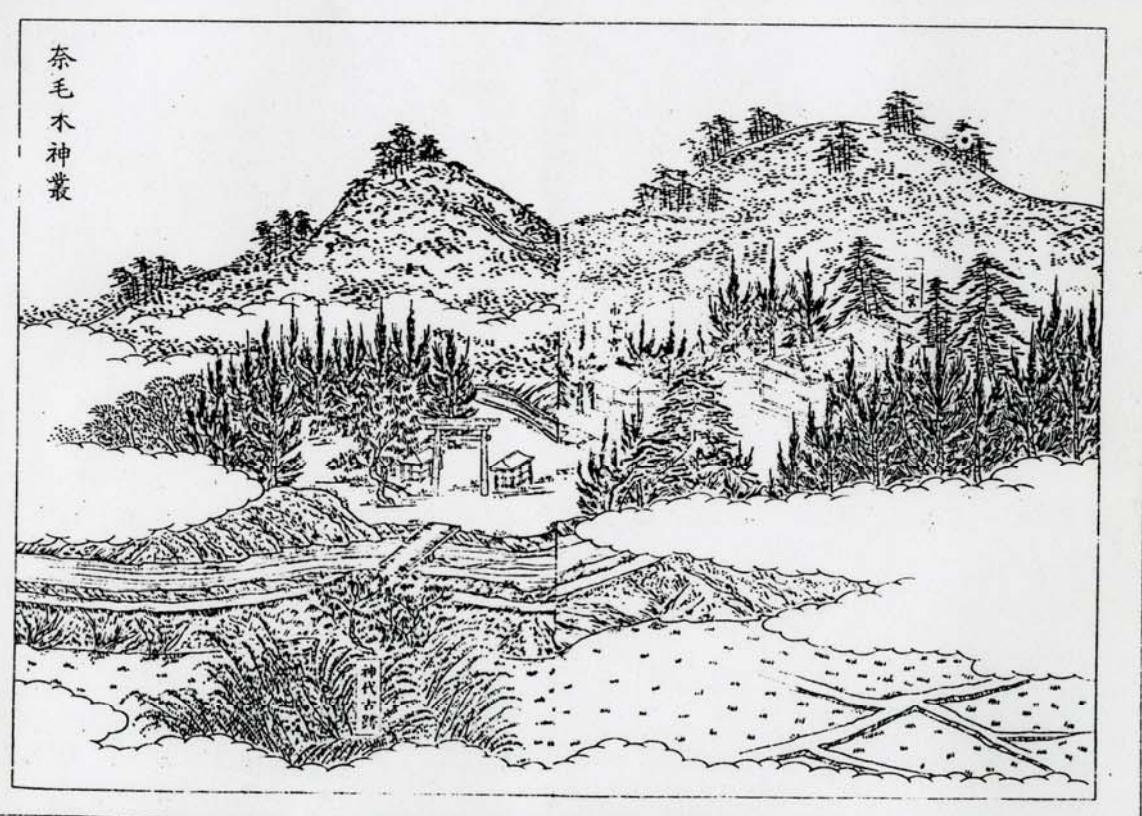
古をしのはさらめや今とても道をなけきの杜のことの
さくらん

細川玄旨

新侍賢門院

一品親王

名寄



奈毛木神叢

奈木神叢地頭館を距る

内村にあり、古今集、奈木杜に

溝水を隔て祠あり、享保年中まで此邊は宮内原といひし、沃野の地なりしを、新田開墾の後、水患を憂ひ慮り、寛延三年こ

大明神と號す、祭神蛭兒一坐也、例祭二月初酉日、十一月初酉日、是を隅州の二之宮と云、隅州二之宮は、當邑伊斐諾尊の御

神、東藻會稟感嘆叢嘆息叢投木叢等に作る神祠を二之宮

作る、社の字並し古は神社といひ、此と通せり、其字五葉

作る、集神社毛利と訓え、又孝樹記、生國魂社、又難波社、其字五葉

子、蛭兒神、三歳になり給へども脚立給はず、ゆゑに天盤櫓船とはなれりと、奈木木とは、父母の御神御子の脚立給はぬことをなげきて、放棄給ふに因て、叢の名となるといひ傳ふ。日本書紀、蛭兒雖已三歳、脚猶不立、故載之於天盤櫓船、而順風放棄云々、その古樟の神木は枯れて櫛幹の根株、竹林の中にある、此竹節の幹中朽て空なり、二之宮は、舊此神木より北方五歩許にありて、其址を傳ふ。今は神木の亥方二十八步許

神代盤樟船之神木自第所見
高二丈許、圍七丈八尺、株圍九丈八尺許
許根圍九丈八尺許



山主計久初、古樟のうつぼになりしゆゑ邑長に命し、稚樟を代植せしに、其木は程なく枯れて、古樟の側はら自然に櫻樟三本を生ず、其樟長して今は廻り七尺餘の樹となれり、是即神木の種苗、疑ひを貽するものなし、此神叢歌林名所考等に載て、詠歌多し。

○二之宮大明神祠 前文に見ゆ。
○和 歌
古今集

瀬岐

ねぎことをさのみ聞けん社こそ
果はなげきの杜となるらむ

金葉集

橋俊宗女

いかにせんなげきの杜はしげれども
このまの月のかくれなきよを

詞花集

藤原秀茂

おいたにてかれぬと聞しこの本の
いかでなげきの杜となるらん

新續古今集

清原元輔

かれにけり人のこゝろの秋風に
はてはなげきの杜のことの葉

拾玉集

慈鎮

人しれぬなげきの杜につもりぬる
此ことはをしらさずもかな

現存六帖

信實

まどはる、なげきの杜のさねかづら
絶ぬや人のつらさなるらん

六百番歌合

權太夫

哀ともおもひもやしる我戀を
なげきの杜の神に祈らむ

歌枕

久我太政大臣通光

神さぶるなげきの杜のほとゝぎす

ひくしめ繩もなくくやこし

夫木

後鳥羽天皇御製

古のなげきの杜の名もつらし
わがねざごとを神のみづかき

同前

顯季

時鳥なげきの森にあはずして
君が待よは過にけるかな

同前

俊頼

ほとゝぎすあかぬなげきの杜に来て
いとも聲をおしめつるかな

名寄

二品親王

よのつねの秋のものかは佗人の
なげきの森のみやのふかさは

三十五世遊行

春は花秋は紅葉のあかなくに
ちるや奈毛木の杜といふらん

文祿年中細川玄旨豈太閤の命を受て本藩に來りけ

る時此社に詣て

山かぜをなげきの杜の落葉かな

慈眼公此社に詣玉ひて

古をしのばさらめや今とても
道をなげきの杜のことの葉

氣色濱夫木集○松葉名所和歌集にも見えたり、同郷の中神溝村に風す、
今濱市と称ふ、是は文祿四年貢明公慶島府内より富隈に移り、
玉ひしより、此濱にて市立ありしよりの名といふ。

一名住吉崎住吉神社有による、

姫城浦長門本平家物語ニ出たり

氣色杜より午方二十餘町の海邊の名也、又姫城村よりも同し方に當りぬれハ称ふ、上世ハ天涯いと瀕かりしとそ、

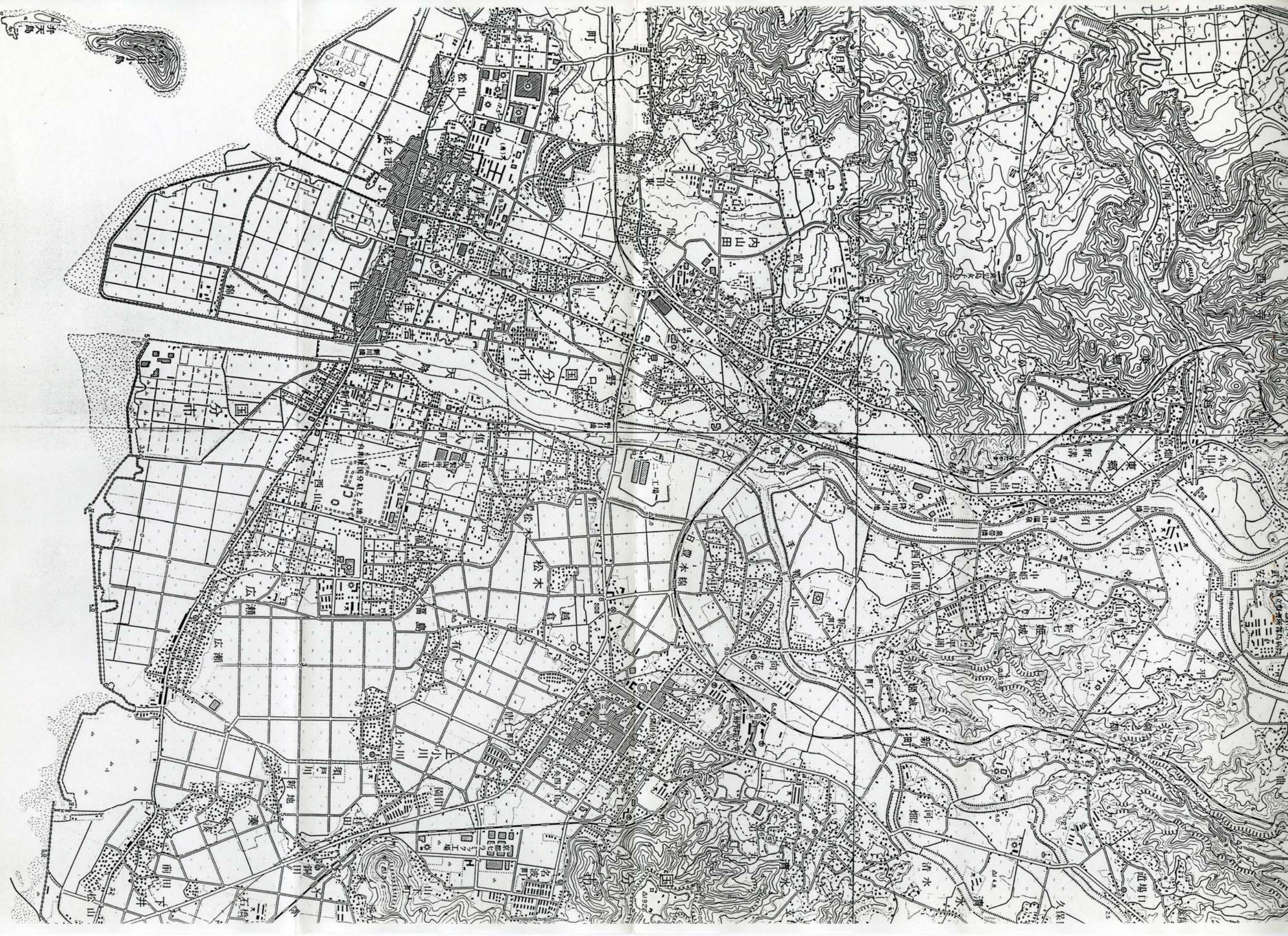
夫木

後九條

かはり行氣色の濱の夕烟誰か深きえに又霞むらん

月やよゝすみよし崎の松を友

禪杖



地名研究会報 第35号
平成4年9月6日 鹿児島地名研究会

- I. 第35回例会 平成3年12月1日(日) 於教職員互助組合会館和室
(出席者) 青柳俊二・池田信夫・泉 厳夫・小川亥三郎・納 栄蔵・小園公雄・小原親英・
花園正志・浜崎盛雄・平田信芳・松田 誠・山口静也(計12名)
- II. 讀藩名勝考読会 P.117 ~ P.121
(問題となった地名および事項) 覚遍・小村と広瀬・豊後迫・豊前国からの二百戸・曾於郡・
「隈」のつく地名(七隈)・天降川・郡田・大穴持神社

覚遍

平田 今、読みながら気が付きましたが、120ページの下の段、大隅国分寺のちょっと前に註がありますが、そこに覚遍という坊さんの名前が出て来ます。これは、この前の巡検の時、国分市の郷土資料館に止上神社の神面がありましたが、ほとんどが覚遍が作ったものなんです。あれが慶長年間から元和年間にかけてのもので、江戸時代のはじめのものです。それと、止上神社の石の鳥居、三之鳥居ですかね。三之鳥居を奉納した年代が刻んでありますが、それにも覚遍と刻んであります。それが寛延元年(1748)ですから、ちょうど18世紀の中頃で、年代が開き過ぎるのです。覚遍の一世・二世・三世がいたんじゃないかということで帰って来ましたが、覚遍という人物は追求の必要があると思います。花園先生、何か系図のことですか。

花園 子孫の方がおられるので、訪ねてみたのです。稻元さんとかいう人の所へ行ったら、覚遍の墓がありました。

平田 ああ、そうですか。

花園 墓を見てみましたが、古いのが四人ありました。

平田 ははあ。

花園 古いのは四人。慶長の覚遍さんと、後の覚

さんがありそうですね。それから、国分実業高校に田中さんという人がいます。Aコープのすぐそばに墓があります。田中さんという方が、覚遍和尚のお母さんの家らしいのです。

平田 ああ、そうですか。

花園 その家に仏像が2体。阿弥陀如来像と不動明王像と。底の方に文字が書いてあるのです。それを見ていたら、平田先生が一度調べられた書類が出て来ました。

平田 はあ?

花園 昭和56年に、先生がご覧になって。

平田 ああ、そう云えば、文字を書いたものがあったですね。ああ、そうですか。

花園 それが、重久の田中さんという家にあります。そこから稻元家に嫁がれたようです。先程云いました四名の墓は稻元家が管理しているようです。

小園 この覚遍のヘンという字は間違っている。シンニョウが書いてあるんですね、覚遍。

平田 シンニョウですね。

小園 その覚遍は、霧島神宮とも関係があるようです。霧島神宮にも大きな面があります。同じような形の大きな面です。アだったか、ウンだったかは忘れましたが、一方しかありませんが、これくらい

あるかな、50センチぐらいのですね。結構大きな面です。しかし、今おっしゃったように、慶長年間からと云えば、覚遍というのは同一人物ではなくて世襲的なものがあったのでしょうかね。今、お母さんがとおっしゃったでしょう。覚遍という人は、地元の出身だと考えられるわけですね。そして止上神社のいわゆる別当寺に勤務しながら、止上神社を管理すると云ったような立場の人物だったのでしょうね。

花園 常林寺というお寺のようですが。

小園 ああ、常林寺ですかね。霧島神宮の方が華林寺ですからね。

平田 なるほどね、今後注目していい人物でしょう。いきなり人物の話から入ってしまいましたが。

小村と広瀬

花園 今年の四月でしたか、小村(こむら)と広瀬の由来ということが新聞に出て、先生が回答されていましたが。

平田 はい。

花園 今、これに小島村というのが出ているわけですが、広瀬と小村についてもうちょっと教えて頂けませんか。

平田 私も先程読みながら、小島村から小村になるというのは変だなと思ったのですけどね。明治の市町村制施行の時には、村をとって「小」という大字にした。しかし人々は「小村」とよんでいた。国分市がスタートするときに「小村」じゃおかしいということで、「広瀬」という名前を採用したわけですね。ところで『三国名勝図会』には大津川の下流を広瀬川という書いてあります。広瀬という地名は古くからあったということですね。『和名抄』記載の桑原郡8郷の中に「広西」という郷名がありますが、これは「ひろせ」と読みます。広瀬は広西である可能性が強いと思います。そういうことで、広瀬という地名は由来が古いと説明したわけです。昭和50年に構辺インターチェンジの事前調査をしま

したが、その時に墨書き土器が出てきました。はっきり「廣」と読めるのです。それからもう一つは完形品で「奨」と書いた墨書き土器が出土した。これらは県立博物館に飾られています。「廣」という墨書き土器は、広西郷と関係があると考えられます。だから広瀬という地名は古い。その中の小村という呼び名ではなかったのか、と考えています。小村はいわゆる大村に対しての小村でしょうね。

「小」という字の読み方ですけれども、例えば、上小川。国分では「かみおがわ・かめがわ」ですが子供たちは「かみこがわ」と習っている。『慶藩名勝考』も「かみこ」だと仮名が振ってあったと思います。だけど、春の小川(カワ)であり、春のコガワとは云わないから、「オ」という云い方が古く、「コ」という云い方は新しいのではないか。大村(オオムラ)に対しては小村(コムラ)でしょうしね、大里(オザト)に対しては小里(オサト)。オサトがあるかな、小里代議士はオサトだね(笑い)。小村(コムラ)という云い方は小村(ムラ)よりも新しいだろうと思います。小島村が縮まって小村というのは変だと思いますけどね。

花園 私は朝何回か広瀬一帯を歩いたことがあります、広瀬川と海岸線とは差があって、そこは砂洲になった状態です。

平田 ああ、そういう島ですか。

花園 東の方に行くと、ずっと低くなっています。10号線より北側はちょっと高くて、水戸(水戸)川の堤防から川の方が低くなっています。カマボコ型といえばちょっと大袈裟ですが、そういう形になっています。そして東の方へ自然と低くなっています。ということは川と海流の関係で砂洲になったと考えられます。

平田 島になっていたから小島村と呼んだ。その「島」がとれて小村ですか。小島村でもよさそうだけね、地名としては。

小園 広瀬というのは、豊前国から来た二百戸の中に広瀬から来た人々があるということをおっしゃったわけですが。

平田 その可能性は強い。

小園 ちょっと、それは違うという気がします。まあ、意見を云わせて下さい。養老年間の頃、中央に従わぬいわゆるまつろわぬ者たちに対して、府中や国分寺あたりに住む人々は、天降川を大体の境界にして北の方から西の方を守ったのじゃないかと思います。大分とか豊国ですか、それに稻積、答西なんてのがありますけれども、どうも西の方に桑西(くわい)郷の方に片寄っている感じがしますね。広瀬まで含んでおれば、国分寺・府中の足元に従わぬ隼人たちが居たということになるのです。広瀬というのは、地名からみれば、地質的な地形的なことで呼ばれる呼び名。

平田 海岸地帯に広瀬があるかな?下流域で広瀬という地名は普通は付かないのですよ。川の中流域で、広い瀬があるところに広瀬という地名が付くわけで、川口に近いあの辺に広瀬という地名が付くのはちょっと不自然だなど云ったことはあります。だから、豊前国からの二百戸の中に豊前国広瀬の人たちが居て、こちらに移って来て広瀬という地名を付けた可能性があるということを云ったわけです。それに、韓国宇豆峯神社は明らかに豊前国から移って来ている。それから構辺という地名も、豊前国の構部から移って来たと考えられます。大隅国府の周囲は豊前國の人たちで固められたとみてよい。そういう地名の一つであるとみたら、広瀬も該当する。それで、古くからの地名が小島村もしくは小村であったと理解したいのですがね。

小園 そう云った都の人たちが、稻積郷:牧園の中津川などに配属されたとしたら、韓国宇豆峯神社は何故あの辺にあるか、それも疑われるわけです。それで、蒲生・帖佐に豊留神社というのがあるので

すけど、最初、韓国宇豆峯神社近辺に一応定着した後にあっちに行ったのかというようなことを書いた人もおりました。

平田 まあ、難しいけど。移した人々を国分平野とか加治木平野にばらまくでしょうね。

小園 桑原郡ですね。桑東郷(くわとうごう)と桑西郷(くわせいごう)ですかね。

泉 豊前国から移って来たというのは、いつ頃のことなんでしょうか。奈良時代?

平田 大隅国が成立したのが、713年。その翌年になります。

泉 今また続日本紀を読んでいるのですが、教養文庫で2巻まで読んだのですが、そんな記事は見当らなかったのですが、もうちょっと後ですか?

小園 記事はあります。

平田 有名な記事です。

泉 日本書紀にですか。

平田 いえ、続日本紀です。

泉 そうすると、称徳天皇より後でしょうね。

いや、孝謙天皇より後でしょうね。気付かなかつたですね。

小園 もっと前ですよ。

豊後迫(ぶんごさこ)

泉 もう一つ。豊後迫という所が霧島の近くにありますね。あれは?

平田 よく判りません。

小園 私は今ちょうど霧島町の郷土史にタッチしているのですが、いろんな人がおりましてね、例えば蒲生町の松永という方は、祖先は豊後守だ、と。

その祖先が島津家と戦って負けて、霧島に逃げる途中、そこで死んだというようなことをおっしゃるのですがね。確かに1530~40年ですね、日向国の伊東氏が非常に強くて、しかもそれを大友宗麟がバックアップしていた。島津さんは必死なんですね。小林・高原から霧島を通って来るルートが

あった。豊後迫を通ってですね、そして税所氏と戦うわけです。島津さんも帖佐から出て来て鳩之脇を通って行くんです。大体7~8時間かかるって、籠に乗って行くのです。そして霧島の田口名とか大窓名に泊るわけです。高原へ荒佐を通って行くルートがあった。比較的早い時代の江戸時代の記録に残っています。ともかく豊後迫を通って行った。

それから松永にも豊後田(みだ)という所があるようです。何か関係があるのかも知れません。あるいは、本当は霧島の場合は、オノサカ。王子坂だと云うんですよ。オオイバル、王子原ですね。それで下った所を豊後迫というんですね。迫というのは鹿児島ではなくて所をいうんですね。狭い所を行くのです。しかし、あの辺は坂でしょう。だから豊後坂というのが正しいのかなと思ったりします。

平田 豊後坂は難問ですね。いろいろ云われたりしていますが。

豊前国からの二百戸

花園 さっき、豊前国から二百戸の農民が移住して来たという話がありましたが、当時の一戸の人数が二十四~五名ということだったらしいですね。

平田 相当に大きな集団ですよ。

花園 千人くらいの集団が国分平野に入って来てます。そして、その人たちは一つには隼人族に対する農耕の指導・水田の指導でしょうか、もう一つは国府を守る任務があったと思うのです。北海道の屯田兵みたいな。だとすれば、あまり遠くへは移住しないと思います。ばらばらでなくて、国分の府中周辺が移民の人たちの生活の土地であったと思うのです。そうすると、国分平野一帯というのはそういう豊前国の血を引いた人たちが沢山いるんじゃないかなと思ったりするんですけれども。720年の隼人の反乱の後は抑えられますから、その後放って行ったのではなかろうかと思います。

小園 天降川から持松の方にかけて一応防衛ライ

ンが引かれていたような感じがするんですね。おっしゃるように、最初は韓国宇豆峯神社付近に居住して、あるいは府中付近に居住してとて、やがては順化するにしたがって分散したんじゃないかなという気がします。

平田 だから、レベルの高い国分平野の発展がそれにつながって来る。(笑い)

池田 川内の場合もそうです。託万だと合志だと、肥後国から来た人たちで固められますからね。

小園 その頃の隼人の人たちの生活というのは、ローレベルの小規模な部族的な共同体的なもので、国家というものはまだなかったと思うのです。だから共同体みたいな形で引っ張かれて行ったと思うのです。まあ、狩猟か漁労か、あるいは僅かな水田・陸稻作りやらで、本格的な生産社会に入って来るのは、やっぱり720年の反乱の平定以後である。ところで、720年以後にも歴史的空白があるんですよ。1021年頃になって、税所氏が出て来ますから、その間の300年ぐらいが空白になります。税所氏というのは一体何だったのか。私は隼人のいわゆる曾長級の人だったのじゃなかったかと思いますけど。例えば大前(おほま)とかいう名前をつけているでしょう。それから藤原という姓をつける。国分平野の端にあたる霧島と国分の境の岡の上に、屋敷があるわけですね。その一帯を王子原と云います。屋敷跡もあるらしい。

曾於郡(そのこおり)

浜崎 ここに出ています鷹嶽。いわゆる曾於郡。ソノコオリと読みましたが、その他に曾野郡と書くものがある。これも同じですか、別ですか?

平田 同じです。最初は、襲(そ)という國であったわけですね。地名は二字にせよ、佳字を付けよとすることで鷹嶽になったり曾野とつけたりするわけです。浜崎さんの所で衣(え)を穎娃(えい)と二字に

するのと同じ類ですよ。

浜崎 鷹嶽郡: ソノゴオリの方は襲山(そゆま)で、今の曾於郡とは違う。最近はそう云われていると思うのですが。

小園 大隅國が出来た時の四つ郡の中の鷹嶽郡とはまた違うのじゃないかと思うのですけど、あの口の付いた鷹嶽ですね。最初の日向國より四つ郡を割きてというのがありますね、あれとは別のことですね。倭名類聚録などで調べてみると、ソオという字が四通りか五通りあるようです。だから曾於郡、ソノグイ。私はうっかりそう云ってしまっているのですけども、あれはソノゴオリなんですが、鹿児島語ではソノグイと云います。ソノグイにもいろんな字があります。今おっしゃった襲(そ)というの東襲山(ひしきやま)もそうだと思いますが、襲を使うのは明治になってからで新しいのじゃないですかね。江戸時代は曾於郡。霧島と国分の重久の所は、曾於郡・ソノグイで出ていますね。曾於郡村(そのぐむら)になっていますから。

浜崎 この本も二通り出で来ます。曾於の用字が
平田 曾於郡村(そのぐむら)の信仰の中心は止上神社だからね。税所氏は滅んでいるけれども、税所氏の伝統というか、思いで出をがっちり守っている地域で、国分ではちょっと違っている地域のようだけ。

「隈」のつく地名(七隈)

小園 富隈の「隈(くま)」という字を教えて頂きたいのですけど。「隈」という意味をですね。何か鹿児島神宮と関係があるという話も聞いたけど。

平田 七隈は、笑隈(えくま)・咲隈(さくま)・富隈(とくま)・星隈(ほくま)、それから何かな。

花園 全部で七つありますね。

小園 岬というの、やっぱり隅(すみ)ですか。

平田 国分に最初に調査を行った時、国分平野の大きな航空写真を見たんですよ。天降川が蛇行して

いる昔の航空写真が。たしか市長室にあったと思います。真んまるい地割りが七つぐらいみえていた。あれは蛇行によって自然に土地が円形に作られたのではないかと思ったけど。

小園 輪中みたいな形にね。
平田 そう。これが隈じゃないかと話したことがあるけどね。

小園 『鹿児島神宮小史』を書かれた三ツ石先生は「隈」という字を鹿児島神宮と結び付けておられる。宇佐八幡の場合もそう云ったものがありますから、似た形で取りあげられたのかなと思って。

平田 岬(くま)というのは曲った所をいう。例えば薩摩の曲、曲(くま)と読みますね。そのような感じのところが「クマ」地形じゃないかなと思ったのだけ。

小園 そうすると隅・スミかなと思ってね。
平田 スミでもクマでもいいのだろうけど。

花園 その「クマ」が熊襲の七隈に結びついて来るみたいですね。宇佐八幡託宣集の中には720年の隼人征伐の時の七城というのが出て来ますが、そのうちの五城は早く降伏し二城が最後まで頑張ったということなんですが、その七城というのが後に熊襲の七隈というふうに地名的に結びついて行ったのではないだろうかと私は思うのですけど。

小園 七城。七つの城ですね。
平田 富隈は国分平野では一番のポイントになる所だよね、確かに。

小園 あの山は何ですかね。砂の山、石。自然のものですか。

平田 自然の岩山ですよ。

小園 岩山ですか。
平田 沖小島とか辺田小島と同じ類。岩山が天降川の沖積によって埋まってしまった形になる。

小園 埋め立てで、ますます判らなくなつた。
花園 昔は島だったでしょうね。

天降川（あもりがわ）

泉 天降川という名前ですね。あれは、もともとは新川と呼びよったのですか。

平田 新川は新しい。

泉 これは独断かもしれませんけど、紀元二千六百年に皇威發揚のため、新川を天降川に変えたのではないか。そうじゃないのですか。

平田 天降川が古いのです。

泉 古いのですか、ほう。（編集者後記：5万分1図では新川が古く、昭和41年以降天降川となる。天降川の名称は三国名勝図会などではなく、薩隅日地理編纂が初見か？）

花園 天孫降臨の天降（あり）から來たというのですね。

泉 天孫降臨の地とということで、二千六百年の皇威發揚のために付けたのかと思って。

平田 川の名前にしては、天降（あり）というのは変だなと思っています。川内を流れるから川内川、樋脇を流れるから樋脇川とかね、大抵流域の集落の名をとって川の名前が付くわけです。ところが国分近辺は変な名前が付いていますよ。例えば、思川でしょう。これは何故、思（おも）なんだろうと思いまます。それから網掛川でしょう。それから、検校川もそうですね。何故、天降（あり）。神話にちなんだ川の名前の付け方というのは、変だなと思います。

花園 検校も、本来は「けんぎょう」

平田 ケンギョウと読むべきなんだろうけど。

小原 ケンコウと読みますね。

小園 何か由来があるわけですかね。

平田 何かあるとは思うのですけどね。これらは整理する必要があると思います。ところで、構辺に崎森（さきの）という地名がありますが、何故あんな所に防人がと思うのです。岬守とか峰守。また、葦守（あしの）というのがあってもよさうだとも思う。葦守ならばアッモイとかアモイという縮まり方をしま

すし、葦守・足守（あしの）という地名は全国的にみると、各地にあります。豊葦原の葦を守るという意味になる。ところで、松永に芦江神社というのがあります。松永川は昔は芦江川とも呼ばれていた。そこには葦を守る人々がいて、葦守と呼ばれていた。それが天降（あり）に变成了のかなと思ったりします。あまり転化説はとりたくはありませんが、葦守川からアモリ川という名前が生れる可能性はあるなと思います。それと天孫降臨神話と結び付けて「天降」という字を考え出したのかなと思ったりしますけどね。まだ実証するまでには至っておりません。まぁ、奇妙な名前ですね。

郡田（こおりだ）

納 さっき、郡山を「クイヤマ」とおっしゃったようですが、どの辺でいうとるんですか。

小園 郡山じゃなくて、郡田（くひだ）というのがあるのですがね。郡田（こひだ）。

納 ああ、郡田。

小園 あれを郡田（くひだ）と云います。

納 郡田（くひだ）と云いますか。

小園 そうです。

納 郡山（こひやま）を郡山（くひやま）と聞いたのは、大口の郡山神社。焼酎の落書のあった所を郡山（くひやま）と云うんですがね。あの辺だけの云い方かなと思っておったんです。国分方面でも郡田（くひだ）と云うのですか。

小園 正式には郡田（こひだ）ですけど、郡田（くひだ）と云います。

納 音の変化でそうなったんだなと思ってるんですよ。コオと引っ張ればオがウに變りますから、それでクリダになったと想像しとるんです。

小園 あそこに贈於郡の郡衙があったんじゃないかな、と考えるのです。そのための田圃ですね。

納 国分一帯では郡（こひ）をば、クイと讀んどるわけですな。

小園 詳細に調べたわけじゃありませんけど、そうじゃないですかね。

小園 郡田（こひだ）の上に、山之路（やのじ）がありますね。

小園 山之路（やのじ）ですね。

小原 郡田と山之路が一緒になって、郡山というのですかね。

小園 あの辺を、郡山と云うのですか。

小原 郡田。

小園 郡田（くひだ）と云いますよね。鶴田橋の下の田圃を云いますよね。

小原 あの辺を山之路と云いますから。

小園 あの辺を郡山と云いますか。

小原 郡山とは云わないですね。

納 先生の云われたのは、あっちの郡山ですか。

小園 大口の郡山です。

平田 はい、他にありませんか。

大穴持神社（おおあなぢんじゃ）

花園 大穴持神社のことなんですが、117ページの最初に出て来ますが、マムシの神様という云い伝えがあるんですね。何故、マムシと大穴持神社が結びついたかということを教えて頂きたいのですが。

平田 大穴持神社とマムシ。これは、どうなん

大隅国と日向国との駅道路について

小園公雄

平田 先般、南日本新聞に掲載されました大隅国と日向国との間の駅である大水駅。オオムツエキともオオミズエキとも云いますが、これについての新説のご説明をお願いいたします。

小園 鹿児島県史などを読んでいますと、奈良時代の公的な道路すなわち官道が、川内から蒲生へと来ていたことと、蒲生から国府へ向かう道があったろうということは推定出来ますが、それから後の日向國島津駅につながる道が非常にあいまいなわけ

です。そのうちになんとかと考えていましたけれども、たまたま『霧島町郷土史』の委員になり、何故税所氏が坂之上に居たかということをちょっと調べてみたいと思ったのがこの始まりです。

止上（とみ）神社の側を、手籠（てご）川が流れています。今の県道は、この上の方にあります。旧道は手籠川沿いありますし、しかも川はこの辺では伏流になりました。税所氏がこの坂之上という所に館を設けて居住していたというのです。鎌倉初期の

史料あるいは平安末期の史料に出て来ます。そのような古い史料の中に「居取」という地名が出て来ます。鹿太の五味先生はこれを居取(跡)と読みましたが、私は地元ですからこれは入戸(ゆど)だなということが判ります。

税所氏が何故坂之上の館に住んでいたのか、曾於之館に住んでいたのか、という疑問がありまして、調べているうちに、ここは古代の官道が走っていたのではないか、古代の官道とのかかわりから政治的・軍事的に非常に重要な位置ではなかったのか、と考えるようになりました。止上神社は代々税所氏の氏神ですから、普通ならばこの神社あたりに頑張るか、郡田(くわだ)の中とか、此処らあたりに居るべきなのに、どうして坂之上に居るのかという疑問から出発したのが追求の初めなんです。

そういうことで資料を眺めますと、大隅国府に来るのに真幸(まさき)の方から栗野や大口の方を通って来たということですね、あるいは敷根を通ったのかなというような形で、鹿児島県史は推定のまま放置しているわけです。それで、史料や地理的状況から追求できないかなと考えまして取り組んでみたわけです。3月8日の新聞に出まして、大部分の古代史の方々もそうじゃないかなとおっしゃって下さいましたが、明確にしておく時はしておかなければいけないということで発表した次第です。

駅というものについては、資料の1枚目にあります。延喜式の兵部省の中に、この史料があります。駅というのはどんなものか、国とのかかわりは、馬はどうだった、というようなことで拾ってみますと大隅国は駅馬が五疋、薩摩国は伝馬が五疋と駅馬が五疋、という形で出て来ます。駅はどんな所かといふことも史料に出ておりまして、国司や郡司が担当して帳簿をつけて報告するということ、駅の使用については、旅人が泊るわけすけれども、駅長が勝手なことをしてはいけない、というような

ことも書いてあります。

それから、令義解に入っていますが、廃牧令というものが残っています。それに駅の条件をこまかに規定しております。「須らく、駅を置くのは三十里毎、と」。この古代の三十里は、大体五里(20Km)と云われているわけですね。その間に一駅を置くんだと。また、土地その他の状況・水・草のことなどによって設置されるというような形で出ております。

もう一つ。大隅国の官道は小路に当るわけです。大路は馬が二十疋、中路は十疋、小路は五疋とあります。大隅国と薩摩国は小路に当る、というようなことを先ず念頭に入れて調べてみました。

薩摩国府から蒲生に至る道と、蒲生から国分に至る道と、さらに国分から島津駅に至る道とを、何とか確定してみようと思いまして、自動車で測ってみました。蒲生から国分の府中までが25Km、現在の道路ですね。大隅国府跡だといわれている守公神社から入戸・関之坂を通って大川原ではないかというような気がしまして、隼人・都城線を通って大川原まで測ってみたわけです。そうすると、これも25Kmありました。大川原駅から島津庄までが、25Km。若干の変動はあるかもしれません、大体24~25Kmで通過して行ったという行程を見出した次第です。

それから宮崎県の人の書いた論文を紹介されまして、おやっと思ったわけです。『荒襲街道』という論文によりまして、長門本平家物語の存在を知りました。これは、1185年からちょっと下るにしても、大体そんな時期の、鎌倉時代に入ってからの、平家物語ではないかと思います。そうすると、1991年に生きているわけですから、大隅国の設置は713年とすると、ほぼ真ん中あたりになりますから、現在よりもより確かな史料を提供していると思うのです。

長門本平家物語。普通の平家物語とは全然違います。いわゆる鹿ヶ谷の変というのは、後白河法王が

平清盛一派を追い落とすために僧俊寛とかあるいは平康頼とか藤原成経・成親とか、藤原氏、平氏、東大寺の僧を抱き込みまして、打倒平家の作戦を練っていたわけです。多田蔵人行綱の密告によって逮捕されます。成親は備中国に流されます。西光は開き直って平清盛をののしりますが、都大路で斬られます。俊寛と平康頼と藤原成経が、硫黄島に流されて行くわけです。俊寛流罪の経路を長門本平家物語は詳細に述べております。以下、それを要約します。

まず京都を発って播磨国の福原に辿り着きます。ここから舟に乗って備中国いわゆる岡山県の瀬戸の瀬という所に一応上陸します。それからまた舟に乗る所はゆく井という所なんです。瀬戸というのは岡山市付近にあります。ゆく井というのはちょっと判りませんでした。それから伊予国の夏地という所に着きます。この辺は、いわゆる盲法師が混乱したのじゃないかと思いますが、足摺岬なんかが出て来ます。一応、夏地という所にとどまっております。それからまた豊後国のさがのみさきという所に辿り着きます。此處で上陸して、少し散歩をします。それから同じ豊後国に米永浦というのがあります。浦ですから港ですね。そこでまた上陸しています。やがて日向国のあや部の瀬、わかの瀬という所にやって参ります。この辺はちょっと判りませんけれども、鉄輪坂に来ております。そして室野という所それから船引という所を通ります。さらに大山を越えて島津駅に辿り着いた、というようなことが書いてあります。これが俊寛がやって来た行路です

俊寛たちは島津駅に着きましたが、やっぱり罪人ですから、そう詳しいことも書いてありませんが、一週間程度、島津駅で休憩します。そこで霧島岳に参詣したようです。霧島岳は性空上人が山を開いたと云われていますが、性空上人の行動や喰火の様子など詳しく書いてあります。一週間経ちますと、このことが都に知られたら困るということで、警固

の者たちが、急いで薩摩の方、大隅国へ出発するわけです。

その時に島津駅を出発して、大川原という地名は出て来ませんけれども、大川原駅を通ったルートが考えられます。夏影をすぎて、あかさかという所に来ます。あかさか、とかみ(長門本平家物語の原文は、とかみ・あかさかの順)、やがてけしきの森。そして八幡、国分八幡などが書いてあります。俊寛たちが島津駅を出た後、夏影を通り赤坂を通った。それから止上に至って、そして景色の森。ここから国分八幡を祈った、と記述しております。

道というのはそう簡単に出来るものではないし、平安時代・鎌倉時代の道というのは以前から踏みならした道だと考えます。入戸で私が発見と云えば大袈裟ですけれども、旧道をみつけまして、この道が間違いなく鎌倉以前、江戸以前の道であるという確信を持っています。この道が古代の官道ではないかと考えているわけです。

その他にもいろんな理由があります。大川原という地名ですが、大水駅に結びつくのではないか。大水という地名を追求していきますと、栗野にあるのですけれども、どうみても日向国から国分に行くのに、ここ(島津駅)から直接行けるのに、別の道を行って下って来るということは、ちょっと不合理だ、と思う。もし測ったら25Kmじゃなくて、相当な距離になるのじゃないかと思います。一番近くで直線的な道があればということで実測したわけです。しかも長門本平家物語の中に、夏影・赤坂・止上・気色の森という地名が出て来るわけです。

その宮崎県の方はよくご存知なかったとみて、松永の方を降りて行ったんじゃないかと書いています。俊寛の行程には触れておられますが、逆にしたりして混乱しておられます。私は生まれが霧島ですので、こう云ったことなどを土地勘もあります、実測を行ったわけです。

駅についてですが、駅は水と草が豊富で、それと神社があるはずです。日向国の駅の場合、神社とのかかわりが非常に密接である、交通の安全を祈る上で神社の存在を無視出来ない、と日高さんは述べておられます。

大隅国の駅に話を戻しますが、蒲生駅もまだ確定していませんので、蒲生駅を設定しようと思って、実は二月に発行されますが、『鹿大史学』に論文を載せましたので後日読んで頂きたいと思います。

蒲生駅は蒲生院内にあります。院は郡よりも後にしかも派生したものですから、この蒲生院も新しく設置されたものです。租庸調など、特に租を確保したり、あるいはその他の税を確保したりするための院。これは倉庫ですから。この蒲生の場合ですね、どこにあったのかということも併せて考えてみたわけです。川内（薩摩国府）から来ますと、ここに蒲生八幡があります。しかも後郷（あごう）川が流れています。こちらの方が米丸。米丸から前郷（あごう）川が流れています。蒲生のほぼ中心に小高い丘があります。高さが50～60メートルぐらいでしょうか。こんもり茂った杉林の丘になっています。近世の仮屋もありましたし、浜下りの場所もありました。蒲生院の中心が、蒲生駅がどこにあったのかということがなかなか判らないわけです。それで日向国の駅と神社との関係、水が豊富であり、しかも中心地として設定するとすれば、蒲生神社・若宮八幡が蒲生駅に比定されてもおかしくないんじゃないかなというところで、一応仮説を出しておきました。蒲生駅はどのように考えて間違いないと思います。若宮八幡がこの地域の中心地ですから。また蒲生氏がこれを勧請したことですから、ほぼ間違いないんじゃないかなと思います。

次に大川原にですね、大水駅があればなあと思うながら探すのですけれども、実はまだみつからないのですね。それで大水というのは大川のこと。水の

流れを表したわけですから、字が似ております。くずし字ですね。しかも島津駅からの道で唯一の川が流れておる所です。唯一の川です。大淀川の上流になるのですけれども唯一の川が流れております。ここが一ヶ所だけです、水が豊富な所も。ここには栗谷川（あはんがわ）・大和田川（やまとがわ）・吉ヶ谷川（よしがわ）という三つの川が集まって来る。そして瓶台川（ひんたいがわ）、さらに溝口（みぐち）になります。水が豊富である、字は恐らく、くずし字。距離も大体よい。ここから止上まで25km、また都城市的郡元までを測ると、25km。しかも道が5メートルぐらいの道幅です。旧道の跡がはっきり残っております。砂防工事で切り取られていますが、下の方にははっきり見えます。シラス土壌の上が赤土で、その上に踏み固められた道路面の黒土があります。山道も凹んだ形で落葉で埋まっていますが、これは古道に間違いないだろうと考えた次第です。

いま一度、大川原周辺を考えてみると、神社という言葉はありませんが、この地図によりますと、①のあたりに駒田浦、②のあたりに銅田、③に銅田原ですね、それから馬水（うまみ）という地名があります。馬水は桐原の滝の近く。溝口川の所に桐原の滝があります。馬水に行くには急な坂ですが、此處で水をやるというようなことで、そのように呼んだと考えます。

古道に関する神社は、本格的に調べてはいませんが、聞いたところでは神社は、どうもない。稻荷神社があったのではないかと思いますが、そこら辺がまだ確認されておりません。しかし、大川原が大水駅ではなかったかと考えております。夏木、夏影というのは間違いただと思います。今は20メートルぐらいの道路が出来て昔のおもかけはありませんが、10年前までは曲りくねった道路でした。夏木、吉ヶ谷。吉ヶ谷という言葉は出て来ませんが、それから赤坂・止上と来ます。以上のことと一応が決まります。

次に俊寛はどこから舟に乗ったかということですが、鳩脇（くのき）という所です。鳩脇から舟出して許された二人は此處に帰って来ます。鳩脇を出て、木入津（木入津）を通って行きます。キレイという地名も出て来ます。鳩脇は浜之市や小村じゃなくて真孝の所。帰る時にも鳩脇に上陸しています。俊寛じゃなくて、平康頼とか藤原成経は此處に上陸しています。しかも上陸したという記事もあります。

それから島津義久が伊東氏を討つ時の鹿児島からの上陸地点がこの鳩脇です。場所からみて昔の錦江湾の奥における唯一の舟泊だったんだろうと思います。あそこだけは溝と云いますか、溝川になっていますから。

従来、鹿児島県史などは栗野を通る道と敷根を通る道を考えていた。敷根を通る道は現在の国道ですから国道を想定している節がありますが、そうではなくて隼人・都城線を通っていたのだ、ということです。止上神社の脇の手籠川をずっと上流に行きまして、伏流する急な崖の所をよじ登って行って、そして右に折れる。古代の官道は此處を通っていたんだといいうことです。また霧島山に行くときには右に折れずにまっすぐに行って、王子原を通って行ったのだろうと考えます。この王子原というのが人吉の相良氏、あるいは高原おりました伊東氏が島津氏を攻める場合に通っておった道であります。

以上のようなことを最近ようやく考えるようになりました。

（質疑応答）

平田 ありがとうございます。質問をお願いします。

泉 長門本平家物語というのは、一般の者には手に入らないのでしょうか。

小園 実は私も、図書館で必要なところをコピーしました。

小原 現在、出版されています。

小園 出版されました？

小原 はい。うちの図書館も買ってもらいました。

小園 そうですか。いくらですか？二千円、三千円ですか？

小原 もっと値がしたようです。

泉 どこの図書館ですか？

小園 私は県立図書館でみました。

小原 国分市の図書館です。

平田 市販されていれば、それは面白い。

小園 古典大系本には載っていませんね。源平盛衰記にもありません。

小原 どちらにお住まいですか。

泉 私は鹿児島ですが、出版社を教えて頂ければ

小原 出版社はちょっと記憶しておりませんが、本屋に図書目録・出版目録がありますから、本屋で聞かれたら、すぐ判ると思います。（編集者注記：名著出版会、12,875円）

平田 そんなら、私も買ってみよう。面白い。

小園 面白いでしょうね。長門本の場合は、他のものにない西国のこと�이非常に詳細に書いてありますから。

泉 そうでしょうね。原本は赤間宮にあるのですか？

小園 赤間宮ですね。

泉 国宝でしょう。それから鹿児島の俊寛堀は、どうしてあそこになったのでしょうかね。

小園 皆さんもそう云いますよね。その頃、鹿児島はあまり開けていなかった。龍ヶ水の岡の上なんか道がなかったですから、ほとんどが吉田越えだったわけですからね。吉田越えか、海岸の浜辺をずっと歩いて来たか、ですね。俊寛堀というのは、あの俊寛が作ったというのでしょうかね。

平田 いや、俊寛が流されて行った所だということ。しかし、当時の鹿児島郡はね。まあ、一つの

問題提起がなされたわけだけど、出発するとして大隅国府か薩摩国府かでしょうね、流すのだったら鹿児島はその当時は大した地位ではないのだから。俊寛が流されて来た時のことと氣色の森とか止上という地名が長門本に出て来れば、大隅国に送られて大隅国司の管轄で南に流したなということは想定出来ますよね。

小園 そうですね。どこから出発したかは、私も判らなかつたのですが、平康頼が二・三年して釈放されるわけです。そして俊寛だけが哀れな死に方をするわけです。その時、帰り着いたのが鳩脇です。そして正八幡宮で一泊します。その時、台明寺の僧も来て酒を飲んでいるようです。わざわざ此處まで来て、それから鹿児島の方には行かないでしょう。

納 ところで例の御着屋(おきや)。あれは島津藩の米をつく春番が居ったから春屋というのを、何かで見たことがあったんですが。

平田 それは、江平先生の説です。

小園 何か、舟着場であったというようなことは云えるよね。

平田 舟着きと米つきとがありますね。

小園 しかし「御」がつくからね。米もやっぱり「御米」と云ったのだろうか。

花園 俊寛たちが流されてこっちに来るわけですが、警固の人たちというのはやっぱり付いて来るのですか。

小園 付いて来ます。名前も判っています。

花園 ああ、そうですか。今、先生のお話を聞きながら、和氣清麻呂が大隅国に流されて来たことを考えました。稲積里云々があるわけですが、先生の話と結びつけると、清麻呂のコースおよび稲積里の所在も判って来るのじゃないかと思ったりもするんですが。

小園 和氣清麻呂も同じコースで大隅国へ來たと思うのです。罪人とは云いながら、藤原氏の息の掛

かった中流貴族ですから、和氣清麻呂はやはり保護されたと思います。俊寛などとは待遇が違うと思います。だから温泉のある所ですね、国分から日当山あたりだとちょうど良いし、あの辺に隠遁しておったのじゃないかというのは、何か納得しますよね。

平田 和氣清麻呂はちょっと早いけどね。和氣清麻呂は、未だ判っていない稻積城に流されて来た可能性が高い。それが一番強いだろうと思うので、稻積城を抑えることが先決だと思うんですよ。

花園 稲積は、現在の牧園町中津川と考えられていますが、あそこじゃなくて、どこか日当山辺に。国衙に近い所、役人の目がいつも届く所でないと、辺鄙な所と云えば失礼だけど、あっちの方はどうかなと思うのですが。

平田 前回も花田さんが駅路と神社の話をされ、今日も同じことが云われて納得するのですが、蒲生は蒲生八幡。薩摩国の場合、市比野は何かありますか・市比野神社か何か。

山口 あそこはないですね。あの横に山城はありますが、株野駅比定の石碑が立っています。小高い森、ちょっと名前は忘れましたが山城はあります。神社はないですね。

小園 株野駅と取り組んでみたいと思ってはいるのですが。

平田 それと、綱津駅の近くには射勝神社がありますね。

山口 あそこにはあります。

平田 それから莫祢駅は何かありますか。阿久根は何か神社が?やっぱりあるでしょうね。出水の市来駅は前回の話では加茂久利神社。神社ということを考えたら、もう一つあってもいい。確かに島津駅と大隅国府を結ぶのでは、今日説明のあったルートは最短距離だな、なるほどと思う。そして長門本に出て来る。しかし、島津駅じゃなくて夷守駅と結ぶ

となったら、栗野ルートも無視出来ないわけです。神社と云えば、栗野には勝栗神社という古い神社がある。そして丸池という豊富な涌水があるし、大水(大水堀)という地名もある。夷守ルートを通って大隅国へ来る道もあったことは確かです。元禄時代に下りますけど、東大寺の作り直しの時、白鳥山の杉の木を切って小林から栗野を通って浜之市に運び浜之市から舟出していますから。だから――

小園 志布志じゃないのですか。

平田 浜之市から志布志の回るわけです。

小園 うーん。

平田 だから、このルートがあったということは確かだし。それから――

小園 それから、島津氏の山越えという記事も出て来るわけですね。高千穂かどれか判らんけど、武装した軍勢が鎧を着て山越えしたのは大変だったと思いますが、高千穂の麓、御池の中山のいわゆる荒襲街道を通ったのではないか。

平田 どこを通るわけかな。庄内に攻め込む時には、しょっちゅう往来するでしょう。あれは、霧島越えでしょうね。

小園 ひいき目ではなくて、『赫月記』という記録には「田口に宿す」とか「田口名」・「大窓名」を通って行くなどと載っています。それから伊東氏の軍勢が高原から侵入して霧島を占領したとかいう記事があります。

平田 なるほど。島津駅と大隅国府を結ぶ最短距離はこれに間違いないと思います。ただし、夷守を通った方の肥後とのルートでね、夷守駅から入って来たとなったら栗野ルートも無視できないということだね。

小園 その場合ですよね、「わざわざ」と宮崎県の人たちは云うわけ。わざわざそう云った迂回路をとらなくとも、直線があるじゃないかというわけ。宮崎県史を書かれる日高さんもそういう説をとって

います。

平田 宮崎県の地形がよく判らないのだけど。

小園 やっぱり一回測ってみれば。島津庄に行くには相当距離があると思うけど。栗野・大口経由は一旦北上して、さらに下って来なければならない。島津駅から分かれるのでなくて、島津駅の北から分かれていますから。

平田 そうだね。だから――

小園 ちょっと無理があるんじゃないかな。

平田 日向国府は西都あたりでしょう。西都からずっと大淀川の上流に来て夷守駅に行くのと、それから都城に行くのと似たような距離だと思うのだけどね。そして島津駅は敷仁駅:志布志の方とつながる駅路である。それで、どの時代に霧島越えがあつたかということを抑えなければいけないと思う。

松田 大水というのを、オオムツと読む?

平田 そのように仮名が振ってあります。

松田 オオムツと仮名が振ってあって、大口でしたっけ?

平田 古くから、大口説はあります。

小園 大口説は大体否定的になっていますな。

平田 離れているからね。むしろ栗野の方が。

小園 夷守から栗野に出て行くというルートと云うのでしょう。そうであれば、もう少し適切な、例えば駅の名前がもう一つぐらいあっても。

平田 栗野と国分の距離はちょっと遠すぎるのでね。

小園 それとな、国分から栗野に行くには、どう行ったらいいのですか。一旦加治木に出るかな。国分から牧園へ上って行く道かな。

花園 近道はそうでしょうね。国道 223号線ですか。

平田 いやいや、石清水文書に記録があるのでよ。あそこにして来る。宮坂麓という地名があって

ね、石肺神社があるでしょう。そして女子大へ登る道がある。そして十三塚原へ出て北へ登る道があるわけです。

小園 川沿いに出る？

平田 これは石清水八幡文書に地名が出て来るし十三塚原は宇佐八幡の神人が鹿児島神宮を焼き打ちに来て、追いかけられて切られたという伝説のルートがあるからね。あれは、いわゆる天降川沿いではなかったということだね。

小園 だから、蒲生から国分に行くにも道がはっきりしないのですよ。今の住吉池の下を通って、山際を通ってですね、木田に出たのじゃないか。そして上るところは、日木山の坂があるでしょう。加治木坂がね。登りきったところに丁度脇道がある。その道を今度は小浜の方に降りる。

平田 やっぱり、小浜を通るのだろうか。

小園 小浜小学校の近くに出る道。そして、小田越えて行ったんじゃないかな、と。

平田 海岸沿いの道を考え易いけど、海の場合は昔は舟を利用しただろうからね。昔の道というのは山を越えて行くはずですよね。

小園 だから小田越えて出で、そして何というかな、表の方じゃなくて裏の方から。

平田 古道を探るという仕事は大事だから、民俗学的にいわゆる塞之神を追求していくとかね、そういった分布図を作るとか、それから泉がどこにあるとか、神社の存在とか、そう云ったものをきちんと調べることも大事な仕事だろうな。

小園 蒲生の場合、駅が蒲生にあったと云いますが、蒲生のどこにあったかことになるともう全然判らないわけです。何か探しをいれるためには地域の中心になる水運とか、あるいは今云った神社信仰とか、または蒲生氏の祖先がそこに土着したというようなことを突っ込んでいけば、やがてしばられて来るんじゃないかなと思うのですが。

平田 蒲生の場合は？

小園 あいまいなんですよ。

平田 御仮屋跡とか八幡の下に小学校があるでしょう。あの近辺だよ。

小園 近辺だとは思いますけど。

花園 駅鉢というのがありますね。国分では府中から駅鉢が出たというのが国分郷土史に出ています。私もまだ実物を見ていないのですが、鏡橋さんとかいう人だったですかね。

小園 持っているというのですね。

花園 その辺は確認していないので、はっきりは云えませんが。

平田 案外古いものを持っているね。

小園 国分は掘ればいろんなものが出て来るのでしょうけど。台明寺あたりも、もう少し本格的に調査をすれば立派なものが出て来る可能性があるのであります。日枝神社近辺に遺跡があるはずです。地名を探った場合、はっきり出て来ます。国分はそう云った史跡が多い所です。新聞に文化課を作ったらどうですかと云ったけど。

平田 それはそうだ、大事なことだもんね。

小原 そう云った話はあったのですよ。立消えになってしまって。社会教育課の中だと、うまく活動できないということなんですが。

平田 他にありませんか。

小川 私は小園先生の説に賛成します。5~6年前に此處を通ったことがあります。逆の方向にですが、気色の森から止上を経て、宇都に出てですね。それから東の方に行って、赤坂、それから夏木ですね。そして財部まで通ってみて、島津駅から国分への最短きよりだなと思って体験したんですがね。二・三の疑問の点があるのですが。この赤坂は長門本を読んだところでは、止上・赤坂・気色の森に着きたもう、というようになっていたように思うのです。

小園 そうです。その通りです。琵琶法師が、盲法師が暗記しているわけですから、そこは間違って書写された、ということでしょう。地形上明らかな間違いですから。

小川 書写の間違いだと思っちゃおるんですが、どうも赤坂が。行ってみれば止上と気色の森の中間にないのですよね、いくら探しても。やっぱり上の赤坂だろうと思って行ってみたんですが、あすこの人たちはアカサカとは云わないのです。アカサコ。

小園 アカサコと云いますよね。

小川 アカサコ、これはどう解釈すればよいか。

小園 正式には赤坂ですよね。

小川 こっちの方言ですかね。行ってみて、アカサコというので、びっくりしました。

小園 道がカマツッ（竪土？）の赤い坂が続くんですよね。

小川 ああ、そうですか。ははあ。

小園 現在は杉山を切りまして、新しい道路が出来ましたが、昔の坂道は赤土でした。

小川 それからこの夏木ですがね。これが長門本では夏影となっている。夏影と夏木がどうして同じものかという点が私には判らないのですが。同じ意味かという点が。夏影という地名はあっちこっちにあるわけです。草牟田にもありますから。

小園 あれは、夏——

平田 夏蔭。

小園 夏蔭城といわれますが。

平田 夏でも蔭になっているから。そういうこと

小川 夏影は夏木と同じ意味かも知れんですね。

小園 影と木と、字を間違うはずはないのですが夏影が夏樹に変わり、そして夏木となったのではないかなど推定しておりますが。大川原が大水駅に間違いないだろうと思うのは、此處は水が年中渴れることなく草がよく茂っていますから、馬の飼葉とかそう云ったものに不便はないと思います。此處

だけですね、水が流れているのは。

小川 それから水と川という字が草書体で書くと同じだということ。ちょっとそこに書いて頂けませんか。

小園 いやー。（笑い）。それは、専門じゃないので。漢字のそう云った辞典では同じですね。大体川・水というのはこんなふうに略します。大体同じ字体になります。

小川 判りました。どうも意味が判らずにですねなるほど。

浜崎 そう云われてみると、同じですね。

小園 古語辞典の、よみ・略字でも出て来ます。五体字典にも載っています。そうだと推定しますが

小川 はい、判りました。

納 寒川・寒水と書いて、ソウズと読むのがありますが、水もズと読む場合が——

小園 ズと読みますね。手水鉢(ちょうせき)などはそうですね。

平田 今、寒水(わき)が出て来たけど、ソウズというのは筧(おの)から水をやって大きな音をだす猪おどしがありますね。あれをソウズというのです。あれは僧都という位の坊さんが発明したのでソウズというのだけど、各地にあります。寒水という地名が鹿児島県には沢山ありますけど、それを俊寛僧都と結びつけて、俊寛僧都が来たのだ、という伝承が生まれています。

小園 なるほどね。

平田 阿久根にも、ここで俊寛僧都が死んだとかいう話が伝っている。

小園 丹後局と同じですね。お座りなった、と。

青柳 長門本の時代のことですけど、何故そんな地名が出て来るかというと、語っていた人たちが九州の方で活躍していて、それで地名を取りこんだというふうには考えられないのですか。だから、そう時代を過らないというか——

小園 古典大系本の記述ですが、鹿ヶ谷の変のことは詳しく書いてある。どれもこれも同じなんです。長門本もその点は全く同じなんです。ところが流罪のことになると、ぶつかり切れてしまうのですね。すぐ鬼界ヶ島とか硫黄島とかの記述に入ってしまいますね。その間のいわゆるつなぎをするのが長門本でして、時代的にはやっぱり鎌倉時代だと思います。まぁ、室町時代とか後の者が書いたものじゃない。写しはずーっと写されて来ますけど、写本はですね、時代的には鎌倉時代のことだというのを間違いないと思うのですけ。霧島の火山の様子とかですね、そう云ったことも詳しく書いてありますし、今おっしゃった西の方のことも書いてあったんじゃないかと思いますけど。それがどうしたわけか切れてしまったのですね。それで新しく付け加えたのか、それは判りませんけど。何故か古典大系本も源平盛衰記もあそこだけは省略されています。

平田 省略してあるのは九州のことがよく判らなかったのだろう。

小園 すぐ鬼界ヶ島のことが書いてありますね何故なのか。

青柳 それはやっぱり、付け加えたと考えるのが小園 これをですか。

青柳 はい。
小園 でも、まぁ、そうですね。写本の最初の原本になるのは、いつのものかということですから。写本でずーっと写していくわけですから、最初に載っておる原本を書写したとみれば間違いないと考えればよろしいんじゃないでしょうかね。後から付け加えて、鹿児島の人たちのために便利なようにというわけにはいかんでしょうし。

小川 平家物語も二通りあって、まず琵琶法師が語る語り物ですね。そして文学として読むものと、二通りあるわけです。長門本なんかは文学の方ですからね。そういう違いは出て来ますけどね。

平田 はい、今日はこれで終りますが、三月の例会は長く顔を出していない江之口さんにして連絡をとっています。六月例会は、われと思わん人は申し出て下さい。青柳さんあたりはどうかな?遠慮なく。

それから、こんな話があるのです。来年は丁度十周年になります。それで、会報のような形ではなくちょっとした研究誌を考えたらという意見があるのです。この会は金はありませんが、ワープロで千字ぐらいまたは二千字ぐらいだと、1~2ページに収まりますし、ある程度ワープロで打った原稿を表裏にして版下を作ってもらい、それを集めて印刷すれば、どんなに高くて一冊数百円で出来るだろうと思いません。そんなことを企画してもよろしいでしょうか。

小川 やって下さい。

平田 現在、私は俳句雑誌に1ページ分書いていますが、あれが千字です。二千字では2ページぐらいにまとめられますから、そう云ったふうにワープロで打ったものを集めたら、年1回、そう云ったのが出来るだろうと思います。それから、小川先生は今までだいぶ論文を書いておられると思うのですが古い論文を時々コピーで複数の形で一つ一つ出してもらったら一つのまとまりが出来るのではないかかなと思いますので、今までの論文を提出して頂けませんか。そうしたら、いい会誌が出来るのではないかと思うのですが。来年あたりからそんなことを企画してみます。皆さんもそれぞれ思い切って1~2ページに限らず4ページでも6ページでも書いてみて下さい。よろしくお願ひします。

大隅國の古代官道について

昭3年12月1日

地名研究会発表史料

発表者 1. 園之雄

逃竄

卷之二

兵部

凡諸國驛馬舍家及舖設等帳。每年帳計倉。若有少一賈者隨即返帳。

凡犯後兩二重牧馬。若有起群者追上。餘犯人卒兵馬及當

國他國等傳馬。(後略)

諸國等傳馬
大陽國驛馬各五疋水
薩摩國等馬布來足橋御津田後

傳馬中來某橋綱請

凡諸國驛家。今國郡司事奉。其名每年附帳中上。其私
行人停宿。公使銀名中上。自餘量事付次。若事
當官可及。馬長等。有計合。處事付。諸國等。不得買用。私馬

①

卷之六

回
今
之
事

四

（三）聯合布署，統一行動。

凡給馬者，一曰作「余傳竹」，二曰「余傳竹枝」，事連者。一日「十驛」之上。
每驛有八驛，是日亦是者。八驛之下謂空驛之上。傳以二驛者，皆是故也。見
王本二云：「驛余傳竹枝」。三後之「驛竹」，「余傳竹枝」。四後「驛竹」，「余傳竹十三
復前。」

卷之三 調節者所舍也

凡諸道須置軍，每州一處，若地勢阻險及無水草處，隨之而安寧。不設軍數，其有貢乃取其數，各准戶軍馬數佈

集解一言其性一體子和「脩己」。解子「加積中行」，「中行化」。新一月同「脩己」。

凡驛各選長一人。取署印，印之。一毫無私。

12

解數序

(3)

凡諸道，一馬一丈（謂小馬通其大室）步正。中路謂東南之道，其外皆皆路也。平正、小路五正、使梯上焉，可量也。不必直足，留取其財，貴壯者尤。每馬各分中，广禁制。若馬有脚，步者，取即以少驛出，謂驛也。市者，其傳馬也。每節步五，皆用官馬，謂之軍馬，馬之役使也。其馬之役使者，以步者從官物，一宋苑。通取之，官禁下，謂之驛馬。故不以取家事。至其傳者，付之今者，以步者之送，則無失也。

(2)

伏窓) 滝の経路 (平成物語本)

京都

播磨國福原 (神門兵庫近傍原)

備中國瀬尾の瀧 (岡山市瀬尾)

" " 井 (")

伊豫國重畠 (豊姓朱?)

讃岐國三河サキ (佐賀山甲)

豐後國米永の瀧 (大分県南薩摩郡米水津村)

但馬國多々八の瀧 (小松の瀧)

" やす山坂

寧野 (宮崎市鏡原町)

船引 (宮崎縣諸県貢船引)

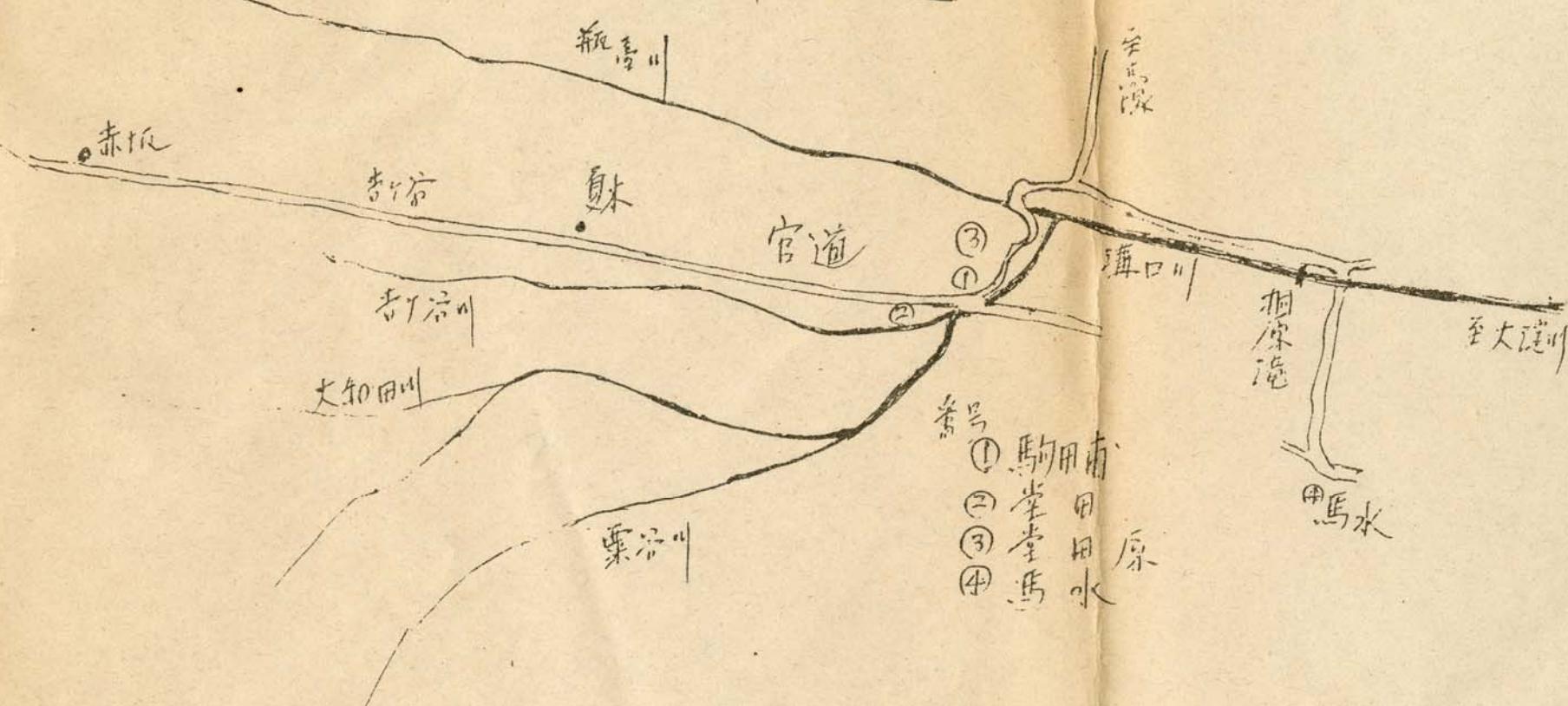
大山

斯津駿(郡城) 駿毛)

④

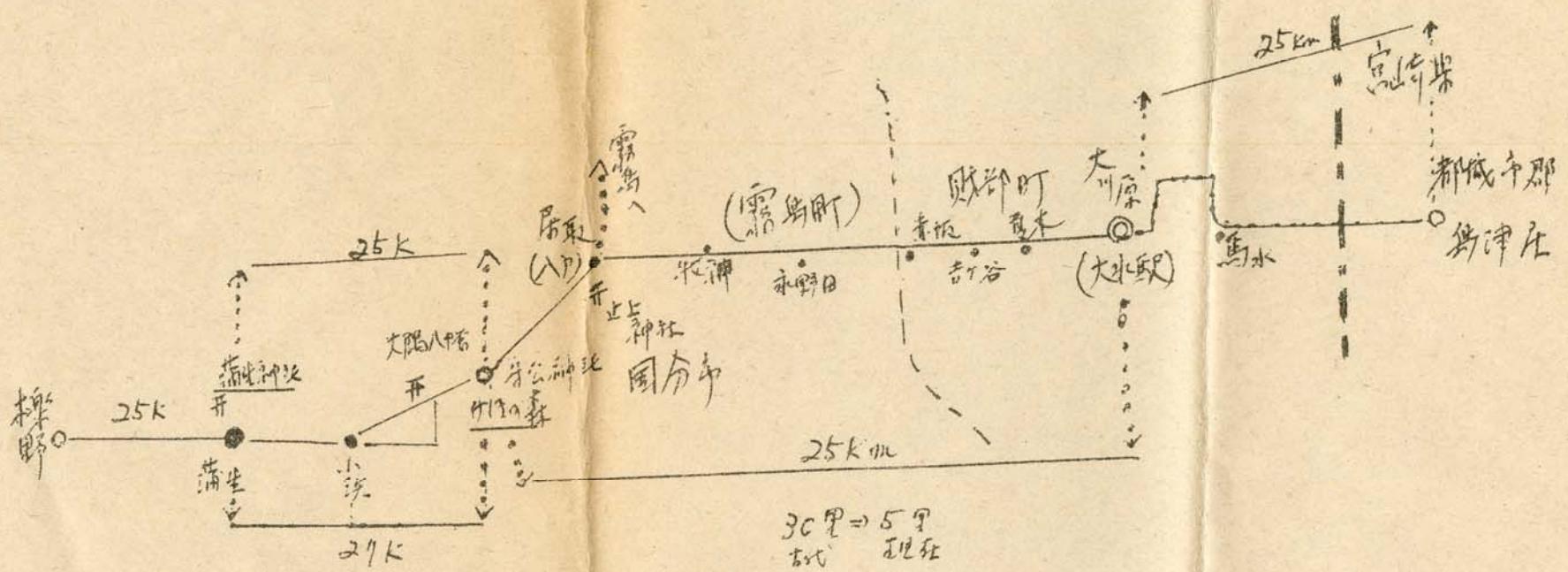
曾於郡 賤部町下財部

大川原付近



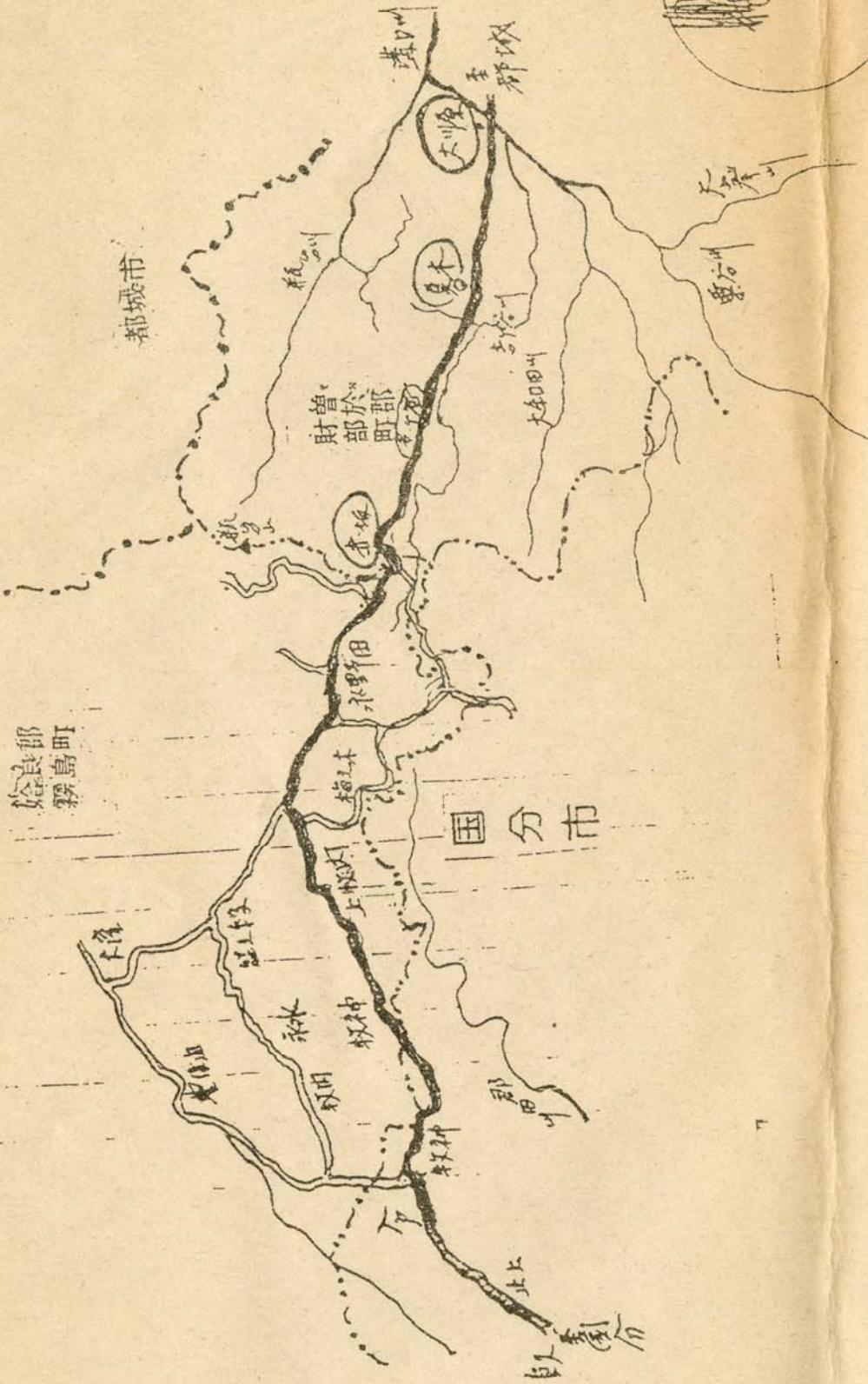
(3)

太陽官道実測圖



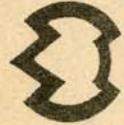
古文書考叢

景奇山



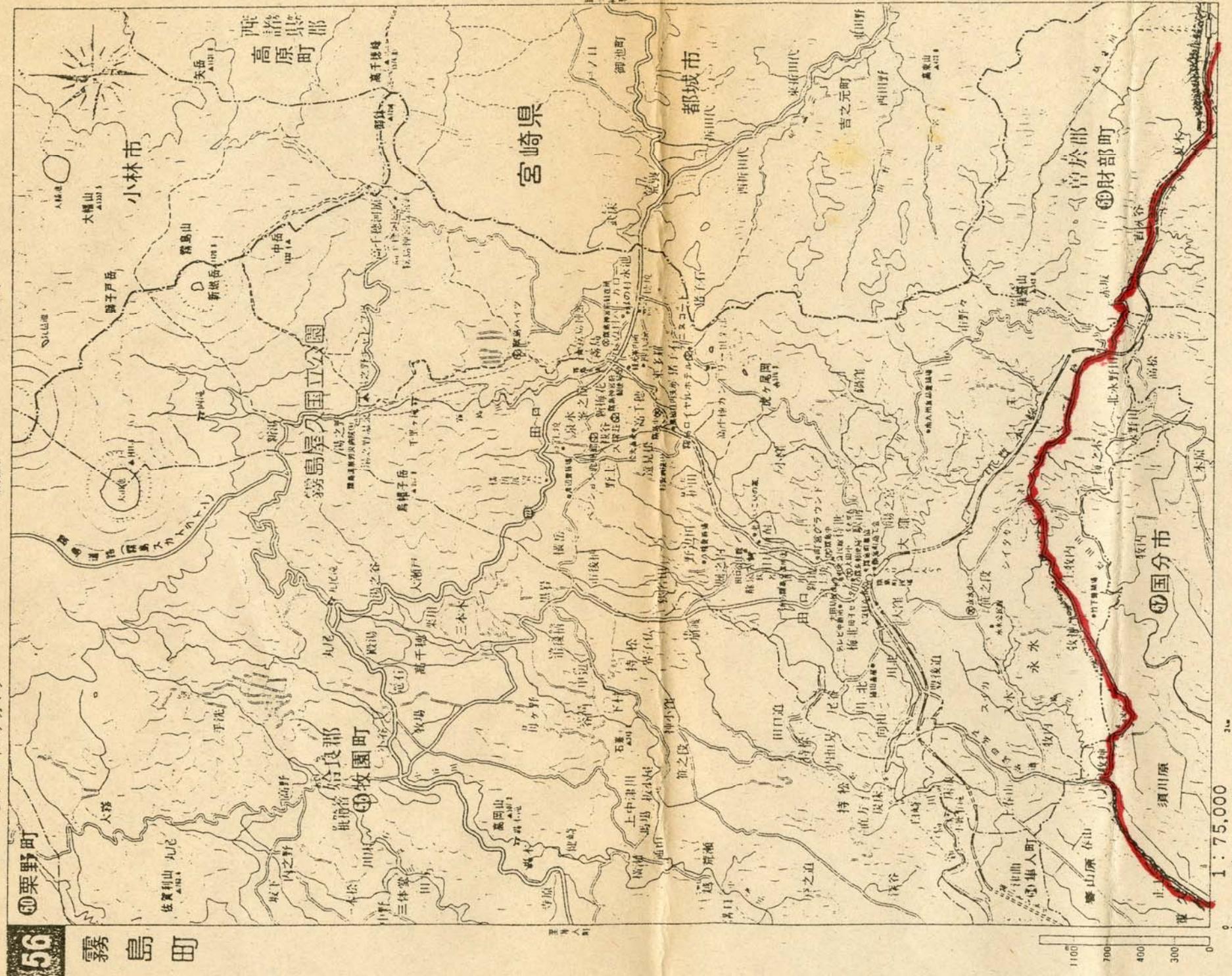
もこの官道の存在を旨
本山より
藤原御所から太陽院へ
の官道へと繋がる。柳原
より御室御所へ、西へ
は御室(御内中)子守(子
守而て、休む事無し)
・太陽院から日向院
への官道(ルート)につ
いては全く日本書紀等
の文、二に藤門本守が
物語れど亦存る。御室御
室御所から古見御所へ
すれ過るゝ也、太田原
方面移るゝ也、大河原
水取門跡、久松、
御守代等。

島町



● 田 霧島 後 89942
始良郡霧島町田口8番地
TEL(0995)57-1111
■ 人 口 35km²
■ 住 括弧内は196世帯、総人口6,083
■ 通 告 1月3日
■ 行政 令和3年11月3日
■ 購買品 朝市、イカ、豚肉、和牛、焼肉
■ 休日 ミヤマキリ、ミヤマツバキ
■ お花 一木

霧島町



地名研究会報

第36号

平成4年12月13日

鹿児島地名研究会

I. 第36回例会 平成4年3月1日(日)

(出席者) 青柳俊二・池田信夫・江之口沢生・大田照夫・小川亥三郎・納栄蔵・小野寺伸子・

梶原武・桐野利彦・小園公雄・佐野武則・長谷川順一・花園正志・肥後芳尚・

平田信芳・二見剛史・松浪由安・村上良典 (計18名)

II. 豊藩名勝考読会 P.117 ~ P.121

(問題となった地名および事項) 大棟識・姫城浦・聚集院・曾於乃石城・国分七隈と隼人七城・

山号院号寺号・めぐりの里・日吉山王社・宮之浦

大棟識

平田 この例会はあまり雨は降らないのですが、今迄に雨が降ったのは2回か3回。ちょうど3回目ぐらいですかね。今日ははるばる大阪の高槻市から江之口さんに来てもらいましたので、雨が降ったのかも知れません。

一番最後の「大棟識」というもの。これはなんと読むの? 124ページの下の段、「棟札に曰く、修復の時の大棟識なるべし」と。

小園 棟札のことだろうな。

平田 棟札のことだろうけどね。

小園 幢(のゆ)かと思ったけどね。

平田 幢(のゆ)? 幢(ゆ)?

小園 上の文に、棟札に曰くだからね。

平田 棟札のことでしょうね。

姫城浦

平田 納さん。姫城浦は今日読んだところで納得ですね。前回問題になったことですが。

納 これで少し、なんとか判って来ました。

平田 ここでは「川のことを浦」と表現しております。

小園 「浦は前浜なるべし」やはり浜ですね。

平田 川岸でも浜というたのでしょうね。

小園 浦は前浜なるべし、と書いてありますね。どうなんですか。海に接近してたんですかね。河口的な所だったのですかね。

平田 繩文・弥生の頃なら河口だろうけどね。その頃はもう川でしょうから。前之川を前之浦ともいうと云うことでしょう。この文章からは。

小園 大津川?

納 鹿屋市に、あれはどう見ても近くに海はないのですね、浦という所があるんですよ。今は、大浦と云いますがね。昔は浦・郷之原と云いよったのですよ。郷之原と浦を合併して、今は大浦町と云っています。ちょうど、鹿屋航空隊の下の方です。

小園 吉田の宮之浦と同じですね。

平田 同じ用法で、先端地という意味。

小園 前回もウラは話題になりましたよね。これは平家物語にも出て来ます。姫城浦というのが。

平田 ああ、そうですか。長門本に?

小園 ええ。

聚集院 平田 122ページの上段の後から2行目に竹林山聚集院という山号と院号があります。台明寺の名前ですが、これに一番近いのが伊集院という呼び名ですね。

伊集院はイスの木があった倉院：イス院か伊集院に訛ったと云ってるんですけれども、聚集院と同様な伊集院という呼び名を考えるのも面白い。そうした場合の伊集院の意味は判りませんが、お寺の名前くさいですね。

小園 霧島神宮の話ですが、江戸時代には山伏連中がいて、それぞれ住居を院と号しているんです。だから伊集院のいわゆる倉院とは違うのじゃないかと思うのです。

平田 ああ、そう。聚集院という名称からみると伊集院はこれに近いなということです。それとその次の勅願の定額寺ということ。「定額寺があることを聞かず」とありますが、定額寺というのは非常に格式の高い寺です。鹿児島県にあったのかなと思います。もしあつたとすれば、坊津の一乗院ぐらいかなと思っていますが。

小園 台名寺の人たちが、税所氏の土地の侵入とか妨害とかを沢山記録しています。台明寺の方では国府の勅願所であると云っています。国の安定を願う寺である、と。国というのは大隅国ですね。それからまた国家のですね。そう云った勅願所であると云っています。

平田 大隅国の大御所であったかも知れんけど。ここで云いたいのは、定額寺というのは非常に格式の高い寺だということ。国に一つあるか、ないか。日本全国でも60くらいありますかね。続日本紀などを読んでいますと、国分寺が焼けたり無くなったりする時があるのですが、その時には定額寺をもって国分寺に代えろという命令が出ますから、国分寺に次いで国家的な保護を受けていた寺、それが定額寺である。勅願の定額寺、それほどまで格が高かったのか。あまり格は高くなかったのじゃないか。

小園 平安末期に正八幡宮に来ました行賢というのがありますね。いわゆる執印なんですが、執印の行賢が止上神社と台明寺に土地を寄進しています。

それが仏法興隆の基としてとなっていますから、ある程度由緒のあるお寺じゃないですかね。

平田 それは判りますよ。しかし定額寺というほどのランクじゃないということです。定額寺というのは相当レベルが上で、薩摩国・大隅国にはあったかないかという寺。

二見 勅願所と勅願所は違うのですか。これには勅願所あります。

平田 勅願所？「天智天皇自らの願いによって勅願所」。ああ、これは勅願所で勅願所じゃないな。定額寺とは違う。

二見 これは字の通りでしょうね。

平田 そうでしょうね。

小園 まあ、大隅国が出来る以前の話ですから。あんまり水をさすといかんけれども。

江之口 古い時代の鹿児島の場合はまあ箱付けが多いので。例えば冠嶽も徐福でしたっけ。何か伝承もあるみたいです。後からの付合が多いようです。とくに大隅国の場合正八幡宮があって、神造島の物語が続日本紀に出て来ますが、これが宇佐宮縁起にとりこまれているんですね。神の靈験という形で入っているみたいです。中世以前のことは、それが歴史なのか、寺の縁起なのかの区別がはっきりしないので、あまり本気に考えなくてもいいのじゃないかと思いますけど。

平田 はい、判りました。

曾於乃石城

小園 121ページの真ん中、7行目に「兩城、曾於の名城」とありますが、これを「石城」と云いましたが、どうしてですか。名城ではいけないので。

比壳の城というの名城だったと思うのですが。

平田 隼人七城のうち、石城と比壳の城が最後まで抵抗して落ちなかったので、いろんな芸当をやって見せて隼人たちを油断させたわけですね。隼人たちが面白がってそれを見に降りて来たのを斬った

という話があります。曾於の石城と比壳の城が最後まで抵抗したというのは、宇佐八幡託宣集にあるのです。だから、名城は石城の誤字だと思います。

小園 二カ所、名城がありましたね。

平田 二カ所とも誤字だと思います。曾於の石城の最も有力な比定地が国分城山です。これを隼人城とも云いました。

小園 隼人城。国分高校の上ですね。

平田 そうです。

小園 それが石城ですね。比壳の城は相向かいの国司獄にあったと云われている。

平田 そうです。

国分七隈と隼人七城

花園 『隼人町郷土誌』を読みますと、熊襲との関連で「七隈」というのが出て来ます。その七隈と今出て来た「隼人七城」、これとが何かごっちゃになってるのじゃないかと思うのですが、その辺はどうなんですか？

平田 それは私も判りませんが、そういう発想は先生が初めてじゃないでしょうか。七隈と七城。それは面白いかも知れんですね。

山号・院号・寺号

納 お寺の名前をいうのに、普通は〇〇山〇〇寺と云いますね。これが〇〇山〇〇院〇〇寺となってたり、〇〇寺〇〇院としてあったり、院と寺が、上・下ひっくり返っているのがあります。あれは、何かの都合なんでしょうかね。

平田 小園先生、どうでしょうか？

小園 私は文書にただ忠実に従っているだけでして。

花園 普通は山号・院号・寺号の順序になるのではないかでしょうか。

小園 そうですの、山・院・寺の順。

納 そうすると、山と寺の間に院が入るわけですね。たまに院が下に来ているのがあります。〇〇寺

〇〇院というのが。何でこうなった一考かいと思いつながら、いろんなものを見ているのですが。

池田 普通は山・寺・院。房もありますね。〇〇山〇〇寺〇〇院〇〇房という。私は今までそのように思っていたのですが。それにまた、庵というのがありますね。〇〇庵。

平田 なるほど。

池田 院・房・庵といいます。どっちが上か私は判りませんが。私たちは〇〇山〇〇寺〇〇院、あるいは〇〇房〇〇庵というぐあいに思っているのです。

平田 ああ、『川内の古寺院』を調べられた結果ですね。

池田 それを知らずにやったのですが、どっちが上かを知らずに。

平田 数多く実例にあたっていれば、そのうちに結論が出るでしょう。

めぐりの里

平田 それから、さっき細川幽斎の「国をめぐりの里に来て」という歌を見て、これは歌枕的な用法だなと思いましたが、「めぐり」は歌枕にはならなかったようです。

日吉山王社

小園 122ページの3行目に、日吉山王と出て来ますね。この日吉山王の所が、本来の台明寺だと考えられます。今の台明寺は新しく出来たものですから。日吉山王の敷地のいわゆる「宇」を当てるみると、ほとんどが寺院に関するものです。例えば、蓮華堂とか。この日吉山王と台明寺は、いわゆる仏家神道というのですかね、何か神仏混着のにおいがしますね。

平田 ああ。

小園 日吉山王：日吉神社が台明寺の本殿があった所だと考えて、論じているわけですけど。

平田 肥後先生、どうですか。122ページの上の段にある「屋久の杉材にて昔時名匠一の鉈に以って造立

たり」ということ。あの日吉山王の造りは、内部を見ればしっかりしてますよね。

小園 先生が鉢造りとおっしゃったのですかね。

平田 うんにゃ。

小園 えーと、あの神殿の各間取り。あれは北辰との関係?

平田 ああ、それは、七間二間という造り。国分高校の生徒たちが二年がかりで実測したのですが、報告書を出さなければいけないのだけど、僕が寝込んでしまって、まだ出していません。

小園 社壇は一の鉢を以って作ったというですからね。これには、そう書いてありますね。

平田 それは名工が作ったという意味でしょう。

肥後 そうですよね。

小園 鉢彫というのが流行したこともある。

肥後 彫刻も一杯ありますしね。

平田 あの建物はすごい。しかし、あんまり素晴らしいと宣伝して、わあーっと押しかけられて俗っぽくなってしまってもいけないし。日本で一つしかない建物ですね、あれは。

宮之浦

花園 一つお尋ねしたいのですが、式内社の宮浦神社ですね、この宮は何ですか?

江之口 宮浦というのは要するに一つの宮があって、その浦だと。そういうふうに純粹に考えるのですけど。桜島とか海神宮とか、そういうものを祀ったのでしょうか。以前からちょっとひっかかるってはいました。

平田 ああ、何の宮かということね。

江之口 おかしいですよね。名前の付け方がね。「宮浦宮」となりますからね。そして、宮があればその宮が式内社にならなかったというのが、どうしてか。あるいは入っていたかも知れませんけど、鹿児島の場合は。

平田 この宮浦神社は式内社に入っているだろ。

江之口 入っているのだけど。

青柳 宮之浦神社は吉田町にもありますよね。

平田 ああ、そういう意味か。

青柳 下田から川上に入って、ちょうど吉田町との境界の所。どっちのことを云ってるのだろうかと思うんですけど。

小園 吉田に比べたら、こっちの方が海に近いから。海神との関係でしょうね。

平田 そう云われてみると、説明のしようがないな。まぁ、お宮がある海岸ということ。お宮がある浦。それが宮浦になるんでしょうけど。だから宮浦なんて名前はあちこちにあってもいいはずだけど、実際にはない。そこで、何故か、ということなんでしょうが。これを解決するには、全国の「宮」地名を拾いあげなければ、しょうがないよね。

小園 宮浦神社を拾いあげてみて、海との関係とかいうのを調べてみたら。

平田 全国の「宮」という地名を拾いあげて、それがどんな意味かということを探る以外にないんじゃないかな。普通名詞的な云い方だったら、宮之前とか宮之後とか、そう云った地名は多いのだけども、この宮浦が、宮がある普通名詞的なもので、しかも神社と結び付いているのは不思議じゃないかということですね。宮之前神社とか宮之後神社ということはあり得ないだろうということ。

小園 福山郷の総社と書いてありますから、中心的な神社ですね。

肥後 そうですね。

小川 屋久島の宮之浦という所に益救神社という式内社がありますね。柳田先生の説によると、文化の離れ・端のあるような所に、よく宮之浦という地名がある、と。そういうことを書いたのを見たことがあります。そういうことではないかな。

平田 全国の宮浦地名を拾いあげる以外にないな

小園 そうですね。そして、海の関係をね。

納 福山の宮浦神社の他に、屋久島の宮之浦にも宮之浦神社というのがあると記憶しているのですが屋久島の神社は、いうなれば海岸ばたにあるのですね。それでお宮のある浦というふうにとったのじゃなかろうかと思うのです。宮が先じゃなかろうか。

小園 浦宮というよりも——

納 お宮のある浦だ、ということ。

小園 浜辺だ、ということですね。

平田 だからさっき云ったように、鹿児島県だけでなく他の県にもあり得ると思うのですね。それをつかむ以外にないのじゃないかな、突破口は。

再び七隈

二見 さっきの七隈はどうなったのですか?

平田 いや、判らないから、それは新しい発想ですね、と申しあげた。

花園 「隈」というのを地名で探すと、国分一帯にはまだあるんですがね。星隈とか、笑隈とか。

平田 恋隈とか。

花園 そういうのが、他にもあるんですから。だから、熊襲と結びついたものじゃないかと考えてみたのですが。720年の大伴旅人の隼人征伐の時の七つの城と熊襲の話が結びついてしまったのではないか、と考えているのですが。

平田 それはどうか判りませんが。結局、七隈というのは国分・隼人地方にあったいわゆる伝承ですよね。それから隼人の七城については隼人の反乱を鎮圧した宇佐神宮の神官たちが記録を残しています。これは鎌倉時代にまとめられた記録ですが、その中に隼人が七つの城に拠って抵抗したという記事がある。これが隼人の七城です。したがって七つの城というのは、豊前國の方の伝承です。七隈というのはこちらの伝承。これが結びつくのではないかというのは面白い発想。もし結びついて、例えば曾於石城が○○隈になり、比売乃城が○○隈になるというふうに解決していけば、面白いと思います。

小園 この「隈」というのが地名なのか。あるいは熊襲集団のいわゆる部隊的なものを指すのか——

平田 地名ですよ。

小園 私は、そこに熊襲が集落を構えるとか何かそんなことなどと考えているのですけど。隼人征討の時に抵抗した七つの城と結びつくのかなと疑問に思います。というのは、大隅國の七つの城ないですかね。

平田 七つの城はどこにあるのか、まだ定説はありません。ただ牛屎があるから大口の牛屎が一番はっきりしそうだけね。しかし牛屎は国分の川内の奥の方にある。牛屎という地名がね。だから、牛屎院の牛屎とはいきなり結びつけられないわけです。その意味で花園先生の着想は面白いと思います。それから富隈は平山城ですね。えーと、あれは、隈崎。

花園 隈崎神社がありますね。

平田 隈崎神社がありますね。八幡崎は?獅子隈ですか。

花園 鹿児島神宮の南側になります。現在は隼人工業の所。

平田 隼人工業高校の所?

花園 そこは小高い丘でしたから。そこは、獅子隈。

平田 鹿児島神宮の裏側は?

花園 鹿児島神宮の北側の所が笑隈です。

平田 星隈は?

花園 府中の裏側の新町と、それから上井の方にもあります。両方あります。

平田 説は二通りあるのですか。

小川 「隈」というのは大概、山じゃないですか

花園 山だと思うんですが。

小川 隈というのとは「山」という意味があるのです。高隈山という。

平田 タカクマは沢山ありますね。鹿児島には。

小川 あれは桜島よりも高い。それと、大口に、また高熊山という所がある。これは円錐形の山ですが、西南戦争の時薩軍がたてこもって抵抗した所です。今でも掘れば弾丸が出て来ると云います。「クマ」という所は、大概、山の上です。もう一つ、山と山の間、山合いにも「クマ」という地名がある。人吉は、クマ地方ですね。それを判りやすくいうと谷をクマともいいます。それから川の曲った所を川曲、カワクマと云います。それから道の曲った所、道の隈、万葉集なんか出て来ますから。それと、大分県の日田に、三隈川という川があります。川のほどりに日隈、月隈、星隈という三つの独立した山があります。それを採って三隈川という。「クマ」にはいろいろな意味があるようです。佐賀県に七隈という所があります。ちょうど吉野ヶ里遺跡の側になります。その中に二つ三つは現地調査をしてみましたが、日隈という山、ちょっと奥深いのですが、昔は烽火台があった所です。本当は「火」ですね。fire. 火が起り。それから、飛の隈というのがありました。ちょうど伊佐郡との境あたり。そこに登ったら伊佐郡が一望に見えるのです。

佐野 川辺の一番高い山が、熊ヶ岳と云います。

平田 熊がいた可能性もあるな。

池田 大口のタカクマは、熊ですね。

平田 そうです。

池田 高隈山は、隈之城の「隈」ですね。

平田 全国から「隈」という地名を拾いあげて整理する必要があります。そうしたら、もっとはっきりするのじゃないでしょうか。誰かやってみませんか。じゃー、前半はこれくらいにして後半の江之口さんにお願いしましょう。

江之口沢生

はじめにちょっと資料の説明をします。『可愛山陵の「川内五説」について、要旨』というプリントにしたがって説明します。平田先生が配られたのがありますが、これは一番最初に作った資料です。

それからA4が2枚入っていますが、日付を打ってありますように平成2年9月2日の例会の時に配布してもらった資料です。私は参加できませんでしたが、配って頂くようにお願いしましたので、その

それから上に曲ったものが山です。下に曲ってくれば、谷みたいな所をクマと云います。クマにもいろいろな種類があると思います。

花園 地形から来た言葉ですね、クマというのは、

小園 それがクマソとの関係を示すものというのがはっきりすれば、クマソがどういう所に集落・共同体を組むか、それが判れば面白いと思うけど。

大田 鶴田町にヒシノキ山というのがありますがそこにも環状石があるのです。

平田 はぁ?

大田 現在、ゴルフ場が出来た所の北側の高い山ですけれども。ちょうど伊佐郡との境あたり。そこに登ったら伊佐郡が一望に見えるのです。

佐野 川辺の一番高い山が、熊ヶ岳と云います。

平田 熊がいた可能性もあるな。

池田 大口のタカクマは、熊ですね。

平田 そうです。

池田 高隈山は、隈之城の「隈」ですね。

平田 全国から「隈」という地名を拾いあげて整理する必要があります。そうしたら、もっとはっきりするのじゃないでしょうか。誰かやってみませんか。じゃー、前半はこれくらいにして後半の江之口さんにお願いしましょう。

の可愛山陵の見解」、それと(7)の「新田神社の祭神について」、この二点にしぼって話をしたいと思います。

可愛山陵の見解。どこにあったかということについては、いろいろな文献が書いてありますけれども、いろいろ複雑でこれをうまく整理した論文などはまだ出ていないと思います。可愛山陵が川合陵であったという見解も、私が知る限りにおいては、一昨年でしたか、鹿児島短期大学の小林先生がお書きになったものが唯一の論文だと思います。要するにあまりにも文献が多くすぎるものですから、その整理が出来ておらず、今日までそう云った指摘が行なわれていなかったのではないかと思います。従いまして江戸時代においては川合陵が可愛山陵であったという史実が指摘されたということで、ようやく可愛山陵の研究が始まった、と。私はこういう見方をしております。

それから白尾国柱も『神代三陵考』とか『寛藩名勝考』、それから『旧史官調』。これは、神代三陵取調書という別の題が付いています。これらが可愛山陵の研究史においては、一番の文献、質・量とも一番だろうと思うのですが。ところが、見解がそれぞれ違っております。しかし、何故そういう相違があるのかというようなことも、これまであまり指摘されていないように思います。そのことを解説することによって、可愛山陵の変遷史がある程度は判って来るのではないかと思います。それで(2)の国柱の可愛山陵の見解ということを簡単に説明しておきます。

『寛藩名勝考』をみると、白尾国柱は初めは新田神社の場所すなわち山頂が可愛山陵だと考えていたことが判ります。しかし以下の三つの点でその説を捨てて、結局はその当時においては端陵、国柱はこれを中陵と呼んでおりますが、そこに比定しております。それは何故かと云いますと、天書の中陵

という形状に合わないということが一つ。それから建長八年の文書。これは中腹にあった神社が、後に山頂に移るに先立っての占卜：うらないの時の文書なんですが、この文書に宇佐とか男山、いわゆる石清水が山頂にあるから、新田神社も山頂にあげるべきだというようなことが書いてあります。この中に山頂という表現が出て来ます。それで、これは、山陵であれば山陵と書くはずだ。それがないということは、山頂ではないと考えたわけです。

それから、ちょっと運動するのですけれども、現実は古墳というふうには見えない。端陵に関しては一度あがられた方はご存知のように、一部遺構が露出しております。当時も露出しておりました。それで結局は、白尾国柱は可愛山陵は端陵との見解をとることになるのです。

それから同じような見解を示しているのに後醍醐天皇がおります。後醍醐天皇は明治初年、これは明治二年に出来たということになっていますが、『神代三陵志』にそのように書いております。実はそれ以前、可愛山陵の部分については既に文政年間に書かれております。そして、それは平田篤胤の『古史徵』の中に収録されております。すなわち、『可愛山陵志』の中で山頂説を唱えております。現在刊本になっている『神代三陵志』とどの辺が違うかというと、(2)にポイントとしてあげてあります。文化年間に現在の中陵の松の木が倒れ中から石棺が発見されています。それが端陵だということになっております。そういう見解を最初にとっています。これは『寛藩名勝考』と同じです。それから文化二・三年の頃というような多少手をもたせた表現をしておりますが、現在刊本になっているものを見ると、文化三年に断定しております。それから古文書引用が少ないという違いがあります。以上が可愛山陵は新田神社の所にあるという説の概略です。

白尾国柱は、その後、その説を否定して端陵説を唱えますが、その次に書かれた『神代三陵取調帳』これは『地誌備考』では『旧史官調』という表題が付いています。私は専ら『旧史官調』というタイトルを使っております。これによりますと、若干ニュアンスが変ってきます。『斐藩名勝考』での中陵と端陵との位置関係は現在と變っているわけです。そして、全体図と云いますか、総体図を出した以外に、拡大図まで出しているのです。非常に自信をもって、いわゆる現在の端陵が中陵で、それが可愛山陵になります。それから現在の中陵が端陵というように、ちょっと違った呼称をしております。『斐藩名勝考』では、そういう拡大図まで出してかなり自信を示しているのですが、『神代三陵取調書』では『三国名勝団会』がとっている、いわゆる現在の表記に入れ代っております。しかも主張というのがどうも曖昧になって、川合陵もそれらしい、端陵も実際にあるし、中陵も文化三年に石棺が発見されたことでそれもそうだというように、非常に態度が曖昧になっております。

それから、これは一般に知られておりませんが、文化十二年に『三州神陵図』というのが書かれております。私はこれをいろいろ考えて、文化十二年と断定しました。調べてみると、これは『旧史官調』に付けられた図のようです。宮内庁書陵部とか京都大学が持っているようです。あまり知られておりませんが、見ていくと、どうも『旧史官調』に付けられた図で、これを見ると、当初白尾国柱が端陵と呼んでいた中陵、すなわち現在の中陵を可愛陵としております。こういう変化があります。

要するに、当初現在の端陵を主張していたのが、文化二年に中陵も古墳であると云いますか、御陵であることが判ったことによって、中陵を可愛山陵と主張するようになって来るわけです。すなわち新田神社と端陵の中間にあるということで、それが中陵

である。すなわち天書の中陵だと主張するようになって来ます。これは『三国名勝団会』の主張と全く同じになって来るわけです。これが白尾国柱の最終的結論であります。ですから、主張そのものは考え方そのものは、最終的には『三国名勝団会』と全く同じだと考えていいと思います。白尾国柱が『斐藩名勝考』を書いた当時には中陵が古墳であることがはっきり判らなかったので、そのために端陵を主張せざるを得なかった。そういうことだろうと思います。そういうことが、白尾国柱がとった可愛山陵に対する見解です。その他、社殿下説とか背後説とかいろいろありますが、省略します。

次に、可愛山陵と新田神社は密接な関係をもつて来るわけですが、新田神社がニニギノミコトを祀っていることの当否がどうなのかということについて少し話してみたいと思います。これが最も根幹に関わる問題だと思います。私が知る限りでは、いわゆる新田神社の祭神がニニギノミコトであるということについて、ちょっと奇異であると云いますが、変っているという指摘はありますか、それが正しいかどうかという指摘はほとんどなされていないように思います。

そこに三つの史料を出しておきました。建保二年それから宝治元年、建長八年。いわゆるポイントの史料として出しましたので、全体の流れはつかみにくいかと思います。もう一つ史料を回しますのでそれを見て頂きますと、ある程度、その三つの史料の位置をつかんで頂けるのではないかと思います。

まず建保二年の文書。これは文書というより新田宮縁起なんですけれども、これによって初めてニニギノミコト云々ということばが出て来ます。そこでそれ以前の文書で祭神が判る文書を並べてみます。付説Ⅱに並べた文書のうち、前の二つはちょっと判らないのですが、後はすべて八幡であることを示す文書です。そして、宝治元年(1247)の文書がありま

す。この時になります、初めて三所明神ならびに五神御体を以って新田宮となすというような表現が出て参ります。三所明神というのは八幡三所のことだろうと思います。それから、建長八年になって初めて新田神社文書の中にニニギノミコトが出て来るわけです。

私はこの一連の流れについて、次のように考えています。縁起が書かれる以前も、書かれてからなお暫くの間は新田神社は八幡神であったということ。それから縁起が書かれたことによって目に見えない変化が起こった。それが宝治元年の文書、すなわち三所明神ならびに五神御体という表現じゃなかろうかと思います。ニニギノミコトを祭神とするというような縁起が書かれたことで、それまで普通の八幡神であった新田神社が変化するにはそれなりの年月がかかった。それがこのような年月ではなかろうかとみております。しかし宝治元年の文書をみましても、すぐにはニニギノミコトというふうにはならない。五神御体というのは、ニニギノミコトが天降る時に一緒に連れ立って天降った神であって、ニニギノミコトそのものではないわけです。いわゆる関係者、多少、その匂いがする神様。それが、この宝治元年の文書である。それから十数年かかる、新田神社自身がニニギノミコトを主張するようになる。このような一連の流れがあったのではないかと思います。ニワトリが卵をあたためてかえるまで21日、三週間ですが、それだけの日数があるように、それまで八幡で来た新田神社が、縁起が書かれたことで変化を起こすにはやはりそれだけの年月が必要であったわけです。全体で五十年近くかかっている。それが、これらの文書ではなかろうか、と、思っているわけです。

それで、この縁起が書かれた背景について考えていることがあるのですが、それについてはちょっと時間がないので省略したいと思います。簡単に云い

ますと、当時既に端陵の遺跡が出ていたのではないか。しかし新田神社に具体的に伝承がないために、新田神社側も端陵の遺跡をどのように扱ったらいいか判らずに困っていた。その困っていた状態の中でこの縁起が書かれたことで、以後の新田神社の考え方方が変ってしまったのではないか。そういうことも考えているわけです。

以上、簡単に要点だけを申しました。判りづらかったと思いますが、あとは質問でカバーしたいと思います。五説と云いますが、一つの説を云うだけで一時間か二時間かかるわけで、ほとんど根拠の説明をカットしましたし、勝手な結論ばかり申しましたので、判りにくいかと思いますが、あとは補充質問でカバーさせてください。

それからもう一つ、あとから配ったプリントを説明します。これは右側に図が入っています。一般的には、三国名勝団会は名勝志の説をそのまま引用していると云われています。可愛山陵がどこであったかという見解については、この二つの文献は違っています。ですから、図も当然違うと想像されるわけですけれども、それがどこにあるのか判りませんでした。最近になって、鹿児島大学の付属図書館にあることを知りました。それこそ、帰って来る一週間ほど前にコピーが届きました。それに入れておきました。図は三国名勝団会と同じ形態になっていますが、みてみると貼紙がしてあって、その紙をはがしますと、いわゆる川合陵が可愛山陵になっております。それから可愛山陵という紙をはぎますと、その下には中陵というふうに書いてあります。以上で説明を終ります。

(質疑応答)

平田 非常に面白い問題提起ですね。初めて聞く話で、川内を知らない方は理解しにくい面があったでしょうから図を描きましょうね。(板書。川内市歴史資料館の長谷川順一さんが後日地図を作成して

送ってくれました。別添の地図になります。)えー、これが川内川。ここに新田神社がある。これが端陵、これが中陵になります。中陵と端陵については説によつてよばれ方が違うという説明でした。それから五代の方に行って、ここが表之浦川と高城川の合流点。それで、この辺だったかな。川合陵は?

江之口 ああ、こっちですね。手前ですね。

平田 ここが川合(かわい)陵。

池田 カワエ。

平田 カワエと読みますか?

池田 ええ、地名で云う時は、カワエと云つてゐるようですけど。

平田 ここは厳密にいうと、小字は水俣(みまた:みまた)になります。そして水俣の隣が川江。外川江。実は、私は長期間、外川江遺跡を発掘調査しましたからよく知つてゐるのですが。

長谷川 ああ、そういう書き方がしてあります。

平田 外川江遺跡から銅鏡が出土したのです。県立博物館に陳列してあるものです。工区の名称が外川江だったので遺跡名もそうなつたのですが、あとでしまつたと思いました。水俣遺跡と命名すれば良かったのに、と。外川江遺跡一帯は非常に広い遺跡で、ここにも何か遺跡くさいのがあるわけです。川合陵という云い方は、ここの山とこっちの山と、二つあるのかな。ここはどうなつてゐるの?

長谷川 そこは尾崎(おき)と云つてます。

平田 尾崎?

長谷川 陵とひっくるめて。

平田 そして、この山の向い側に、えーと、横岡古墳がある。

池田 横岡古墳ですね。

平田 ここに新田神社があるので、断面図を描くと、こうなるんですね。ここが端陵。

江之口 図を入れれば、よかったです。

平田 ここが中陵。こっちが現在云つてゐる可愛

陵になるわけですね。今日の江之口さんの説明は、可愛山陵は歴史的にみると、端陵を云つたり、中陵を云つたりしていたけれども、だんだん新田神社のある所にあがつて来るという、そういう説明です。そして新田神社の御祭神そのものも、最初は八幡神だったけれども、鎌倉時代に入ってニニギノミコトにすり變つた、と。ニニギノミコトを崇拜するのはこういう経緯だった、と。非常に面白い問題提起だと思います。

江之口 最初にこの図を出せばよかったです。そこに尾崎というのがありますが、これは文献によると、明王社と書いてあります。国柱の墳には既に明王社がどこにあるのか判らなくなつてゐるようですけれども。また川合陵の実体は五大院の本拠地ではなかつたかと私はみております。五大院と新田神社はいわゆる神仏混淆のコンビですから、恐らく五大院は新田神社の神官が僧侶を兼ねていたと思ひます。そうしたら、こっちの方も、もともとは関係がなかつたのではないかと思います。

それで、いわゆる可愛山陵というのは江戸時代においては川合陵だったのですけれども、縁起が書いたのはいわゆる端陵です。それは遺構が露見してゐたからそう断言したと思うのです。それが後にここは宮跡だという見解が示され、宮跡に墓があるのは不自然だということで、のちの川合陵に変つたのではないかと思ひます。その辺の時期が判りませんが慶長之役に際し、島津氏は無事帰れたということで新田神社を全面的に改修しますが、この中に川合陵を可愛陵として修復したような記録があります。棟札の中にあります。棟札は現在墨がかずれてもう字が見えないので、さいわいに『神社調』が明治の初めになされて、収録されております。それを見ますと、可愛陵は「カワイ陵」と出ております。これを「カワイ」と読むべきか、「エノ」と読むべきか、論が分れますか、まあ「可愛(え)陵」じゃな

いかと思います。これがいわゆる可愛陵=川合陵であったということの初見記事になるのだと思います。

平田 ところで、長谷川さん。あんた達は端陵を実測したのじゃないの?それで、前方後円墳ということを発表したとか。

長谷川 今日、資料をちょっと持つて来てはいるのですが。端陵の場合は、もう公けになつてゐると思います。福岡に柳沢一男さんという人がおられますが、端陵の実測図をもとに初現の古墳であると自信をもつて説明されているようです。われわれはいわゆる鍵穴型の前方後円墳という表現を使いますが、基本的なちゃんとした形が出来あがる以前の古墳の形ということです。

平田 そうしたら、時期も古いんじゃないの?

長谷川 そうですね。

平田 4世紀から3世紀?

長谷川 4世紀から3世紀にちかくいくような感じですけど。

江之口 船間島古墳と同じ形ということは断定出来ないですか?

長谷川 船間島古墳は、一応、円墳でした。古墳の形は。

平田 やっぱり円墳だった。

長谷川 ええ、それも測量を、もうちょっとセンターをどうか、等高線の幅を短くしていけば、という感じもします。そうすれば、もしかしたら前方部がどうられたかも知れません。

江之口 石室の形、構造の面でみれば、どうなんですか?

長谷川 船間島古墳?

江之口 と、さっきの。

長谷川 端陵の場合は、ちょっと板石が出ているだけですが、実際あったものの一部が見えてゐるのか、それとも完全に壊しちゃって一ヵ所に寄せ集めただけなのか、判断がつかないのです。

平田 端陵は登つたことがあるけど、中陵は登れないでしょう。

江之口 登れます。

平田 登れる?

池田 全部入れます。行けます。

平田 そうですか。

長谷川 中陵も、黎明館におられて現在文化課に帰られましたが、池畠耕一さんと一緒に歴史資料館の方で測量しました。今、岡山大学の近藤義郎先生が前方後円墳の集成をやっておられるのですが、その九州編がもうすぐ出るはずです。多分池畠さんが中陵についても書かれるのではないかと思います。今日、図面を持って来ましたけれども、これも前方後円墳みたいな感じです。この図面を見て、どうぞ云う人と、そうじゃない、全然判らんじゃないかと云う人がいるかも知れませんが、中陵の場合も前方後円墳の可能性はあると思います。

平田 川合陵は行ったことはないのだけど、あれは修復されていると、さっき説明されましたね。

江之口 この修復は文献上のことです。中陵と端陵は、文化十二年に石垣なんかを作つてやつてゐるみたいですけど。川合陵はそういうのではないですね。恐らくいわゆる川合陵は、神社の方だったと思いますが。

平田 川内を離れてからだいぶ経つてゐるので、どうなつてゐるのか判りませんが、横岡の対岸に権現岡とかいうこんもりした所がありました。あそこはどうなんですか?

長谷川 まんまるい岡ですよね。あの辺は高槻橋という橋があつたりで、周辺の聞き込みをやると、権現さあの近くから高杯が出たとか、高槻というのは塚なんだという話が出て來ます。横岡古墳の対岸であることを考えますと、非常に面白いなぁと思ひます。

平田 今後、川内で高塚古墳がまだ見つかるで

でしょうね。安養寺ヶ丘古墳などもやっぱり克明に実測することが必要でしょうね。

長谷川 実測しようとは思っていますけど。

平田 遠慮なく質問してください。わざわざ大阪から帰って来てもらったのですから。

池田 可愛山陵と川合陵とがよく混同されるとということですね、今の説明を聞いておると。可愛いと川が合うのと混同される、カアイとカワアイとが混同される、と。それから可愛はカアイですが、これを「エ」とも読むんですね。可愛はまた「埃」という字と混同されるのです。可愛には「エ」と書いてある絵図があったわけです。その点が混同されるのです。

江之口 新田神社縁起を見ますと、すべて可愛陵となっていて、山がないのです。日本書紀では可愛山陵、山が入るのです。新田神社の文書の中に、可愛陵は新田神社だという文書が七つか八つ出て来ますが、すべて可愛陵で「山」がありません。これは不思議だと思うのです。その意味では、新田神社縁起が後の世もそのまま引き継がれているということで、びっくりしているのです。というのは、仮に縁起にはそうあっても、後には日本書紀にあるから山陵となるはずなんです。ところが、そうなっていない。忠実と云いますか、いわゆる縁起がずっと後まで尾を引いていることに私は注目しているのです。

川合陵であり、可愛陵なんですね。これは科学的な証拠じゃないのですが、もし最初から可愛山陵が、いわゆる龜山の頂上にあったら、恐らく山が入って山陵となっていたのではないかと思っているわけです。これは端陵が可愛陵であったことを物語ると思うのです。端陵はいわゆる丘ですね。山というよりは、ずっと低い丘なんです。『神代三陵図』では、白尾国柱が二百間とか、何か大ぼらを吹いていますけど、実際は何メートルですかね。高さは。長谷川さん、端陵は何メートル?

長谷川 えーと、27~8 m. それぐらいです。

江之口 そういう丘ですから、山が入らなかったのじゃないかなとみています。可愛山陵端陵説の傍証というふうに考えているわけすけれども。それと、川合と可愛が後に混同して問題になるのですが川合陵説に対しては音が通じるにすぎない、と『覺藩名勝考』をはじめほとんどのものはこの説を否定しているのです。しかし実際は江戸時代においては皆、これなんです。もう一つ大事なのは、いわゆる明治7年7月の御裁可で、いわゆる現在の地が決まるわけですけれども、その当時においても新田神社では、川合陵を可愛山陵と考えていたということがいろいろな文献に書いてあります。そう云ったことも見過ごされていたんじゃないかと思います。

二見 三山陵は「山上」という字が書いてありますね。あれはどういうことですか?

平田 山上陵?

江之口 山上陵は、いわゆる溝辺の高屋と吾平ですよね。これは「上」が入っていません。

二見 いや、「上」が入っているのです。

江之口 可愛山陵は「上」は入っていないと思います。

二見 入っていないですか?

江之口 あの二陵に入っているのです。高屋山上陵、吾平山上陵。

二見 入っていない理由は?

松浪 子供の頃ですね。高屋山上陵(かやのやまのみさぎ)と聞いた時「やまのえのみさぎ」の「えの」と可愛山陵の「えの」と、ごちゃごちゃになって、何か言葉がぬけたり、何か関係があるのかなあ、と思っていたのですが。

江之口 最初のところに書いておきましたが、記紀が編纂される時期に既に明確じゃなかったと私は思っているわけです。そこに偉そうに可愛山陵の研究と書いていますが、いわゆる可愛山陵史の研究に

なると思うのです。ですから最初の可愛山陵がどこにあったかじゃなくて、川内の可愛山陵説がどのようにして出来たかということを調べているわけです。

高屋山陵なんかも、もとは内之浦にあったという説がありますけれども、あれもよく見ますと要するに神社なんですね。吾平山陵も全く一緒です。あれは神社としての位置づけは出来ても、山陵としての位置づけは出来ないみたいですね。ですから三山陵とも全く判らないというのが、現時点での私の見解です。

平田 三山陵は難しい。山陵と云ったり、山上陵と云ったり。いろいろ難しい用語を使っている。今日の話は面白い内容でした。

小園 ちょっとお尋ねします。普通、陵は古墳と関係がありますよね。薩摩国の方の前方後円墳あるいは円墳というのは、従来は認められていなかった。最近になって川内川流域にも古墳の存在ということで注目されるようになりました。今まで長島だけだと思っていましたが、川内にそう云ったのが知られるようになりました。今日の話では江戸時代から石榔が見付かったりしてゐるわけですね。発掘されたことはないですか? その結果、完全な古墳と確認されたものはないですか?

平田 いや、高塚古墳の発掘例はないですね。

小園 あそこは国営ですか?

平田 宮内庁の管轄だから、そう簡単には入って

いけません。

資料を十部ぐらいしか作りませんでしたので少し足りないかも知れません。薩摩国桜野駅について、

考えていることを話してみたいと思います。太宰府から薩摩国府・大隅国府・日向国府へと古代の駅伝路が回っていることは確かだと思うのです。薩摩国

行けない。
小園 それと、五説あるのですが、あとの一説はどこになるのですか?

江之口 西の方から川合陵。新田神社の説がいわゆる新田神社の社殿の下と、その後にある現在地という説、それと中陵、端陵で五つです。ちなみに、社殿の下というのも誤解だろうと思っています。というのは、そういう記録がないのです。嘉永三年に社殿の下から出たと云いますが、嘉永三年に修復された記録はありません。そこに資料を入れたと思いますが、えーと、文化じゃなくて嘉永ですね。嘉永の修復というのは、嘉永元年三月から嘉永二年四月まで行なわれております。しかし、嘉永三年に社殿の下からそういうのが発掘されたということから、それが社殿下説の一番最初になるのですね。『神代三陵志』のそういう説が『薩隅日地理纂考』に引かれます。『薩隅日地理纂考』『神代三陵志』を書いた人は同じ編纂者だったですから、恐らくその間でつながっていると考えられます。それ以外の説はないのです。この二つだけが社殿説を主張していますが、これは恐らく誤解だろうと思います。以上です。青柳さんが話をしたいということですから。

平田 どうもありがとうございました。青柳さんが桜野駅について考えておられることを話したいということです。資料が少ないのでお互いに見てください。

青柳俊二
府(川内)から大隅国府(国分)に回る駅伝路がどこを通っていたかということですけれども、一つは市比野を通って入来を通っていたということです。

それで、駅路の方から先に説明します。資料の2枚目ですが、肥後国の一一番最後のところ、佐職一

水俣一仁主。それは何と読むのですかね。また仁主という駅はどこにあるのかちょっと判らないのですが、佐賀（佐敷）と水俣は地名が残っています。

薩摩国に入って、市来一英都一網津一田後一株野一高来。大隅国は蒲生と大水。そういう駅ですね。それで、結局、順序通り読んでしまえばいいのじゃないかということを考えました。

それから肥後国は多分阿蘇にある二重駅を通って高千穂経由で日向に行く道があると思うのです。それを除いてあとはずっと通って来る、と考えるわけです。太宰府・御井・葛野・狩道。肥後国は佐賀・水俣・仁主と来て、それから薩摩国に入って市来・英都・網津・田後（田尻）・株野・高来。大隅国に入って蒲生・大水を経て日向国に入る。その逆に読んで考えてもいいわけです。島津・水俣・真研と通って日向國府のあたりで二つに分かれて一方は肥後國のさき云った道へ、一方は豊後國へ行く道というふうになっているんじゃなかろうかという想定をしてみました。今迄云われていることとはかなり違うというか、僕たちが聞いて来たことは少し違うようですが、問題提起として出してみます。

日本後紀、延暦二十三年三月条、「大隅國桑原郡蒲生駅、与薩摩國薩摩郡田後駅、相去遙遠。遞送艱苦、伏望置駅於薩摩郡株野村」について、私は従来の説ではなくて、川内から串木野を通って市来に出て、伊集院までは行かずに国道3号線あたりを通して、郡山というか鹿児島の小山田付近ですね。それから吉田町の宮之浦神社付近に向かい、それから大隅國府に出る道を考えていました。自分だけで考えることで、大体確信しているのですけど、これからも勉強して行きたいということです。その理由については一番先に書きました。

薩摩郡株野村と出て来ますが、村ということについては『隼人文化12号』に中村先生が「鹿児島

という地名についての一考察」という論文の中で、平安時代の「村」の性格を説明されています。私は「村」というのは薩摩国や大隅国では、後世「院」の中心になって行くようなものではないか。例えば伊集院とか溝家院、市来院、入来院など、「院」を形作って行くものになって行くのではないか、と考えてみました。郡とか郡の境界というのは大体変更されることがなく、江戸時代まで来ているのではないか、と考えてみました。

それともう一つ、花尾神社：花尾権現社の近くに「株野木場」という地名があることを付け加えておきます。

（質疑応答）

平田 前回の小園先生の「大隅國の駅路」以来、今度は薩摩国の方が刺激されて来たようです。今日も又「院」の話が出て来ましたが、今の話を聞いて鹿児島県の「院」とつく地名はいろいろな視点で考える必要があることを感じました。「院」は平安時代に倉院があったことに由来するのですが、駅家から発展して「院」になる可能性を考えてもいいなと思いました。北の方から山門院・莫祐院・市来院それから伊集院・禪答院。「院」をつないで見るのも面白い着想だと思います。

あと5分～10分ほど時間があります。薩摩国駅について青柳さんをサポートする意味においていろいろ思っていることを遠慮なくおっしゃってみてください。桐野先生は樋脇の方ですが、樋脇では株野駅をどの辺に考えているのですか。

桐野 それは知りません。どこだか知りません。私の家は、一応、市比野となっているのですけど知らないのですよ。（笑い）。つまり市比野に本家があってですね、その株をうちの親父が買ったんですよ。昔は株の売買があったもんですからね。私の家の本籍は塔之原にあります。昔はそうじゃったと親父がいけど、親父もそう云うだけで、あん

まりよう知らんのや。自分でその株を買うとなるのにね。市比野から株を買って桐野になったということですが、何のためにそういうことをしたのか。そういうことは判らんのですが。

平田 ああ、そうですか。

小園 延喜式の中に「駅」の規定がいろいろあります。馬にやる水の豊富な所、草の生えている所、三十里という規定以外であっても馬を養える所を選べという規定がありますから、やはり市比野の川の周辺。あの辺もいい場所じゃないかと思います。市比野から蒲生まで測れば約20Km。22～23Km。ですかね。

桐野 市比野のあの辺は、今でもそうですが、昔は田舎で何でもあったのではないですか。水もあるし、草もあった。（笑い）。ほんの田舎ですよ。だから、あの辺は駅を作るのに不自由はなかったと思うのですけど。

小園 私も「駅路」を発表したわけですが、今日発表された方は「株野」というテーマですから、市比野あたりをもう少し地理的に史料的に調べて頂ければ、非常に面白いと思うのです。というのは株野駅がどこにあるのか、まだ動いているわけですね。あそこを通ったんだろうか、今の県道沿いなのか。あれを真直ぐ行けば川内に行きますから、あのルートに間違いないわけだけど、本当にあれなのか、それから川内市でも「田後駅」の場所についての説がいろいろありますね。だから調べる方が、もう少しこまかい資料を出して下されば非常に面白い研究が出来あがると思います。

桐野 それでね、疑問に思っているのは、私なんかの小さい時は「市比野（いちの）」と云っていたですよ。今でも「いちの」と云うんじゃないかな。

平田 市比野（いちの）をですか。

桐野 はい、「いちの」。確かにそうです。「いちの」なんて云うたかて、わいがよかぶっせえ、

そんなことを云うて、となる。（笑い）。小園 「いちの」ですか。

桐野 「いちの」と云いよかったです。

青柳 道に植えられる木がいろいろあります。境界の木、一里塚に植えられている木とか。その中で重要なのが桺（いのし）と一つ葉、それから柞（くじ）の木です。郡山から八重山に登って行くところの油須木（ゆすき）に、柞の木と一つ葉を抱かせて合わせた木があるのです。道から見えるのです。桺の木にしても柞の木にしても、そんな意味深い木じゃないのかと思うのです。

桐野 まぁ、人間が使っているのだからやっぱり根拠があるのでしょうね。この頃は「いちひの」と小学校の子供が云うんじゃないかと思うのですが、私の頃は完全に「いちの」でした。

平田 「いちの」というのが地元で定着した呼び名だった。それを行政的・教育的に「いちひの」に変えてしまったというわけですね。

二見 苗字にも市野（いちの）というのがありますね。さらに「之」を入れて市之野とか市野々とかそれが地名で残っている所があるんですよ。やっぱり関係があるんですか。

平田 それは追求してみる必要がありますね。「市」が開かれる場所として。

江之口 市野・市野々は鹿児島県は多いですよ。藤井先生が比定されたのも「市野々」ですよね。

花園 市（いち）も町（まち）も語源においては「市」を意味するとかいうのですよね。

小園 日本後紀は「株野」を使っておりましたからね。それから、あと一つ。古代の駅・官道を調べていくうちに、宮崎県の場合は駅と神社の結びつきが強いことを感じました。鹿児島県も蒲生と蒲生八幡はつながっていると思うのです。神社との結びつきは交通安全を祈る意味からも信仰があったと思うのですが、阿久根や網津に有名な神社はないのか。

市来や田後は神社との結びつきはないのか。もし、子神社との結びつきがあるとしたら、大隅国・薩摩国の古代の官道の正確な場所が追求できるのではないかと思ったりしているのですけど。

江之口 木下先生の説では「早馬」が駅路に関係があるのでないかと手紙をもらったことがあるのですが、川内は早馬はどこでんあっどと云うてやったら、それから手紙をくいやらんとですけど。

青柳 この資料にも早馬はあります。早馬のはじまりは大体その駅に使われた駅馬。駅馬(跡)から來てるのじゃないかと思うのですけど。

江之口 ハヤマツミノカミもあります。山の神。

小園 早馬が駅制に関係があるというの、資料的に出て来れば確信が持てるのですけど。早馬というのの中世以降、近世あたりのじゃないかなと

青柳 それが八幡会？

平田 うーん。

小園 八幡には御靈会が多いですからな。

江之口 早馬の文献は、中世はありません。

平田 次の会合の時間が迫っていますから今日はこれで終りにします。ご苦労さまでした。

青柳 それが八幡会？

平田 うーん。

小園 八幡には御靈会が多いですからな。

江之口 それが八幡会？

青柳 それが八幡会？

小園 それが八幡会？

青柳 それが八幡会？

いう気がするんですけど。もし資料的にそれを示すものがあれば教えて下さい。

青柳 それから、シャンシャン馬ですね、あれはと思うのですけど。若駒の調教の仕方が、ですね。

平田 うーん、初午祭というのは追求してもいいなと思うけど。あれは国司が都に物を送る時に祭りをやった名残もあると思うんだよ。ただ単に初午の日の祭りだけじゃなくてね。そういう語呂的なひっかけもあると思うのです。

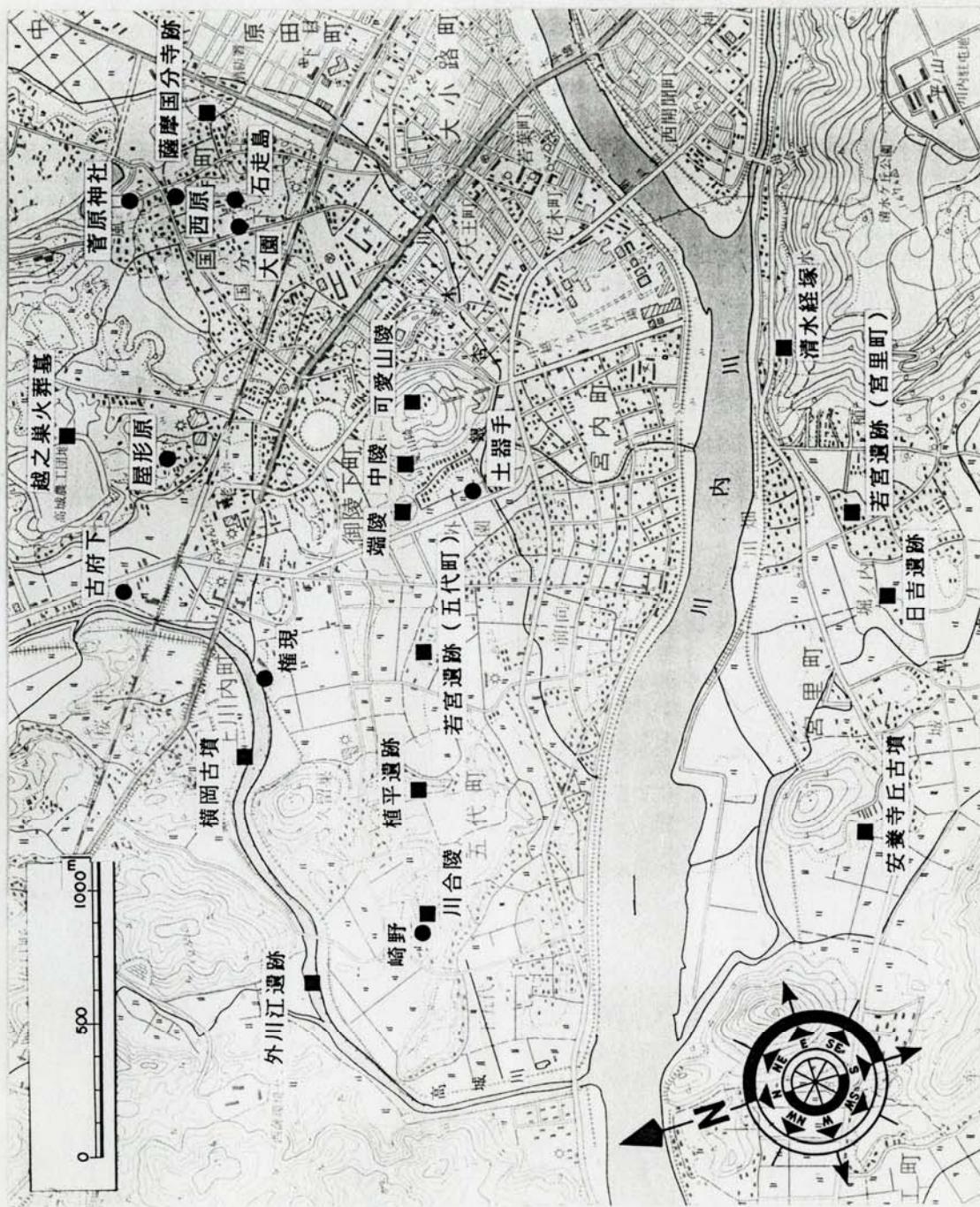
小園 それが八幡会？

平田 うーん。

小園 八幡には御靈会が多いですからな。

江之口 早馬の文献は、中世はありません。

平田 次の会合の時間が迫っていますから今日はこれで終りにします。ご苦労さまでした。



薩摩國高城郡
水引鄉埃之山陵并
端之陵中之陵及
俗云可愛之陵
等之圖

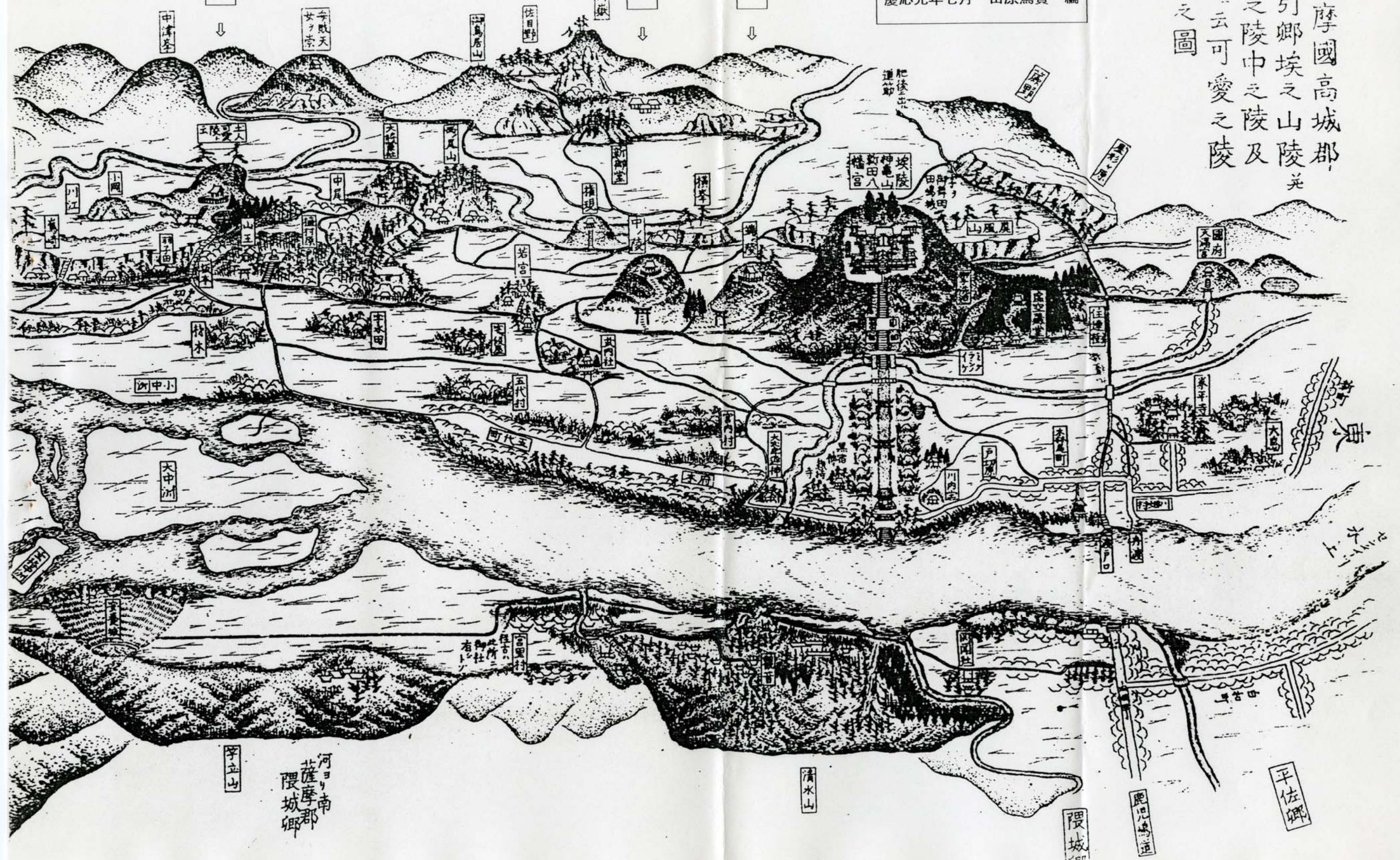
『神代山陵』=聖蹟図志所收
都立中央図書館特別文庫・藏
慶応元年七月 田原篤實・編

現川合陵

現端之陵

現中之陵

北



可愛山陵の「川内の五説」について 要旨

鹿児島地名研究会
4:3/1 江之口汎生
4:2/53/53

《はじめに》

I この資料は『可愛山陵の川内の五説について』(3-12-17) ⇒『改訂 可愛山陵の川内の五説について』(4-2-12)を更に添削したものである

II 2年9月2日の例会配付の資料は

『可愛山陵の研究』

⇒前半は中世新田宮の祭神関係記事

⇒後半は江戸時代の可愛山陵の位置を知る目的で作成

『文献から見た可愛山陵の変遷』

⇒上記資料から判明した事項

∴ポイント (1)江戸時代川合陵が可愛山陵であった

(2)上記説は明治7年の御裁下當時まで続いたと推察される

(3)慶長年間以降領主によって可愛(川合)山陵が修復されたなど

III この資料作成の目的

『記・紀』『延喜式』の表記からして当初から所在不明と推察され

・材料不足の現状では所在の追求には無理としつつも

・13世紀以来の可愛山陵=千臺説などを始め諸説があり

・うち千臺説には五説があり背景等の比較検討が必要

【1. 可愛山陵=川合陵説について】(別紙『可愛山陵の研究』(2-4-10 作成) 参照)

・慶長7年(1602) 川内の棟札No.1・神社調

・延宝3年(1675) 一宮巡詣録=橋三喜

∴ポイント (1)以来明治7年御裁下まで川合陵が可愛山陵

(2)慶長年間に領主が可愛(川合)山陵を修復

【2. 国柱の可愛山陵の見解】(端陵説・中陵説の背景)

A 寛政7年(1795) 名勝考には社殿下説 ⇒<今新田宮在處即は所藏皇孫玉體之處也>

∴ポイント (1)…然天書之所記蓋得洋矣

(2)建長八年文献に…山頂は陵の地と申よしもなけれハなり…

(3)「中(端)陵者而山巔安盤石數行…其下有石櫛」

(4)『日向古墳備考』があり、墳墓の地域差を無視

▲で当初の社殿下説を捨て中(現・端)陵

: <可愛陵ト云ハ即新田宮ノ社殿ノ下ナルヘクモ被思候得共…>『旧史官調』

a 文政10年(1827) 神代三陵志=後醍醐真柱(平田篤胤の古史傳卷三十一所収)

: <…謂る新田宮の鎮座地か、又御社の背に堆地のある其處などにや猶熟探べき也>

∴ポイント (1)前年の『新田宮參拝記』では可愛山陵は川合陵(推察)

(2)明治二年の神代三陵志と内容的な相違は少ない

・中陵石櫛発見は「文化二三年の頃」「端陵」

・古文書引用が少ない

(3)ニヶ所のうち断定は避ける

* 『古史傳卷三十一の成立過程』(『愛媛の先覚者③』より)

・平田篤胤生存中に卷28までと卷29・卷30の一部分を書き残す

・明治13年矢野玄道請われて卷29上・卷29中・卷29下・卷30を脱稿

・明治16年官命で南九州方面等の資料収集の旅(島津家・執印家)

・明治19年卷31～卷37を脱稿

* 龜山山頂説は西遊雜記=天明3／新田宮禮讚詩=天明6／忠敬測量日記=文化9年

B 寛政4年(1792) 神代山陵考

寛政7年(1795) 名勝考は中(現・端)陵説

∴ポイント (1)神代山陵考の「三陵一体」は神社撰集が初見

(2)人の疑い (2)名勝考は文化三年以降の加筆がある

(3)三陵の中央で天書の縁之中山之嶺陵

(4)当時三陵中「御陵」と判るのは端陵のみ

C 文化11年(1814) 神代三陵取調書(=旧史官調)は???

∴ポイント (1)前二書とは中・端の呼称が逆

(2)文化三年石櫛発見が端陵→中陵へ

⇒(1)と(2)は連動し、可愛山陵=中陵説への伏線力

(3)ここでも天書の縁之中山之嶺陵

△文化三年中陵に石櫛発見による変更力⇒呼称の不自然さが解消

: 端は川合陵に起因した呼称となり川合≠可愛の彼の立場に矛盾

D 文化12年(1815) 三州神陵図(=神代山陵圖状及其由来記)は現・中陵説

∴ポイント (1)「神陵圖伴信友天保三年」(時人跋文)

(2)「高三百間余」は伴信友の加筆か

* 上記二点は国柱の中風の発病時期に關係

* 『「付図」の年代』(別作の資料『可愛陵図と神代三陵の近代資料』参照)

①【躑躅名勝考】 ⇨文化三年～文化十一年七月十日の間カ

- ・文化3年に中陵の松古枯、同11年7月10日大風で更に一本倒壊
- ・松木古枯を本文は端陵とし、付図は中（三本松）とす
- ・付図説明文に「中陵ヲ首トシ端陵ヲ頭トシ…」は？？？

②【薩隅日三州神陵図】 ⇨文化十二年の頃カ

- ・中陵2本松、鳥居（文化11年11月直後建立カ）、灯籠（御附2脚）なし
- ・旧史官調の付図カ（神代三陵圖状及其由来記カ=薩州群書一覧）
- ・旧史官調は直後の「三山陵修復」と連動カ

【3. 新田宮社殿下説について】（国柱・真柱説は省略）

- ・慶応元年（1865） 神代山陵=田原篤實

∴ポイント (1)嘉永三年云々は疑問

- ・他に地理纂考のみで寺社巡詣録・神代三陵志には出ず
→田原篤實と樺山資雄は地理纂考の編纂に参画
- 神代山陵と地理纂考は共に中・端の呼称が逆
- ・手水鉢銘 <新田宮御造営嘉永元年三月始而二年四月而成就>

(2)文化三年中陵石碑発見と混同カ

<……磐石もて圍めり 今云ニ云石碑の如し此中之陵より……>

(3)嘉永年間の修造は棟札無く未完成

【4. 新田宮背後（現在地）説について】()

- ・明治6年（1874） 可愛山陵実検勘註=山之内時習証

: <…御陵ノ御石構ハ御山ノ中心地平近キ所ニ座マスベキ歟モ計リガタク…>

∴ポイント (1)同書は神代三陵志の「現地照合」

(2)自身による古文書等の検討が不十分

(3)祭神は八幡としながら瓊々杵尊

【5. 「川内五説」のまとめ】

（川合陵説）⇨歴史的にまた実績上からも江戸時代以降は可愛山陵

*それ以前は不明

（端・中説）⇨躑躅名勝考・図会とも「天書の縁之中山之巔陵」

◇名勝考は「中陵石碑発見前」で端陵=可愛山陵

→天書の中山に合致させたので「三陵中の中陵」⇨のち変更

◇図会は「中陵石碑発見後」で「龜山の中陵」

（山頂説）⇨社殿下・背後説とも根拠が薄く疑問

▲古文書等の検討が不十分で我田引水様の引用が多い ⇒不都合な文書は無視

【6. 新田宮縁起の可愛山陵について】（可愛山陵の原点）

▲現端陵の露頭遺跡 ⇒ 当時既に露頭していたカ

- ・安元2年文書に「山頂=御陵」は伺えない
- ・江戸時代においても「三陵」であり山頂を含むと四陵になる
- ・三陵中文化三年中陵に石棺発見以前に明確に御陵と知るのは端陵のみ

△江戸時代の可愛山陵=川合陵は「宮・陵は別の場所」の発想カ

【7. 中世新田神社の祭神について】（新田神社の変貌）

《編年史料は省略=『改訂 可愛山陵の川内五説について』『宮内八幡山の御祭神』参照》

建保2年（1214）『新田宮縁起』に瓊々杵尊登場（八幡を容認する記述あり）

..見塩土翁而構城壁雉堞起高城千臺宮之處也

..可愛陵八幡宮者即天尊圓寂塔也

..『日本國薩州高城千臺可愛陵新田八幡宮大菩薩縁起』

..今者既云八幡宮、何謂天尊瓊々杵尊乎…

..我八幡新田宮者是自天照太神第三代彼八幡宇佐宮自天照太神第二十一代…

△これ以前は八幡神又は宇佐・男山との関係を伺わせる文書あり

△この間 2-20/1-25/2-21/2-25の各文書はいずれも八幡神

△「可愛陵」の表記は明治期まで持続

△現存縁起の書写年は寛文五年ではなく明治20年以降

→「西有三陵中陵・端陵・川合陵云々」は矢野玄道が実検した

→寛文五年当時は川合=可愛陵で「今云河合者誤也」は有り得ない

宝治元年（1207）三所明神并五神御体為新田宮

..八幡三所に新たに五神御体が加わるも未だ瓊々杵尊は出ない

建長8年（1256）初めて新田神社文書に瓊瓊杵尊登場

△建保2年～建長8年の42年間は八幡→瓊々杵尊への脱皮期間

△宝治元年の文書はその緩衝地帯の役目

△瓊々杵尊の出発点は新田宮縁起である⇒学問的に内容検討の必要性

▲新田神社は本来弥勒寺領新田庄の鎮守で八幡神を祭祀したもの

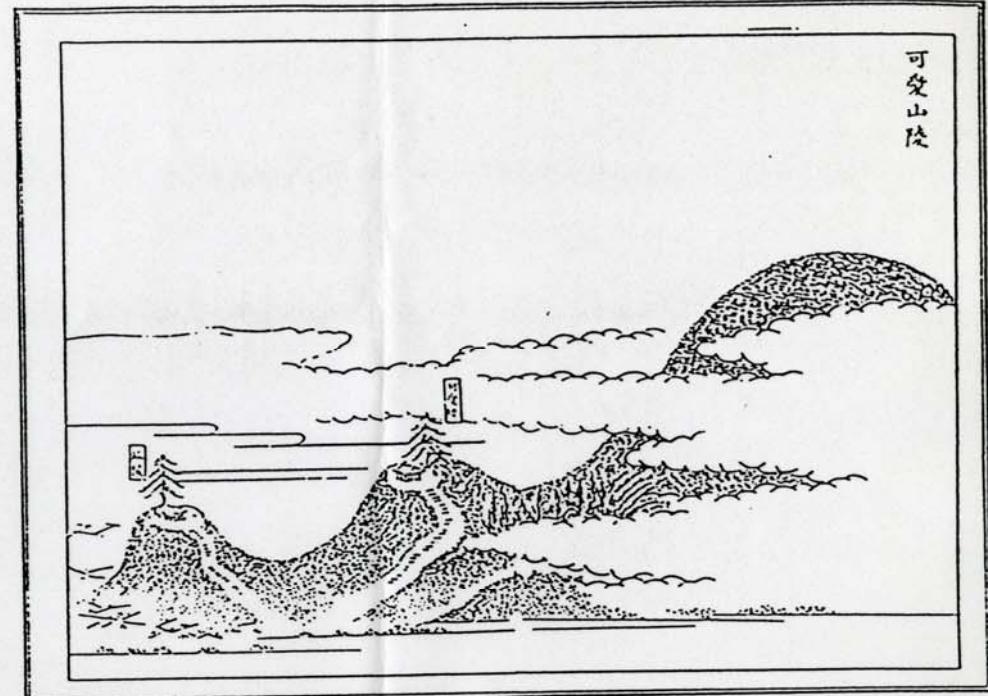
【8. 新田神社の神王面の記事について】

《編年史料は省略=『改訂 可愛山陵の川内五説について』参照》

▲神王面は正八幡にもあり（始2年1088瓊々杵尊とは別物）

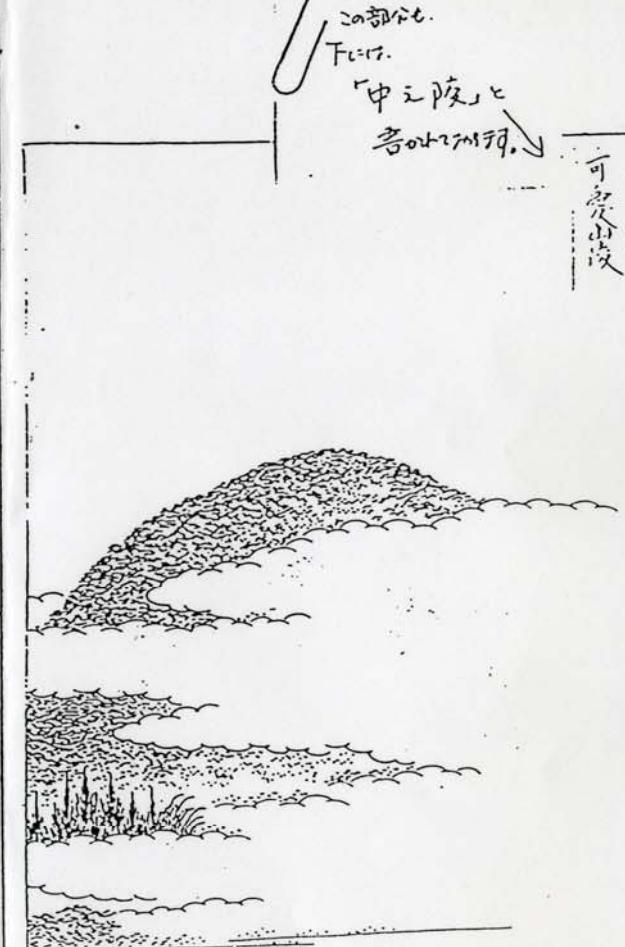
【付節II】【祭神関係の編年資料】《新田神社の変遷／右数字は文書番号》

長和2 102 入来院の寄進田（=祐元の五代田力）
長元7 104-12 宇佐宮彌勒寺講師元命大隅八幡宮檢知疏文書・史籍
保延元 113 五大院政所正信所 高城東郷同仲郷入來院彦摩郡井・院主石清水権主大法師 2-02
嘉応3 117-12 八幡新田宮源明王右一補任検校之職…
承安3 118 (建久6年文書) 神殿十二月十八戌時為香油火焼失畢…鷗社頭実檢言上如件 2-1
安元2 119 早催國衙可令遂造營也…而云宇佐神殿云男山宝殿皆是所奉祝山頂也者 2-06
建久5 119 八幡弥勒寺御領彦摩国新田□□ 2-10
" 6 115 實檢 新田宮神殿全破事 御殿・若宮殿・武内社 2-11
" 8 117 (図田帳) 弥勒寺御領 五大院 八幡新田宮 日置莊 益山莊 2-12
" 9 118 八幡新田宮御燈□免田…高城郡字谷口田… 2-13
建仁2 120-12 八幡新田宮欲被殊任院庭御下文并國司御應宣…
建暦4 121 (承安3年12月炎上) 御殿並神宮寺等損色事…高良社 善神王社 神宮寺 2-18
建保2 122-13 高城千臺可愛陵新田八幡宮大菩薩緣起=可愛八幡新田宮者即天尊円寂塔也
承久3 123-13 庁下 諸郡郷院 可早任先例 令勅仕八幡新田宮御放生雜事 2-20
" 10 八幡新田宮者大菩薩崇廟之靈社 1-25
寛喜2 124 日本鎮守八幡三所大菩薩當國鎮守開門大明神（權執印・阿多院田庄司） 2-21
延応元 125-12 八幡新田宮御燈油免田毫伍段… 2-25
宝治元 126 当社者八幡三所明神之垂跡九州五所別宮專為第一 恭有五体神王面日向國天降之當初五部神前行給薩摩國遷御之後者龜山峰奉崇三所明神并五神御體為新田宮 2-30
建長8 126 謹按日貫天尊瓊瓈杵尊圓寂可愛陵高城千台宮今新田八幡宮是也 2-36
永仁7 126 正殿四所社武内以下數字造營猶未作寺社在之然而仮殿朽損 不及遷宮 2-82



【付節III】【神王面関係の編年資料】《宇佐神宮史・古史傳・神代三陵志等所収》

寛治2 103-2 正八幡宮損失寶物神王面形一枚物依為往古靈物…
嘉応2 110-22 新田宮注進御輿唐鞍神王駕輿丁等御陵京也… 史籍・故譜
文治4 115-11 長御前所十二人 内陣道二人正・助 書生十人 韓経説・史籍
建暦3 125-12 御杖人・陣道長御前一人奉持鉾參…
嘉禎2 126-11 陳道面等修理料田一段 辨官可募之 韓経説・史籍
宝治元 126-10 ①…彼面者往古之靈物大菩薩之御軀也…承久之頃正八幡宮… 1-71
②…阿多郡北方地頭鮫島刑部丞家高法師条々所行難遇罪科之間… 2-29
③…奪取一神王面并御鉾打破二神王面間事…國家鎮護王面也… 2-30
④…又八幡宮寺申新田宮申神王面事先内々可尋准據例於官外記 紙記
宝治2 126-11-6 今夜新田宮神王面可奉歸本社事並修理事 遺詔禁公記
⑤…(閏)…新田宮神王面事可返本社間事於直庶有議定 紙記
建長元 129-8-5 (?)…神王面修復并清祓事、去月二十九日御返報承知子細之理… 2-31
建長元 129-8-11…神王面破損下手人阿多郡北方前地頭鮫島刑部丞家高法師… 2-32
文永12 135-2 …然為蒙古降伏神王等悉赴彼國戰之由…是鎮護國家尊神之故 2-50
-1 …神王面破損下手人間事…五神ノ社ハ当分左接二十四社ノ中ニテ 既譜2仲
不詳 -1-2…神王面修復官祓間事、院宣并府宣如此 王面事者 宰府自元領狀勿論也 1-27
不詳 -1-2 新田宮所司神官等申神王面破損下手人間事 八幡檢校法印状… 2-26



薩摩郡櫻野村・櫻野駅について

青柳俊二

平成四年三月一日

鹿児島地名研究会

(はじめに) 古代薩摩郡の境域は、「川内川以南の地域」とされている。私も、これについては疑うを容れまい。薩摩郡の南限についてはどうだろうか。八重山、冠岳、を境にして理解されてきたようである。これについては、少し疑問があつた。

薩摩国府(川内)と大隅国府(国分)間の駅伝路は、鹿児島県の交通の現状に照らすと、八重山、冠岳の南を回って、蒲生駅に向つたとするのが自然と思う。とりわけ、鹿児島市の極端な肥大化は、南回りの交通の歴史的な集積の結果と理解しており、古代駅伝路とこれとは別のことがらとする訳にはいかない。そこで、薩隅間の駅、田尻(後)と櫻野駅が薩摩郡内にあつた歴史的事実(日本後紀)がいかがつてくる。

南回りの駅伝路を私が想定したのは、日置郡郡山町厚地の「花尾神社」→花尾(權限社)と「厚地村」の性格について考えたのが初めてで、それに加えて、鹿児島郡「在次」郷は、「次へ駅」が在る郷とアピールしていると思う。

そういう訳で、薩摩郡と日置郡・鹿児島郡の境界について新しく考える必要がてくる。

櫻野(いちじの)に照今する地名は、「市比野(樋脇町市比野)」があるが、郡山町にも「樂樂の木場」という歴史上の地名がある。(厚地地区長野・郡山地区北ノ段附近・入来峠のあたり)「厚智山境目日記」いちじの木場と読めるが疑問はあるが、「いちじのは」探せばある地名といふともいふ。南回りの駅伝路に、まことつづくよつづる薩摩郡境界を想定することは可能なことと確信している。

薩隅間の駅伝路についてはたくさん問題点があるが、準備として、延喜式駅伝路の理解の仕方にについて検討してみた。もう一つ、「駄」にかかる地名を検討してみた。

なお、木下良氏によれば、駅間の基準距離三〇里は約一六kmとなる。

7 厚智山境日記 円融院常住

薩摩國滿家院厚智山大境之事

一秋吉川西のはなよりはしめてほしかせにうの

尾を外さり

一けし山せとのくち松を乃原道をかきり

一なすい田西乃尾猿おこしはさの上道をかきり

一ゆすの木の原めんをかきり

一水かうちはりこ谷夕かくら道をかきり

一土勢との口いいちの尾まちはへうへの合内く

ぬ木つかより中の木場ふみわたしてしりかく

め乃坂佛の尾をかきり

一樂の木場屋敷半分厚智領ふくりきりのところ

屋たけ乃つしたまり水の尾をかきり

一あふき山の尾をかきり花尾嶽の社柱ニ本大隅

其よハあつち領

一れ山の堂柱ニ本ハ厚智領ニ本大隅

一境乃原尾をかきり

一王子の馬場をかきり王子の山田多羅くちをか

きり

仁治三年甲寅拾月十四日 やうきん定之

(花尾神社の中世文書)

(鹿児島と云う地名についての一つの考察)

五味克夫

中西進

万葉集

講談社文庫

鹿児島県地名大辞典

地名研究会の資料

木下良

国府

教育社歴史新書

中村明哉
花尾潔

隼人文化十二号
鹿児島と云う地名についての一つの考察
古代交通の歴史と地名の比較考

表1 駄伝制の3要素

米津天神 老松天神(出水市莊) 湯田浦天神(川内市) 藤川天神(東郷町) 管原神社(川内市 国分寺町)	伝馬	驛	は馬
天馬 龍馬 天満	天馬 龍馬 天満	次 → 月 突 → 塚 引 幸 → 遂・轍 → 雪	早馬
天神	湯	馬頭観音	
突 → 甲室川	次 → 百次	(川内)	
高次 → 高次田土手 (出水市六月田)	光桑次・指月	(市北野)	
引 → 水引・百引 (川内市輝北町)	在次郷	(鹿児島郡)	
	幸 → 雪元・油須木	(郡山)	
	塚 → 高塚	(東市来町養母)	
		(鹿児島市岡之原町)	

駄伝路が実際に存在したのなら、その跡形は必ず残っているはず。地名を調べてみたが、民間交通に紛れてしまうものか、どの言葉もあり、になり、「官駄」を決定づけるのは難しい。私なりに、工夫して、「驛」の類縁語と、馬と信仰の関りを想定してみた。
 延喜式内社と三代実録記載の官幣社は、(薩摩國)全て交通神であるという理解をしていく。
 早馬元(養母)
 = (鹿児島市岡原町)
 早馬(出水市六月田)
 羽山平(市来町大里)
 早馬迫(市来町長里)
 早馬(郡山町麓)
 早馬岡(吉田町本名)
 浜弓場(串木野市)
 羽山(川内市百次)
 早馬段(入来町副田)
 早馬、早馬迫(=浦之名)
 (に限り)